

館報 1993 42

ANNUAL REPORT

BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団

ブリヂストン美術館

石橋美術館

石橋財団
ブリヂストン美術館
石橋美術館

館報

第42号(1993年度)

ANNUAL REPORT
No.42 (1993)

BRIDGESTONE MUSEUM OF ART
& ISHIBASHI MUSEUM OF ART
Ishibashi Foundation

Annual Report No.42 (1993)

**Bridgestone Museum of Art
& Ishibashi Museum of Art
Ishibashi Foundation**

**Published by Ishibashi Museum of Art, Ishibashi Foundation
1015, Nonaka-machi, Kurume-shi, Fukuoka-ken 830, Japan
October 1994**

目次 Contents

1	設立趣旨, 機構・運営	4
	Brief History, Organization & Management	5
2	主な記録	6
	ブリヂストン美術館	
	・特別展他	10
	・土曜講座他	12
	石橋美術館	
	・特別展他	15
	・美術講座他	28
3	1993年度入場者数	29
4	新収蔵作品 New Acquisitions	30
5	修復記録	31
6	研究報告	38
7	美術館案内 Guide to the Museums	78
8	石橋財団職員	79

設立趣旨

ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、石橋正二郎(1889-1976)が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952年(昭和27)1月8日、ブリヂストンビルディング竣工とともに同ビル内に開設されたものである。その後1956年(昭和31)4月に設立された財団法人石橋財団がその経営を継承し、1961年(昭和36)9月には同財団が石橋正二郎から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、1959年(昭和34)5月には面積が二倍に拡張されると共に、設備に大改良が加えられた。

石橋美術館

石橋美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎が1956年(昭和31)4月26日、同社の創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977年(昭和52)、石橋正二郎の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその経営に当たっている。

機構・運営

石橋財団

(1994年3月31日現在)

理事長	石橋幹一郎
理事	盛田昭夫、有田一寿、真藤 恒、内田 宏、嘉門安雄、中川 洋、楠 晋次、大原 譲
監事	亀徳正之、唐澤高美、鶴澤昌和
評議員	石橋幹一郎、鶴澤 晋、石井公一郎、小林行雄、河北倫明、朝吹三吉、石橋 寛、真藤 恒、高崎芳郎、有田一寿、橋口 収、高階秀爾、友部 直、喜多村禎勇、徳永徳次郎、三木常正、富山秀男、嘉門安雄、中川 洋、大原 譲、朝比奈仙二

美術館運営委員会

委員長	石橋幹一郎
委員	河北倫明、脇田 和、高階秀爾、友部 直、谷口鉄雄、鈴木健二、石橋 寛、富山秀男、嘉門安雄、中川 洋

寄付助成選考委員会

委員長	有田一寿
委員	内田 宏、鶴澤昌和、友部 直、吉久勝美、加嶋昭男

常務理事

大原 譲

事務局

事務局長 朝比奈仙二

ブリヂストン美術館

参与	久保貞次郎						
館長	嘉門安雄	事務部長	尾島 聡	学芸部長(兼)	嘉門安雄	学芸課長	宮崎克己

石橋美術館

顧問	谷口鉄雄						
館長	中川 洋	事務部長	平井麟之輔	学芸課長	田内正宏	学芸課・課長	橋富博喜

BRIEF HISTORY

BRIDGESTONE MUSEUM OF ART

On January 8, 1952, in celebration of the completion of the Bridgestone Building, Shōjirō Ishibashi(1889-1976), ever mindful of the promotion of cultural development in Japan, opened to the public an art gallery within the building, under the name of "Bridgestone Gallery." Ishibashi's personal collection formed the nucleus of the exhibits of paintings, sculptures and other objets d'art. In April 1956 the management of the Gallery was taken over by the Ishibashi Foundation, and in September 1961 Shōjirō Ishibashi donated numerous art works of his collection to the Foundation. In May 1959 the Gallery was considerably enlarged and entirely renovated, and in January 1968 the English name was changed from "Bridgestone Gallery" to "Bridgestone Museum of Art."

ISHIBASHI MUSEUM OF ART

On April 26, 1956, in celebration of the 25th anniversary of the founding of Bridgestone Corporation, Shōjirō Ishibashi, the founder of the company, donated the Ishibashi Cultural Center to the city of Kurume, his native place, for the purpose of rendering services to the public and promoting cultural development. The Museum (originally called "Ishibashi Art Gallery") is the main institution of the Center. In 1971, the English name was changed from "Ishibashi Art Gallery" to "Ishibashi Museum of Art." In 1977, thanks to a contribution of the bereaved family of Shōjirō Ishibashi, the building of the Museum was reconstructed and extended, and in April of the same year the Ishibashi Foundation was entrusted with the management of the Museum by the city of Kurume.

ORGANIZATION & MANAGEMENT

Ishibashi Foundation

(As of March 31, 1994)

President of the Board of Directors Kanichirō Ishibashi

Directors	Akio Morita Yasuo Kamon	Kazuhisa Arita Yō Nakagawa	Hisashi Shintō Shinji Kusunoki	Hiroshi Uchida Yuzuru Ohara
Auditors	Masayuki Kitoku	Takami Karasawa	Masakazu Uzawa	
Councillors	Kanichirō Ishibashi Michiaki Kawakita Yoshirō Takasaki Naoshi Tomobe Hideo Tomiyama Senji Asahina	Susumu Uzawa Sankichi Asabuki Kazuhisa Arita Sadao Kitamura Yasuo Kamon	Kōichirō Ishii Hiroshi Ishibashi Osamu Hashiguchi Tokujirō Tokunaga Yō Nakagaza	Yukio Kobayashi Hisashi Shintō Shūji Takashina Tsunemasa Miki Yuzuru Ohara

Executive Committee of the Museums

Chairman	Kanichirō Ishibashi			
Members	Michiaki Kawakita Tetsuo Taniguchi Yasuo Kamon	Kazu Wakita Kenji Suzuki Yō Nakagawa	Shūji Takashina Hiroshi Ishibashi	Naoshi Tomobe Hideo Tomiyama

Selection Committee of Contribution and Subsidy

Chairman	Kazuhisa Arita			
Members	Hiroshi Uchida Akio Kashima	Masakazu Uzawa	Naoshi Tomobe	Katsumi Yoshihisa

Managing Director Yuzuru Ohara

Administration

Executive Secretary Senji Asahina

Bridgestone Museum of Art

Councillor	Sadajirō Kubo				
Director	Yasuo Kamon				
Administrator	Satoshi Ojima	Chief Curator	Yasuo Kamon(Director)	Curator	Katsumi Miyazaki

Ishibashi Museum of Art

Adviser	Tetsuo Taniguchi				
Director	Yō Nakagawa				
Administrator	Rinnosuke Hirai	Chief Curator	Masahiro Tauchi	Curator	Hiroki Hashitomi

《特別展》

モネ展

1994年2月11日(金)―4月7日(木)

主催：石橋財団ブリヂストン美術館/東京新聞/TBS

後援：フランス大使館

協賛：安田火災

協力：日本航空

出品内容：油彩74点

入場者総数：310,915人

1. 《ルエルの眺め》/1858年/油彩・カンヴァス/46.0×65.0cm/個人蔵, 日本
 2. 《オンフルール近くの小さな造船所》/1864年/油彩・カンヴァス/55.0×81.0cm/個人蔵(ヒルデガルド・フリッツ=デネヴィル画廊協力)
 3. 《オンフルールの海岸》/1864年/油彩・カンヴァス/60.0×81.0cm/ロサンゼルス郡立美術館
 4. 《釣り船》/1866年/油彩・カンヴァス/45.0×55.0cm/ウイルデンスタイン東京
 5. 《サン=タドレスの断崖》/1867年/油彩・カンヴァス/54.0×79.0cm/松岡美術館
 6. 《サン=タドレスの通り》/1867年/油彩・カンヴァス/79.7×59.0cm/クラーク・アート・インスティテュート
 7. 《ハイド・パーク》/1871年/油彩・カンヴァス/41.0×74.0cm/ロード・アイランド・デザイン学校美術館
 8. 《テムズ河と国会議事堂》/1871年/油彩・カンヴァス/47.0×72.5cm/ロンドン・ナショナル・ギャラリー
 9. 《読書する女》/1872年/油彩・カンヴァス/48.5×65.1cm/ウォルターズ・アート・ギャラリー
 10. 《アルジャントウイユの春》/1872年/油彩・カンヴァス/51.0×65.0cm/ポートランド美術館
 11. 《アルジャントウイユのセヌ河》/1873年/油彩・カンヴァス/50.5×61.0cm/オルセ美術館
 12. 《アルジャントウイユの散歩道》/1872年/油彩・カンヴァス/50.5×65.0cm/ワシントン・ナショナル・ギャラリー
 13. 《アルジャントウイユの洪水》/1872年/油彩・カンヴァス/54.4×73.3cm/石橋財団ブリヂストン美術館
 14. 《貨物列車》/1872年/油彩・カンヴァス/48.0×76.0cm/個人蔵, 日本
 15. 《ルーアンのセヌ河》/1872年/油彩・カンヴァス/49.2×76.2cm/静岡県立美術館
 16. 《木の橋》/1872年/油彩・カンヴァス/54.0×73.0cm/ラウ財団, チューリッヒ
 17. 《キャプシヌス大通り》/1873年/油彩・カンヴァス/79.4×60.6cm/ネルソン=アトキンズ美術館
 18. 《アルジャントウイユの橋》/1874年/油彩・カンヴァス/54.5×78.0cm/セントルイス美術館
 19. 《散歩》/1875年/油彩・カンヴァス/59.5×80.0cm/ISETAN, 東京
 20. 《アルジャントウイユ》/1874年/油彩・カンヴァス/42.0×70.0cm/個人蔵, 日本
 21. 《雪のアルジャントウイユ》/1875年/油彩・カンヴァス/55.5×65.0cm/国立西洋美術館
 22. 《雪のアルジャントウイユ, 黄昏》/1875年/油彩・カンヴァス/53.0×64.0cm/マルモッタン美術館
 23. 《庭のカミュー・モネと子供》/1875年/油彩・カンヴァス/55.0×66.0cm/ボストン美術館
 24. 《アルジャントウイユのセヌ河》/1875年頃/油彩・カンヴァス/43.0×73.5cm/マイルス・ジョエル氏蔵
 25. 《サン=ラザール駅》/1877年/油彩・カンヴァス/60.0×80.0cm/個人蔵, 日本
 26. 《スマイルの花束を持つカミュー》/1876-77年/油彩・カンヴァス/116.0×88.0cm/個人蔵, 日本
 27. 《アルジャントウイユの花咲く堤》/1877年/油彩・カンヴァス/54.0×65.0cm/個人蔵, 日本
 28. 《薬ぶきの家》/1879年/油彩・カンヴァス/48.5×64.5cm/ISETAN, 東京
 29. 《セヌ河の日没, 冬》/1880年/油彩・カンヴァス/60.0×80.0cm/個人蔵, 日本
 30. 《フェカン近くのグランヴァル》/1881年/油彩・カンヴァス/61.0×80.0cm/ISETAN, 東京
 31. 《税関吏の小屋》/1882年/油彩・カンヴァス/60.3×73.0cm/フォッグ美術館
 32. 《しけのエトルタ》/1883年/油彩・カンヴァス/65.0×81.0cm/ヴィクトリア・ナショナル・ギャラリー
 33. 《エトルタの断崖》/1885年/油彩・カンヴァス/64.9×81.1cm/クラーク・アート・インスティテュート
 34. 《ヴァルボナ山》/1884年/油彩・カンヴァス/65.0×92.0cm/ダラス美術館
 35. 《ボルディゲラのモレノ庭園》/1884年/油彩・カンヴァス/73.6×93.0cm/ノートン・ギャラリー
 36. 《ジュフォス, 夕方の印象》/1884年/油彩・カンヴァス/60.0×81.0cm/群馬県立近代美術館(群馬県企業局寄託作品)
-

37. 《ボール=ヴィエの島》/1885年/油彩・カンヴァス/55.0×73.0cm/個人蔵, ルクセンブルグ
38. 《積み藁》/1885年/油彩・カンヴァス/65.0×81.0cm/大原美術館
39. 《雨のベリール》/1886年/油彩・カンヴァス/60.5×73.7cm/石橋財団ブリヂストン美術館
40. 《ボール=ドモワの洞窟》/1886年/油彩・カンヴァス/65.0×81.0cm/茨城県近代美術館
41. 《ジヴェルニーの積み藁, 夕日》/1888-89年/油彩・カンヴァス/65.0×92.0cm/埼玉県立近代美術館
42. 《ジヴェルニーの積み藁, 朝日》/1888-89年/油彩・カンヴァス/65.0×92.7cm/個人蔵, アメリカ
43. 《クルーズ峡谷の日没》/1889年/油彩・カンヴァス/64.0×79.5cm/個人蔵, アメリカ
44. 《ラ・ロシュ=ブロン村》/1889年/油彩・カンヴァス/73.6×92.6cm/三重県立美術館
45. 《ジヴェルニーの草原》/1890年/油彩・カンヴァス/65.1×92.4cm/福島県立美術館
46. 《ポブラ並木, 曇天》/1891年/油彩・カンヴァス/91.4×81.3cm/イセ文化基金
47. 《ポブラ並木, 夏》/1891年/油彩・カンヴァス/93.0×73.5cm/国立西洋美術館
48. 《ポブラ並木, 秋》/1891年/油彩・カンヴァス/92.0×72.0cm/フィラデルフィア美術館
49. 《ルーアン大聖堂, 夕暮れ》/1892-93年/油彩・カンヴァス/100.0×65.0cm/個人蔵, フランス
50. 《ルーアン大聖堂, 朝》/1892-93年/油彩・カンヴァス/100.0×65.0cm/個人蔵(フジカワ画廊協力)
51. 《ルーアン大聖堂, 昼》/1892-93年/油彩・カンヴァス/100.5×66.2cm/ボストン美術館
52. 《コルサース山》/1895年/油彩・カンヴァス/65.0×100.0cm/個人蔵, アメリカ
53. 《コルサース山, 霧》/1895年/油彩・カンヴァス/65.0×100.0cm/ゲイ/クリフトン・レオンハルト蔵
54. 《セーヌ河の朝, 曙》/1896-97年/油彩・カンヴァス/82.0×93.5cm/ひろしま美術館
55. 《セーヌ河の朝, 清澄》/1896-97年/油彩・カンヴァス/80.9×92.0cm/個人蔵, アメリカ
56. 《チャリング・クロス橋》/1899-1901年/油彩・カンヴァス/64.5×92.0cm/村内美術館
57. 《チャリング・クロス橋とテムズ河》/1899-1901年/油彩・カンヴァス/73.0×100.0cm/吉野石膏株式会社
58. 《ウォータールー橋, 曇天》/1899-1901年/油彩・カンヴァス/65.4×92.3cm/シカゴ美術館
59. 《ウォータールー橋, 曇天・煙》/1899-1901年/油彩・カンヴァス/65.0×100.0cm/個人蔵, 日本
60. 《国会議事堂, ばら色のシンフォニー》/1900-01年/油彩・カンヴァス/81.0×92.0cm/個人蔵, 日本
61. 《国会議事堂, 夕暮れ》/1900-01年/油彩・カンヴァス/81.0×92.0cm/個人蔵, 日本
62. 《睡蓮の池と日本の橋》/1899年/油彩・カンヴァス/90.0×90.0cm/プリンストン大学美術館
63. 《睡蓮の池と日本の橋》/1900年/油彩・カンヴァス/89.2×92.8cm/ボストン美術館
64. 《睡蓮》/1903年/油彩・カンヴァス/81.5×100.5cm/石橋財団ブリヂストン美術館
65. 《睡蓮の池》/1907年/油彩・カンヴァス/90.9×72.7cm/個人蔵, 日本
66. 《睡蓮の池》/1907年/油彩・カンヴァス/92.0×73.0cm/川村記念美術館
67. 《睡蓮の池》/1907年/油彩・カンヴァス/100.6×73.5cm/石橋財団ブリヂストン美術館
68. 《睡蓮》/1907-08年/油彩・カンヴァス/92.0×94.0cm/個人蔵, 日本
69. 《睡蓮》/1908年/油彩・カンヴァス/101.0×91.0cm/東京富士美術館
70. 《黄昏, ヴェネツィア》/1908年/油彩・カンヴァス/73.0×92.5cm/石橋財団ブリヂストン美術館
71. 《日本の橋》/1918年/油彩・カンヴァス/100.0×200.0cm/マルモッタン美術館
72. 《日本の橋》/1918-24年/油彩・カンヴァス/89.0×93.0cm/アサヒビール株式会社
73. 《バラの小道》/1920-22年/油彩・カンヴァス/89.0×100.0cm/個人蔵, スイス
74. 《バラの小道》/1920-22年/油彩・カンヴァス/73.0×105.0cm/個人蔵, スイス

※展覧会カタログに掲載されている MOA 美術館所蔵の《ポブラ並木, 夕暮れ》(Cat. no.52)は、都合により出品されなかった。



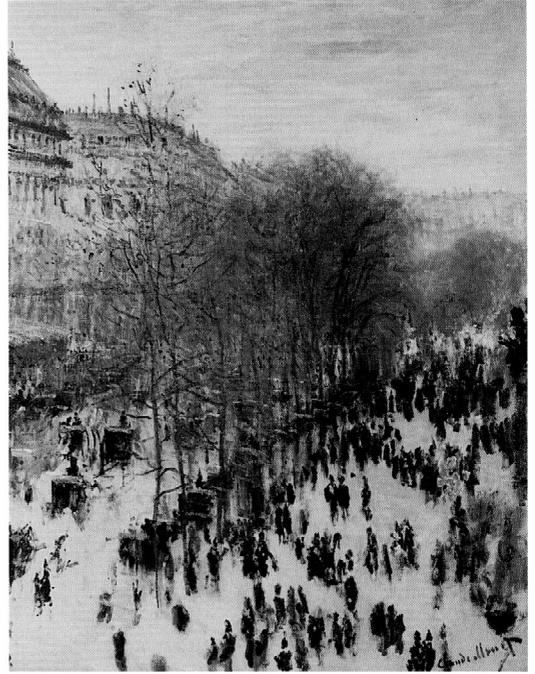
1



8



62



17



9



49



71

《特集展示》

マティス

1993年4月13日(火)―7月14日(水)

出品内容：油彩11点 素描2点 版画22点 計35点

1. 《画室の裸婦》/1899年/油彩・紙/66.2×50.5cm
2. 《静物》/1903年/油彩・カンヴァス/7.9×9.0cm
3. 《コリウール》/1905年/油彩・厚紙/24.5×32.4cm
4. 《縞ジャケット》/1914年/油彩・カンヴァス/123.6×68.4cm
5. 《横たわる裸婦》/1919年/油彩・カンヴァス/32.9×40.8cm
6. 《両腕をあげたオダリスク》/1921年/油彩・カンヴァス/45.9×38.2cm
7. 《樹間の憩い》/1923年/油彩・カンヴァス/59.0×72.0cm
8. 《石膏のある静物》/1924年/油彩・カンヴァス/52.0×64.0cm
9. 《ルー川のほとり》/1925年/油彩・カンヴァス/38.3×47.0cm
10. 《オダリスク》/1926年/油彩・カンヴァス/55.5×46.8cm
11. 《青い胴着の女》/1935年/油彩・カンヴァス/46.0×33.0cm
12. 《マルグリットの顔》/1925年/鉛筆・紙/25.5×19.3cm
13. 《リュリュと犬》/1931年/ペン、インク・紙/54.7×44.5cm
14. 《ガラニスの顔》/1914年/エッチング/14.0×10.0cm
15. 《ソファアの踊り子》/1927年/リトグラフ/29.0×46.5cm
16. 《ジャズ》/1947年/ステンシル/42.2×65.5cm
 - I 《道化師》/II 《サーカス》/III 《ロワイヤル氏》/IV 《白象の悪夢》/V 《馬、曲馬師、道化師》/VI 《狼》/VII 《ハート》/VIII 《イカルス》/IX 《形体》/X 《ピエロの葬式》/XI 《コドマ兄弟》/XII 《水槽を泳ぐ女》/XIII 《剣を呑み込む男》/XIV 《カウボーイ》/XV 《ナイフ投げの男》/XVI 《運命》/XVII 《渇》/XVIII 《渇》/XIX 《渇》/XX 《襪》

隠された肖像——美術品の科学的調査

1993年7月17日(土)―11月7日(日)

出品内容：油彩4点 資料写真および解説パネル

1. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/1866年/油彩・カンヴァス
2. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/1924-25年/油彩・カンヴァス
3. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/油彩・カンヴァス
4. 黒田清輝《鉄砲百合》/1909年/油彩・カンヴァス/石橋美術館

藤田嗣治

1993年11月9日(火)―1994年1月30日(日)

出品内容：油彩7点 素描、淡彩、岩彩8点 版画31点 計46点

1. 《巴里風景》/1918年/油彩・カンヴァス/46.0×55.0cm
 2. 《インク壺の静物》/1926年/油彩・カンヴァス/22.0×26.9cm
 3. 《婦人像》/1927年/墨、淡彩・洋紙/40.5×32.2cm/石橋美術館
 4. 《婦人像》/1927年/鉛筆・洋紙/38.6×22.1cm/石橋美術館
 5. 《少女像》/1927年/鉛筆・洋紙/37.8×30.3cm/石橋美術館
 6. 《横たわる女と猫》/1932年/油彩・カンヴァス/65.0×100.0cm
 7. 《婦人像》/1932年/墨、淡彩・洋紙/43.4×33.0cm/石橋美術館
 8. 《猫》/1934年/胡粉、墨、岩彩・和紙/24.0×33.1cm/石橋美術館
-

-
9. 《女と猫》/1938年頃/墨、淡彩・洋紙/43.2×49.4cm/石橋美術館
 10. 《猫のいる静物》/1939-40年/油彩・カンヴァス/80.6×99.9cm
 11. 《ドルドーニュの家》/1940年/油彩・カンヴァス/45.5×53.3cm
 12. 《カルポーの公園》/1940年/油彩・カンヴァス/31.8×40.9cm
 13. 《室内》/1943年頃/油彩・カンヴァス/37.5×45.2cm/石橋美術館
 14. 《人形を抱く子供》/1948年/墨・洋紙/43.3×52.5cm/石橋美術館
 15. 《裸婦》/1949年/墨・洋紙/33.7×46.0cm/石橋美術館
 16. 《自画像》/1927年/エッチング/45.5×35.2cm
 17. 《二人の裸婦》/1927年/エッチング・絹/38.5×55.0cm/石橋美術館
 18. 《猫》/エッチング/28.7×36.2cm/石橋美術館
 19. 《裸婦》/エッチング/55.8×36.5cm/石橋美術館
 20. ルネ・エロン・ド・ヴィルフォス著『不思議の河』藤田嗣治による27枚のオリジナル銅版画/1951年/エッチング
表紙/(1)エロン・ド・ヴィルフォス/(2)フジタ/(3)フォンテーヌ・デ・ジノサン——装飾頭文字/(4)レ・アール(中央市場)/
(5)パレ＝ロワイヤル/(6)マキシム(レストラン)/(7)場末/(8)宝石をつけた女/(9)ポーボー広場/(10)エリゼー宮/(11)サン＝
フィリップ/(12)フォーケ(カフェ)/(13)ロンシャン(競馬場)/(14)イギリス女王——装飾頭文字/(15)閉ざされた家/(16)レ・アール/
(17)香水の夢/(18)ヴァンドーム広場/(19)大きな美容院/(20)シャンゼリゼ/(21)マリニー/(22)町娘/(23)コレクション/(24)オペ
ラの夢/(25)シャルパンティエの売り立て/(26)テルン

《土曜講座》

通算回数	年月日	講座題目	講師
		《日本ギリシャ協会発足20周年記念—第19回ギリシャの文化と美術》	
1651	1993年 4月3日	駐日ギリシャ参事官挨拶 ギリシャと私	蜷川幸雄氏
1652	4月10日	ギリシャ悲劇と現代	国分敬治氏
1653	4月17日	エーゲ文明の人身御供	三浦一郎氏
1654	4月24日	ギリシャ人の異文化観	久保正彰氏
1655	5月8日	イカロスの眼—空から遺跡をみる	友部 直氏
1656	5月15日	ギリシャの神殿建築	堀内清治氏
1657	5月22日	ギリシャ美術, 石の語る言葉	澤柳大五郎氏
		《色彩画家の系譜》	
1658	6月5日	ドラクロワとロマン派の色彩	高橋明也氏
1659	6月12日	ティツィアーノとルーベンス	中村俊春氏
1660	6月19日	印象派・光と風土	島田紀夫氏
1661	6月26日	色彩画家マティス	中山公男氏
1662	7月3日	マティスと20世紀絵画	木島俊介氏
		《美術史と科学的調査》	
1663	7月17日	美術史研究と画像計測	三浦定俊氏
1664	7月24日	日本における美術品の科学的調査と研究	秋山光和氏
1665	7月31日	ファン・ゴッホの重ね描きについての新視点	園府寺 司氏
		《ジャポネズリー—研究学会連続講演会—博覧会の時代》	
1666	9月11日	江戸の博覧会—平賀源内から明治へ	芳賀 徹氏
1667	9月18日	博覧会都市パリとデパートの誕生	鹿島 茂氏
1668	9月25日	ジャポネズリーの演出—1873年ウィーン万国博を中心に	岡部昌幸氏
1669	10月2日	水晶宮を生んだもの—博覧会建築の世界	鈴木博之氏(中止)
1670	10月9日	内国勲業博覧会と「美術」	北澤憲昭氏
1671	10月16日	デイズニーランドという聖地—現代の神話を見せる常設博覧会	能登路雅子氏
		《地中海学会秋期連続講演会—芸術家と地中海旅行》	
1672	11月13日	ユダヤ人の音楽—地中海の西と東	美山良夫氏
1673	11月20日	ヴァレリーとカミュを中心として	饗庭孝男氏
1674	11月27日	マジョルカのショパン—彼の愛したピアノ, プレイエル	遠山慶子氏
1675	12月4日	タンジェの作家たち—M. ショクリーとその周辺	奴田原陸明氏
1676	12月11日	ゲーテとシンケルの「イタリア紀行」をたどる —ドイツ古典主義期の建築観	堀内正昭氏
1677	12月18日	ラスキンとヴェネツィア	木島俊介氏
		《モネをめぐる》	
1678	1994年 1月15日	モネのジャポニスム	馬淵明子氏
1679	1月22日	マネとモネ	三浦 篤氏
1680	1月29日	モネの連作	六人部昭典氏

《博物館実習生の受入れ》

学芸員資格取得のための博物館実習生を次のように受入れた。

期間：1993年7月27日より8月1日

8月3日より8月8日

人数：11校 25名

実習内容：

	10:30～12:30		13:30～15:00	15:30～17:00
第1日 (火)	館長 挨拶	美術館の組織と運 営	美術館内見学	レジストレーション I
第2日 (水)	保存・修復 I		図書資料の整理について	普及・教育 調査・研究 I
第3日 (木)	企画展 I		企画展 II	図書資料の整理と作業
第4日 (金)	他館自由見学		他館比較レポート作成	レジストレーション II
第5日 (土)	調査・研究 II		土曜講座聴講(16:00頃迄)	実習ノート整理
第6日 (日)	保存・修復 II		実習ノート整理	まとめ

《1993年度新収図書》

	購入	寄贈	計
和書	48冊	121冊	169冊
洋書	115冊	97冊	212冊
計	163冊	218冊	381冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

《特別展》

ジョン・ラスキンとヴィクトリア朝の美術

1993年4月4日(日)ー5月9日(日)

主催：石橋財団石橋美術館/西日本新聞社

後援：プリティッシュ・カウンシル/久留米市教育委員会

協力：日本航空/財団法人久留米文化振興会

企画協力：アルティス

出品内容：油彩12点 水彩65点 鉛筆130点 インク19点 その他15点 計241点

入場者総数：7,039人

1. ジョン・ラスキン《イタリアの地図》/1827年/インク, 淡彩/8.1×7.5cm/Bem 1384
 2. ジョン・ラスキン《スペインとポルトガルの地図》/1828年頃/インク, 淡彩/18.0×23.8cm/Bem 952
 3. ジョン・ラスキン《カンタベリー, 大聖堂の中心の塔の部分》/1832年/鉛筆/20.5×11.5cm/Bem 1189
 4. ジョン・ラスキン《ドーヴァー・カースル》/1832年/鉛筆/17.7×26.1cm/Bem 1234
 5. ジョン・ラスキン《ハンプトン・コート, 未完成の習作》/1833年/鉛筆/27.0×38.7cm/Bem 1312
 6. サミュエル・ロジャース著 詩編『イタリア』/1830年/Bem
 7. サミュエル・プラウト《市庁舎, プラハ》/リトグラフ/40.3×26.3cm/Bem 399
 8. ジョン・ラスキン《サミュエル・プラウト作<ブリュッセル, 市庁舎>模写》/1833年/インク/17.2×11.0cm/Bem 1449
 9. ジョン・ラスキン《カッセル, 市庁舎》/1833年/鉛筆/20.8×26.0cm/Bem 1198
 10. ジョン・ラスキン《トゥーン湖》/1833年/インク/14.7×21.7cm/Bem 1549
 11. ジョン・ラスキン《A.V. コプリー・フィールディング作<ロッホ・アッハレイ>模写》/1834-35年/水彩/17.8×25.8cm/Brant 9070
 12. ジョン・ラスキン《水車のある山の風景》/1834-35年/水彩/30.5×26.7cm/Bem M67
 13. ジョン・ラスキン《カレー, 鐘楼》/1835年/鉛筆, ホワイト/33.0×19.2cm/Bem 1183
 14. ジョン・ラスキン《風景のなかの建物》/1835年/鉛筆/16.1×18.5cm/Bem M38
 15. ジョン・ラスキン《ザンクト・ガレン, 街の情景》/1835年/鉛筆/24.4×19.5cm/Bem 1477
 16. ジョン・ラスキン《ザンクト・ガレン, 街の情景》/1835年/インク/23.3×16.5cm/Bem 1476
 17. ジョン・ラスキン《ルツェルン湖から見たピラトゥス山》/1835年/鉛筆/13.5×23.3cm/Bem 1435
 18. ジョン・ラスキン《ルツェルン湖から見たピラトゥス山》/1835年/水彩/24.0×28.5cm/Bem 1437
 19. ジョン・ラスキン《ミュンヘン, 王宮》/1835年/鉛筆/25.5×33.3cm/Brant 960
 20. ジョン・ラスキン《シュトゥットガルト, 修道院》/1835年/鉛筆/25.5×22.2cm/Bem 1534
 21. ジョン・ラスキン《カーライル, ギルドホール》/1837年/鉛筆/27.0×18.0cm/Bem 1194
 22. ジョン・ラスキン《トラウトベック, 古い家並》/1837年/鉛筆/25.0×35.8cm/Brant 1013
 23. ジョン・ラスキン《ブラントウッドから見たコニストン・ホールとオールド・マン》/1837年/鉛筆/19.8×29.8cm/ラスキン美術館, コニストン
 24. ジョン・ラスキン著『建築の詩』/29.0×44.0cm/財団法人ラスキン文庫, 東京
 25. ジョン・ラスキン《ダンジョン・ギル, ラングデイル》/1837年/鉛筆/34.0×24.8cm/Bem 1237
 26. ジョン・ラスキン《ダービー, 「諸聖人の塔」のある街の情景》/1837年/鉛筆/36.0×25.2cm/Bem 1229
 27. ジョン・ラスキン《ピータバラ大聖堂》/1837年/鉛筆/30.8×23.7cm/Bem 1433
 28. ジョン・ラスキン《リッチモンド》/1838年/鉛筆, ホワイト/24.0×31.2cm/Bem 1459
 29. ジョン・ラスキン《メルローズ・アビー》/1838年/鉛筆, ホワイト/49.3×34.0cm/Brant 955
 30. ジョン・ラスキン《ベンヴェニュー》/1838年/鉛筆/25.0×36.0cm/Bem 1150
 31. ジョン・ラスキン《スターリング・パレス》/1838年/インク/25.3×21.0cm/Bem 1528
 32. ジョン・ラスキン《ロスリン・チャペル》/1838年/鉛筆, ホワイト/50.5×35.2cm/Brant 987
 33. ジョン・ラスキン《ワッチェンドラス・ターン》/1838年/鉛筆/23.0×27.5cm/Bem 1678
 34. ジョン・ラスキン《ジェノヴァ, 街の情景》/1840年/鉛筆, 淡彩, ホワイト/43.8×28.3cm/Bem 1295
 35. ジョン・ラスキン《ローマ, トレヴィの泉》/1840-41年/鉛筆, ホワイトと色彩のタッチのある灰色の淡彩/34.3×47.0cm
-

/Bem 1467

36. ジョン・ラスキン《ナポリ, 街の情景》/1841年/鉛筆, 淡彩/34.0×46.0cm/Bem 1409
37. ジョン・ラスキン《ボンベイ》/1841年/鉛筆, 灰色と茶色の淡彩/30.0×46.2cm/Brant 974
38. ジョン・ラスキン《噴火しているヴェスヴィオ火山》/1841年/水彩/22.0×16.4cm/Brant 1080
39. ジョン・ラスキン《アマルフィ》/1841年/鉛筆, 灰色と黄色の淡彩/32.2×44.7cm/Brant 856
40. ジョン・ラスキン《サレルノ, 噴水》/1841年/鉛筆, 淡彩/32.3×47.0cm/Bem 1480
41. ジョン・ラスキン《テルニ, 橋》/1841年/鉛筆, 淡彩/44.5×31.5cm/Brant 1006
42. ジョン・ラスキン《ケルン, 広場》/1842年/鉛筆, 淡彩, ホワイト/33.2×48.0cm/Bem 1220
43. ジョン・ラスキン《ラスキンの最初のスケッチブック》/1831年頃/20.4×12.7cm/Bem 1518
44. ラスキンの蒐集品より 割って磨いた三つの石の標本 1. 玉髄 2. 帯状めのう 3. 苔めのう/J.S. ディアディン
45. ジョン・ラスキン《節理のある石英を含む岩の断片の習作》/淡彩, ホワイト/18.5×34.2cm/Bem 1300
46. ジョン・ラスキン《グレンフィンラスの片麻岩の習作》/1853年/鉛筆, 淡彩/19.7×33.0cm/Bem G26
47. ジョン・ラスキン《山の岩とアルペンローゼ》/1844年/鉛筆, 水彩, ホワイト/29.8×41.4cm/Bem 1395
48. ジョン・ラスキン《シャモニー, モンブランの尖峰》/1844年/インク, 水彩, 不透明水彩/16.3×21.3cm/Bem 1203
49. ジョン・ラスキン《バヴェーノ近くの山の習作》/1845年/インク, 不透明水彩/14.5×19.5cm/Brant 870
50. ジョン・ラスキン《ロートホルンとアレ・ブランシュ》/1845年/インク, 不透明水彩, ホワイト/10.3×17.0cm/Bem 1471
51. ジョン・ラスキン《ヴィルスヌーヴの山》/1846年/鉛筆, 淡彩/27.8×45.5cm/Bem 1673
52. ジョン・ラスキン著『現代画家論』第4巻/26.8×36.0cm/財団法人ラスキン文庫, 東京
53. ジョン・ラスキン《ヴヴェの山の習作》/1846年/不透明水彩, 水彩/8.0×23.8cm/Brant 1081
54. ジョン・ラスキン《ピラトゥス山》/1846年/鉛筆, 淡彩/17.7×47.0cm/Bem 1436
55. ジョン・ラスキン《ラ・セーニュ峠から見たクルマユールの眺め》/1849年/鉛筆, 水彩/20.3×35.6cm/Brant 903
56. ジョン・ラスキン《シャモニー, 大氷河》/1849年/鉛筆, 水彩, ホワイト/27.3×50.0cm/Bem 1206
57. ジョン・ホップズ?《シャモニー, 大氷河》/1849年/ダゲレオタイプ/10.7×14.5cm/Bem Dag 75
58. ジョン・ラスキン《シャモニーの尖峰》/1849年/鉛筆, 水彩/29.8×47.0cm/パーミンガム市立美術館
59. ジョン・ラスキン《ピラトゥス山》/1854年頃/水彩/7.0×20.0cm/Brant 971
60. ジョン・ラスキン《アヌシー湖に聳える山々》/1862年/鉛筆, 不透明水彩/12.0×20.9cm/Bem 1116
61. ジョン・ラスキン《フィスプ》/1844年頃/鉛筆, 水彩, ホワイト/32.7×46.5cm/Bem 1675
62. ジョン・ラスキン《ローザンヌ城, 月の出》/1845年/鉛筆, 水彩/25.0×37.0cm/Bem 1342
63. ジョン・ラスキン《ローザンヌ城, 日の出》/1845年/水彩/24.8×36.8cm/Bem 1343
64. ジョン・ラスキン《ルツェルン, 城壁と塔》/1846年/インク, 水彩/12.0×17.5cm/Bem 1377
65. ジョン・ラスキン《ジュネーヴのロヌ川》/1846年/鉛筆, 水彩, ホワイト/31.0×43.6cm/Bem 1290
66. ジョン・ラスキン《シャモニー, ユニオン・ホテルの窓から見たシャルモ峰》/1849年/鉛筆, 淡彩/30.0×40.0cm/Brant 892
67. ジョン・ラスキン《シャモニー, ホテルの窓から見たモンブランの頂上》/1851年/水彩/15.5×23.5cm/Bem 1389
68. ジョン・ラスキン《トゥーン》/1854年/鉛筆, インク, 淡彩/10.0×15.0cm/Bem 1546
69. ジョン・ラスキン《トゥーン》/1854年/鉛筆, インク, 淡彩/9.7×18.8cm/Bem 1547
70. ジョン・ラスキン《サランシュの修道院》/1854-56年/鉛筆, インク, 淡彩/15.5×18.5cm/Bem 1484
71. ジョン・ラスキン《プリブールの望楼》/1856年/鉛筆, 淡彩/30.3×22.5cm/Brant 917
72. ジョン・ラスキン《プリブール, エッチングのための町の習作》/1856年/鉛筆, 淡彩, 不透明水彩, ホワイト/28.0×29.6cm/Bem 1284
73. ジョン・ラスキン《ラインフェルデン, 町のパノラマ》/1858年/鉛筆, インク, 淡彩/13.8×49.2cm/Bem 1455
74. ジョン・ラスキン《ベリンツォーナ》/1858年/鉛筆, 水彩, 不透明水彩/31.3×51.3cm/アボット・ホール美術館
75. ジョン・ラスキン《ベリンツォーナ付近の小屋》/1858年/水彩, 不透明水彩/22.0×15.7cm/Bem 1148
76. ジョン・ラスキン《ローザンヌの教会》/1859年/鉛筆, インク, 水彩, ホワイト/20.5×14.5cm/Bem 1537
77. ジョン・ラスキン《ブレゾン》/1862-63年/鉛筆, インク, 水彩, 不透明水彩/32.0×48.0cm/Bem 1174
78. ジョン・ラスキン《ジュネーヴから見たサレーヴ山》/1862-63年?/水彩, 不透明水彩/12.0×16.3cm/Bem 1474
79. ジョン・ラスキン《ボンヴィルの橋》/1862-63年/鉛筆, 水彩, ホワイト/35.5×50.9cm/Bem 1158

-
80. ジョン・ラスキン《バーデン、町の眺め》/1863年/鉛筆、水彩、不透明水彩/23.5×15.9cm/Bem 1137
 81. ジョン・ラスキン《バーデン、町の眺め》/1863年/鉛筆、水彩/41.0×34.3cm/Brant 869
 82. ジョン・ラスキン《川から見たブルック》/1863年/鉛筆、水彩、不透明水彩/22.3×32.4cm/グラスゴー大学ハンテリアン・アート・ギャラリー
 83. ジョン・ラスキン《ラウフェンブルク、橋》/1863年/鉛筆、水彩/12.0×32.5cm/Brant 932
 84. ジョン・ラスキン《シャフハウゼン、ラインの滝》/1863年?/鉛筆/17.8×53.0cm/Bem S46
 85. ジョン・ラスキン《シャフハウゼン、ターナーの水彩〈シャフハウゼンの滝〉に描かれた水車》/鉛筆、黒色絵具/20.0×17.0cm/Bem 1387
 86. ジョン・ラスキン《J.M.W.ターナー作の町と山々の模写習作》/インク、淡彩/20.5×30.2cm/Bem 1573
 87. ジョン・ラスキン《ルツェルンの城壁》/1866年/鉛筆、水彩、不透明水彩/34.0×48.0cm/Bem 1376
 88. ジョン・ラスキン《ヴェローナ、パラッツォ・ミニスキアルキ》/1845年/鉛筆、不透明水彩、ホワイト/35.0×20.3cm/Bem 1658
 89. ジョン・ラスキン《ティントレット作〈マギの礼拝〉より、ケルビム》/1852年/鉛筆、淡彩/36.8×54.6cm/Brant 1009
 90. ジョン・ラスキン《ティントレット作〈マギの礼拝〉より、王たちと従者たち》/1852年/鉛筆、淡彩/33.6×49.5cm/Bem 1552
 91. ジョン・ラスキン《パオロ・ヴェロネーゼ作〈ソロモン王とシバの女王〉より、ソロモン王》/1858年/鉛筆、不透明水彩、ホワイト/37.6×27.7cm/Bem 1671
 92. ジョン・ラスキン《パオロ・ヴェロネーゼ作〈クッチーナ家の聖母〉より、家族の部分》/1859年/インク、鉛筆、水彩、ホワイト/27.5×32.9cm/Bem 1669
 93. ジョン・ラスキン《パオロ・ヴェロネーゼ作〈クッチーナ家の聖母〉より、少年の頭部》/1859年/鉛筆、水彩/28.0×22.3cm/Bem 1670
 94. ジョン・ラスキン《サンドロ・ボッティチェリ作〈モーセの試練〉より、チッポラと羊の群れ》/1874年/水彩/17.7×27.2cm/Brant 879
 95. ジョン・ラスキン《サンドロ・ボッティチェリ作〈春〉より、フローラの衣の薔薇の部分》/1874年/水彩、不透明水彩/10.2×12.0cm/Bem 1168
 96. ジョン・ラスキン著『フォルス・クラウイゲラ』表題頁のヴィネット/22.0×28.0cm/財団法人ラスキン文庫、東京
 97. ジョン・ラスキン《シモーネ・メンミ(マルティニ)作〈文法〉より》/1874年/鉛筆、水彩/37.5×24.5cm/Brant 915
 98. ジョン・ラスキン《シモーネ・メンミ(マルティニ)作〈天文学〉〈音楽〉より》/1874年/鉛筆、水彩/40.6×29.0cm/Brant 914
 99. ジョン・ラスキン《ヴィットーレ・カルパッチオ作〈聖ウルスラの夢〉より、犬の模写》/1876-77年/水彩/28.2×37.6cm/Brant 890
 100. ジョン・ラスキン《ヴィットーレ・カルパッチオ作〈聖ゲオルギウスと龍〉より》/1872年/鉛筆、インク、セピア、ホワイト/16.2×45.1cm/ラスキン・ギャラリー、シェフィールド
 101. ジョン・ラスキン《ヴィットーレ・カルパッチオ作〈書斎の聖ヒエロニムス〉より、椅子の模写》/1872年/鉛筆、水彩/31.8×21.6cm/Brant 889
 102. ジョン・ラスキン《クロイドン、市場通り》/水彩/17.5×24.2cm/バーミンガム市立美術館
 103. ジョン・ラスキン《イタリアの村》/1845年頃/鉛筆、不透明水彩、淡彩/22.5×29.5cm/バーミンガム市立美術館
 104. ジョン・ラスキン《ルーアン、古い家並と塔》/1844年?/鉛筆、インク、淡彩/36.0×25.0cm/Brant 989
 105. ジョン・ラスキン《ノルマンディー、海を望む風景》/1848年/鉛筆、インク、セピアの淡彩/35.0×50.8cm/Brant 966
 106. ジョン・ラスキン《カーン、サン・ソヴール教会》/1848年/鉛筆、淡彩/44.8×27.3cm/Bem 1182
 107. ジョン・ラスキン《カンブの井戸》/1858年?/鉛筆、淡彩、ホワイト/10.7×17.3cm/Brant 886
 108. ジョン・ラスキン《アブヴィル、サン・ヴェルフラン教会、南玄関人物像》/1868年/鉛筆、淡彩、ホワイト/43.2×29.6cm/Bem 1101
 109. ジョン・ラスキン《アブヴィル、広場の建物から見たサン・ヴェルフラン教会》/1868年?/鉛筆、水彩/26.0×21.3cm/Brant 850
 110. ジョン・ラスキン《アブヴィル、川から見たサン・ヴェルフラン教会》/1868年/鉛筆、水彩、ホワイト/34.3×50.2cm/Bem 1100
-

111. ジョン・ラスキン《アブヴィル, 景観》/1880年/鉛筆/12.6×17.4cm/Bem 1103
112. ジョン・ラスキン《アブヴィル, サン・ヴェルフラン教会とマーケット広場》/1880年/鉛筆, 水彩/14.0×21.0cm/J.S. ディアディン
113. ジョン・ラスキン《ルーアン, セヌ川と中洲》/1880年/水彩, 不透明水彩, ホワイト/29.4×41.6cm/Bem 1472
114. ジョン・ラスキン《ピッキニー, アミアンとアブヴィルの間》/1880年/鉛筆, 水彩, 不透明水彩, ホワイト/12.1×17.2cm/Bem 1434
115. ジョン・ラスキン《オックスフォード, セント・メアリー・マクダレン教会》/1837年/鉛筆/36.2×26.0cm/Brant 968
116. ジョン・ラスキン《オックスフォード, マートン・カレッジ》/1838年/鉛筆/43.6×26.0cm/Brant 967
117. ジョン・ラスキン《オックスフォード博物館, 窓のためのデザイン》/1855年頃/鉛筆, 淡彩/27.0×18.2cm/Bem 1423
118. ジョン・ラスキン《オックスフォード博物館, 窓のためのデザイン》/1855年頃/鉛筆, 水彩, 不透明水彩/38.7×28.5cm/バーミンガム市立美術館
119. ジョン・ラスキン《コインからとったギリシャ人の頭部の習作》/1870年/鉛筆, ホワイト/20.0×15.0cm/Bem G 1
120. ジョン・ラスキン《デーメーテルの頭部のあるギリシャ・コインの習作》/水彩, 不透明水彩, 赤のチョーク/41.7×48.9cm/マンチェスター市立美術館
121. ジョン・ラスキン《コニストン湖の端から見たブラントウッド》/1871年/鉛筆, 水彩/17.2×24.8cm/Brant 882
122. ジョン・ラスキン《ローズ・ラ・トゥーシュの肖像》/1860年代後半/鉛筆, 水彩, 不透明水彩/39.4×26.7cm/Bem P64
123. ローズ・ラ・トゥーシュ《ラスキンのオックスフォード大学講義のノート》/1872年/ノートブック/15.7×10.5cm/Bem MS 36
124. ジョン・ラスキン 1880年代に使用された手稿の冊子/37.3×23.6cm/Bem MS 45
125. ジョン・ラスキン《ダンパー近くの海岸風景》/1847年/インク, 水彩/32.5×47.5cm/バーミンガム市立美術館
126. ジョン・ラスキン《ブラントウッドの滝》/鉛筆, 水彩/21.8×27.9cm/Bem 1172
127. ジョン・ラスキン《ボーヴェ, 夕日の大聖堂》/鉛筆, インク, 淡彩, ホワイト/12.7×17.5cm/Bem 1146
128. ジョン・ラスキン著『現代画家論』第5巻/26.8×36.0cm/財団法人ラスキン文庫, 東京
129. ジョン・ラスキン《雲の習作—コニストン・ウォーター上空》/1880年/鉛筆, 水彩/17.9×26.1cm/Bem 1214
130. ジョン・ラスキン《雲の習作—コニストン・オールド・マン上空の氷の雲》/1880年/不透明水彩/12.5×17.0cm/Bem 1216
131. ジョン・ラスキン《死んだキジの習作》/1867年/鉛筆, 水彩, ホワイト/25.7×52.0cm/Bem 1433A
132. ジョン・ラスキン《黄緑の冠毛のあるオウム》/1877年/鉛筆, 水彩, ホワイト/10.8×12.0cm/Bem 1535
133. ジョン・ラスキン《ハエを捕まえようとするヤマシギ》/鉛筆, 不透明水彩/11.4×20.5cm/Bem 1684
134. ジョン・ラスキン《ソリハシセイタカシギ》/1880年頃/鉛筆, 不透明水彩/24.4×16.5cm/Bem 1130
135. ジョン・ラスキン《鳥の足の習作》/インク, 淡彩/38.7×55.8cm/Bem 1154
136. ジョン・ラスキン《薔の習作》/1880年頃/鉛筆, インク, 淡彩/22.2×15.5cm/Bem 1545
137. ジョン・ラスキン《花の習作》/水彩/14.6×12.4cm/Bem 1264
138. ジョン・ラスキン《花の習作》/鉛筆, 淡彩/20.3×12.0cm/Bem 1161
139. ジョン・ラスキン《岩の上のシダ》/1875年/水彩, 不透明水彩, ホワイト/13.0×15.1cm/Bem F 7
140. ジョン・ラスキン《月桂樹の習作》/1882年/鉛筆, 水彩, ホワイト/18.8×12.2cm/Bem 1145
141. ジョン・ラスキン《樹木の習作》/鉛筆, インク, 淡彩/54.6×38.1cm/Bem 1564
142. ジョン・ラスキン《樹木と岩》/1845年/鉛筆, インク, セピアの淡彩, ホワイト/33.0×27.7cm/Bem 1566
143. ジョン・ラスキン《風景のなかの2本の木》/1845年頃/鉛筆, インク, 水彩/15.5×24.1cm/Bem 1562
144. ジョン・ラスキン《ヴヴェの木の習作》/1846年/鉛筆, 水彩/16.6×24.6cm/Bem 1672
145. ジョン・ラスキン《小道の木々, アンブルサイド(?)》/1847年/鉛筆, インク, 淡彩/44.5×57.2cm/Bem 1559
146. ジョン・ラスキン《樅の木習作》/水彩/34.3×24.1cm/Bem 1417
147. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, カ・ドーロ》/1845年/鉛筆, 水彩, 不透明水彩, ホワイト/33.0×47.6cm/Bem 1590
148. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, パラッツォ・ダリオ》/1846年?/鉛筆, 水彩/23.0×12.7cm/Brant 1035
149. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, カ・ドーロ, 2階の狭間飾り》/1849年/鉛筆, インク/35.1×28.0cm/Bem 1591
150. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, ノートブック「ハウス・ブック I」》/1849年/19.5×12.2cm/Bem 1617
151. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, パラッツォ・ドゥカーレの柱頭36番》/1849-52年/鉛筆, 淡彩/22.3×23.5cm/Bem 1601
152. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, ビザンチンの柱頭, 一連の凹彫装飾》/1853年?/鉛筆, インク, 淡彩/17.8×12.7cm

/Bem 1582

153. ジョン・ラスキン著『ヴェネツィアの石』第2巻/財団法人ラスキン文庫, 東京
154. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, ビザンチン建築の廃墟, カ・フォスカリ運河, 上心の装飾窓縁》/1849年/鉛筆, 淡彩/23.2×48.3cm/Bem 1583
155. ジョン・ラスキン著『ヴェネツィア建築』/財団法人ラスキン文庫, 東京
156. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, 潟の上の月光》/1849年/水彩/16.5×22.8cm/Brant 1049
157. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, ジェズアーティ教会とザッテレー川》/1877年/水彩/14.7×23.6cm/Bem V61
158. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, ゴンドラの習作》/1876年/水彩/14.7×19.7cm/Brant 1045
159. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, プーニ橋》/1876年?/鉛筆, 淡彩/17.8×22.2cm/Bem 1626
160. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, パラッツォ・ドゥカーレとサン・マルコの鐘塔》/1876年?/鉛筆/38.4×27.0cm/Bem 1603
161. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, 大運河の眺め》/1876-77年/鉛筆, ホワイト/36.2×52.1cm/Bem 1612
162. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, 大運河の眺め》/1876-77年/鉛筆, 水彩/17.0×26.0cm/Brant 1067
163. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, サン・マルコ大聖堂のモザイク》/1876-77年/不透明水彩/34.7×36.0cm/Brant 1060
164. ジョン・ラスキン《ヴェネツィア, サン・マルコ大聖堂の北西の柱廊》/1877年/鉛筆, 水彩, ホワイトによるハイライト/64.8×77.0cm/Bem 1633
165. J.M.W.ターナー《ダービーシャー小路よりシェフィールドを望む》/1797年/水彩/11.4×16.5cm/ラスキン・ギャラリー, シェフィールド
166. J.M.W.ターナー《ホーリー教会, 十字架と真鍮記念板, 聖職席の持送りの8点の素描》/1799年頃/水彩/22.8×17.8cm/タウンリー・ホール美術館
167. J.M.W.ターナー《ウンターゼーン近くのノイハウスよりトゥーン湖を望む》/1802年/鉛筆, 水彩/31.5×47.0cm/マンチェスター大学ホイットワース美術館
168. J.M.W.ターナー《シャモニー, ボソンの氷河》/1802年/鉛筆, 水彩, 不透明水彩/32.6×47.2cm/個人蔵
169. J.M.W.ターナー《サヴォワの情景》/1816年頃/水彩/28.1×39.3cm/ウォルヴァーハンプトン美術館
170. J.M.W.ターナー《ナポリ湾, 怒れるヴェスヴィオ山》/1817年頃/水彩/17.6×28.4cm/ウィリアムソン美術館, パークンヘッド
171. J.M.W.ターナー《フィエゾーレへの道からフィレンツェを望む》/1818年頃/水彩/14.0×21.7cm/個人蔵
172. サミュエル・プラウト《ブラハの旧市街》/1829年頃/鉛筆/41.1×26.5cm/バーミンガム市立美術館
173. サミュエル・プラウト《リジウの古い街角》/インク, 水彩, 不透明水彩, ホワイトによるハイライト/45.1×30.8cm/Brant 764
174. サミュエル・プラウト《ドモ・ドソーラ》/鉛筆, 灰色の淡彩/26.0×36.5cm/Brant 761
175. サミュエル・プラウト《ヴェルツブルクの通りの情景, バイエルン》/茶色のインク, 水彩, ホワイトによるハイライト/42.0×26.9cm/マンチェスター大学ホイットワース美術館
176. サミュエル・プラウト《大聖堂の内部》/水彩, 不透明水彩/42.0×27.2cm/バーミンガム市立美術館
177. サミュエル・プラウト《ヴェネツィア, ため息橋》/水彩, 不透明水彩/55.0×43.6cm/マンチェスター市立美術館
178. A.V.コプリュー・フィールディング《フィンガルの洞窟》/水彩/43.4×60.9cm/マンチェスター大学ホイットワース美術館
179. W.ヘンリー・ハント《室内》/1835年頃/水彩, ホワイトによるハイライト/43.8×34.3cm/Brant 734
180. W.ヘンリー・ハント《室内, リュートを持つ婦人》/1840年頃/水彩, ホワイトによるハイライト/43.4×32.3cm/グラスゴー市立美術館
181. W.ヘンリー・ハント《針仕事の婦人》/1828年?/水彩, ホワイトによるハイライト/38.2×27.9cm/マンチェスター市立美術館
182. W.ヘンリー・ハント《白サンザシと鳥の巣》/1850年頃/水彩, ホワイトによるハイライト/22.9×27.7cm/マンチェスター大学ホイットワース美術館
183. W.ヘンリー・ハント《鳥の巣, 林檎の花とサクラソウ》/1845-50年/水彩/19.7×29.8cm/バーミンガム市立美術館
184. ジェイムズ・ホランド《ヴェネツィア-ゴンドラとサンタ・マリア・デラ・サルウエの遠景》/1865年/水彩, 不透明水彩/54.5×38.0cm/ハリス美術館, プレストン

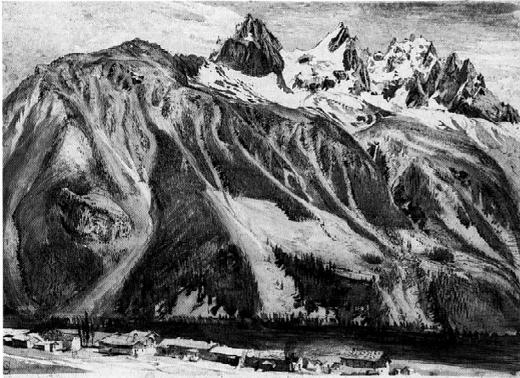
-
185. ジェイムズ・ホランド《ヴェネツィア》/油彩・カンヴァス/57.5×101.1cm/マンチェスター市立美術館
 186. ジョン・フレデリック・ルイス《フィエスタ(祭り)》/水彩, 不透明水彩/66.7×86.1cm/プリストル市立美術館
 187. トマス・クレジック《ロクビーのティーズ川》/1862年/油彩・カンヴァス/48.2×66.3cm/マンチェスター市立美術館
 188. ジョージ・フレデリック・ワッツ《エドワード・コリー・バーン=ジョーンズの肖像》/1877年/油彩・カンヴァス/65.0×52.0cm/バーミンガム市立美術館
 189. ジョージ・プライス・ボイス《ウィンドミル・ヒルズ, ゲイツヘッド》/1864年/鉛筆, 水彩/28.0×40.0cm/レイング美術館, ニューカースル・アポン・タイン, タイン&ウエア博物館
 190. ジョージ・プライス・ボイス《ヤンウォス・ホール, カンプリア》/1884-85年/水彩/31.0×52.0cm/マンチェスター大学ホイットワース美術館
 191. ウィリアム・ホルマン・ハント《シオンの山から見たリフェイムの平原》/1855-66年/水彩/35.6×50.8cm/マンチェスター大学ホイットワース美術館
 192. ウィリアム・ホルマン・ハント《過去と現在》/1868年/油彩・板/50.5×35.2cm/アバディーン美術館
 193. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ《エリザベス・シダルの肖像》/1854年/鉛筆/17.2×11.5cm/バーミンガム市立美術館
 194. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ《レギーナ・コルディウム》/1860年/油彩, 金箔・板/26.0×21.5cm/ヨハネスバーク美術館
 195. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ《聖家族の過越の祭-過越の祭の食事》/1854年頃/黒チョーク, インク, 淡彩/27.7×26.1cm/ライオネル・ランボーン
 196. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ《聖ヨハネの家の聖母マリア》/1858年/水彩/45.7×35.6cm/デラウェア美術館
 197. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ《ルネ王の蜜月のための習作》/1862年/インク, 淡彩/43.2×33.6cm/ウィリアムソン美術館, パークンヘッド
 198. ジョン・エヴァレット・ミラー《マリアーナ》/1850-51年頃/油彩・板/14.6×11.5cm/個人蔵
 199. ジョン・エヴァレット・ミラー《ジョン・ラスキンの肖像》/1853年/鉛筆, 淡彩/32.6×24.8cm/Bem 356
 200. ジョン・エヴァレット・ミラー《自然の飾り》/1853年/セピア・インク/18.3×22.7cm/バーミンガム市立美術館
 201. ジョン・エヴァレット・ミラー《バツタの習作》/1850-59年? /鉛筆, インク/18.3×20.7cm/バーミンガム市立美術館
 202. ジョン・エヴァレット・ミラー《イギリスを去るローマ人》/1865年/油彩・板/45.0×70.0cm/アートロ社
 203. ジョン・エヴァレット・ミラー《明眸》/1877年/油彩/92.0×71.5cm/アバディーン美術館
 204. ウィリアム・ウォード《J.M.W. ターナー作<スイス, サン・モリッツの橋>模写》/水彩/17.5×21.4cm/Bem 595
 205. ジョン・エドワード・ブレット《フィレンツェ, グラツィエ橋》/水彩/32.4×50.2cm/シェフィールド市立美術館
 206. ジョン・エドワード・ブレット《タオルミナからみたエトナ山》/1870年/油彩・カンヴァス/84.4×121.9cm/シェフィールド市立美術館
 207. ジョン・エドワード・ブレット《海景》/油彩・カンヴァス/17.8×35.6cm/マンチェスター市立美術館
 208. ウォルター・セヴァーン《ピアリッツ》/1895年/水彩, 不透明水彩/48.3×72.4cm/Bem 555
 209. ジョン・ウィリアム・インチボルド《アルプスの小屋》/1856年頃/水彩/14.0×19.6cm/クリストファー & ジェニー・ニューアル夫妻
 210. ジョン・ウィリアム・インチボルド《シオン城》/水彩/27.0×38.0cm/ジュリアン・ハートノル
 211. アルフレッド・ウィリアム・ハント《ハイデルベルク》/1860年/水彩/27.8×41.0cm/クリストファー & ジェニー・ニューアル夫妻
 212. アルフレッド・ウィリアム・ハント《バーナード・カースル》/1869年頃/水彩/26.8×36.7cm/クリストファー & ジェニー・ニューアル夫妻
 213. ベンジャミン・ウィリアムズ・リーダー《モイル・シアボッド, 北ウエールズ》/1859年/油彩・カンヴァス/91.0×76.0cm/個人蔵
 214. エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ《『ムネラ・プルウェリス』の装丁のためのデザイン》/1863-64年/鉛筆, インク・羊皮紙, カンヴァス/26.6×18.4cm/Bem 138
 215. エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ《夢想するチャーサー》/1863年/淡彩/134.6×101.6cm/Bem 132
 216. エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ《ティスベア》/1863年/鉛筆, セピア, 水彩/137.2×68.6cm/ウィリアム・モリス美術館, ロンドン
 217. エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ《アルケティスを導く愛》/1864年/鉛筆, インク, セピアの淡彩/50.2×54.0cm/
-

バーミンガム市立美術館

218. エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ《王の結婚式》/1870年/水彩/32.0×26.0cm/クレメンズ=ゼルス博物館, ノイス
219. エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ《プロセルピナの略奪》/1883年/鉛筆, 赤のチョーク/46.0×61.0cm/バーミンガム市立美術館
220. エドワード・コリー・バーン=ジョーンズ《生誕》/1885年頃/グワッシュ, 金の絵具/50.8×69.9cm/ピカデリー・ギャラリー
221. トマス・マシュー・ルック《シャルトルの結婚式》/1885年/水彩/36.5×22.8cm/Bem 430
222. トマス・マシュー・ルック《シャルトル, 大聖堂の遠望》/1885年/水彩/29.8×31.1cm/ラスキン・ギャラリー, シェフィールド
223. トマス・マシュー・ルック《シャルトルの洗濯小屋》/1885年/水彩/53.0×35.0cm/Brant 771
224. トマス・マシュー・ルック《サランシュの田舎家》/1887年/水彩/21.1×32.1cm/Brant 775
225. トマス・マシュー・ルック《フィテルヌ》/1887年/水彩, 不透明水彩/35.9×21.1cm/Brant 773
226. ジョゼフ・アーサー・ペリザー・セヴァーン《ジョン・ラスキンの肖像》/1897年/鉛筆, 水彩, 不透明水彩/35.5×25.5cm/Bem 529
227. ジョゼフ・アーサー・ペリザー・セヴァーン《ブラントウッドよりコニストン湖とオールド・マン山を望む》/水彩, 不透明水彩/48.0×64.5cm/Bem 507
228. ジョゼフ・アーサー・ペリザー・セヴァーン《コーンウォール, マリアンの夕日》/水彩, 不透明水彩/25.5×34.8cm/Bem 523
229. ジョゼフ・アーサー・ペリザー・セヴァーン《J.M.W. ターナー作〈コブレンツ〉模写》/1880年/水彩, 不透明水彩/29.2×45.7cm/ラスキン・ギャラリー, シェフィールド
230. ケイト・グリーンナウェイ《柵の上の子供》/1878年頃/インク, 水彩/16.5×20.3cm/タウンリー・ホール美術館
231. ケイト・グリーンナウェイ《ヒヤシンスとクワガタソウのデッサン》/1883-85年頃/水彩/19.1×7.0cm/J.S. ディアディン
232. ケイト・グリーンナウェイ《母と子『ハーメルンの笛吹き』の挿絵のためのデッサン》/1888年頃/インク, 水彩/13.0×19.0cm/タウンリー・ホール美術館
233. ケイト・グリーンナウェイ《1888年の新年の祝賀の花を持った子供の行列》/鉛筆, 水彩/11.2×27.2cm/カーネギー・メロン大学図書館, ピッツバーグ
234. ケイト・グリーンナウェイ《ケイト・グリーンナウェイからジョン・ラスキンへの1897年の年賀状》/鉛筆, 水彩/7.2×14.4cm/アボット・ホール美術館
235. ケイト・グリーンナウェイ《1900年のK.G. からJ.R. への新年の挨拶》/鉛筆, 水彩/12.0×21.5cm/カーネギー・メロン大学図書館, ピッツバーグ
236. ヘレン・アリンガム《ピナの古い家》/1891年頃/水彩/34.0×42.7cm/バーミンガム市立美術館
237. チャールズ・フェアファックス・マリー《カルパッチオ作〈聖マタイの召命〉模写》/1877年? /水彩/29.3×22.8cm/Brant 752
238. チャールズ・フェアファックス・マリー《カルパッチオ作〈スルタンに洗礼する聖ゲオルギウス〉模写》/1877年/鉛筆, 水彩/22.5×28.0cm/ラスキン・ギャラリー, シェフィールド
239. チャールズ・フェアファックス・マリー《総督, 聖職者, 人民》/1877年/水彩, 不透明水彩/21.3×28.3cm/ラスキン・ギャラリー, シェフィールド
240. ウィリアム・ガーシャム・コリングウッド《ジョン・ラスキンの肖像》/1897年/油彩・カンヴァス/90.5×70.5cm/Bem 163
241. ウィリアム・ガーシャム・コリングウッド《湖から見たブラントウッド》/水彩, 不透明水彩/22.5×30.0cm/Bem 160
242. フランク・ランドル《クールシール=シャトー, マジョール街の眺め, エヌ県》/1886年/水彩/33.3×19.0cm/クリストファー・& ジェニー・ニューアル夫妻

※作品の所蔵先のうち、「Bem」はワイト島にあるペンブリッジ・スクール, ラスキン・ギャラリーズ, 「Brant」はカンブリア州, コニストン, ブラントウッドにあるエデュケーション・トラストの略号, 番号はそれぞれの所蔵日録番号である。

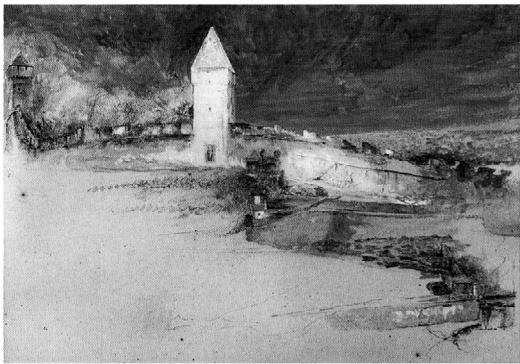
※no.181は不出品。



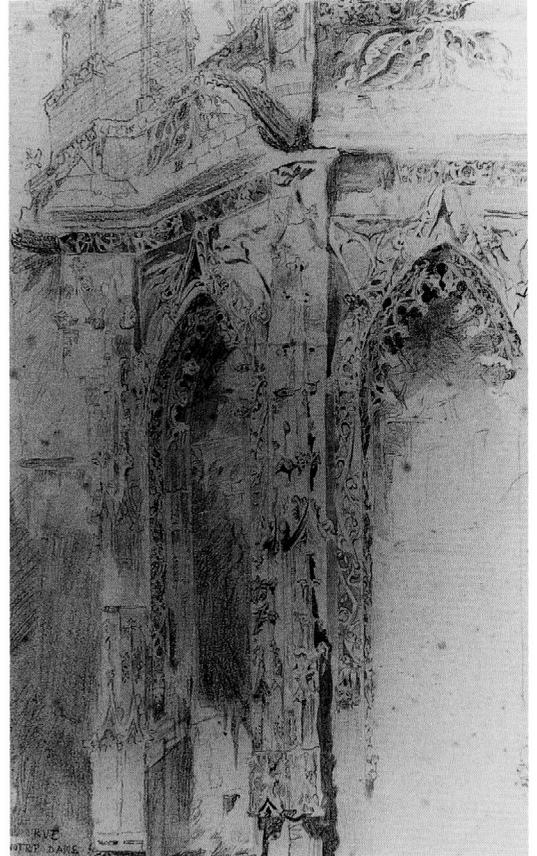
58



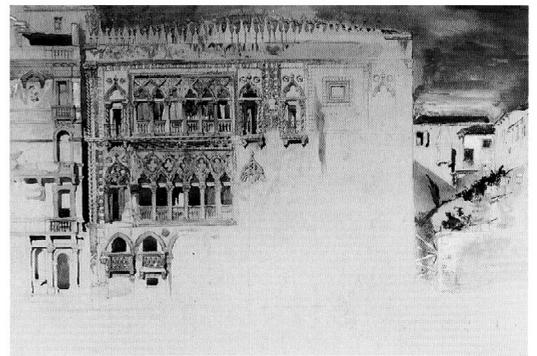
110



87



106



147

前田寛治素描展

1993年10月9日(土)－11月14日(日)

主催：石橋財団石橋美術館

協力：鳥取県立博物館／財団法人久留米文化振興会

出品内容：素描100点

入場者総数：5,079人

1. 《男》/1921年頃/インク・ノート/16.3×14.8cm
 2. 《坐る男》/1921年頃/インク・ノート/9.0×10.0cm
 3. 《握り飯を食う男》/1921年頃/インク・ノート/16.4×20.3cm
 4. 《男の像》/1921年頃/インク・ノート/19.8×15.0cm
 5. 《男の像》/1921年頃/インク・ノート/15.2×20.3cm
 6. 《ラゲ神父》/1921年頃/インク・ノート/12.3×16.0cm
 7. 《無題》/1922年頃/インク・ノート/20.3×16.2cm
 8. 《人物》/1922年頃/インク・ノート/17.0×20.9cm
 9. 《子供》/1922年頃/インク・ノート/18.5×15.1cm
 10. 《子供》/1922年頃/インク・ノート/20.4×14.8cm
 11. 《男、子供》/1922年頃/インク・ノート/16.3×13.0cm
 12. 《女の子》/1922年頃/インク・ノート/16.2×13.8cm
 13. 《田舎の子》/1922年頃/インク・ノート/13.8×14.6cm
 14. 《椅子に坐る女》/鉛筆・ノート/12.0×20.3cm
 15. 《男の像》/インク・ノート/20.3×16.3cm
 16. 《子供の顔(女の子)》/鉛筆/15.4×14.5cm
 17. 《女の子》/鉛筆/15.7×20.8cm
 18. 《草刈る農婦》/1922年頃/鉛筆, インク/13.3×17.2cm
 19. 《風景(林の中)》/1922年頃/鉛筆/13.3×18.5cm
 20. 《横向きの女の子》/1922年頃/鉛筆/11.1×16.4cm
 21. 《椅子に坐った女》/鉛筆, インク/30.0×21.8cm
 22. 《乳母車と女の子》/鉛筆/18.5×13.4cm
 23. 《子供を背負った女の子》/鉛筆/24.6×18.6cm
 24. 《女の子立像》/1922年頃/鉛筆/33.7×22.7cm
 25. 《疲労した農夫ほか》/1923年頃/インク・ノート/12.5×16.3cm
 26. 《アインシュタイン像》/1923年頃/鉛筆/28.6×22.6cm
 27. 《風景》/1923年/パステル/18.7×24.5cm
 28. 《風景》/1923年/パステル/18.7×24.5cm
 29. 《裸人二人》/1923年頃/水彩/23.5×15.6cm
 30. 《ゴッホの模写》/1923年頃/鉛筆/18.2×28.0cm
 31. 《ゴッホの模写》/1923年頃/鉛筆/18.2×28.0cm
 32. 《静物、子供》/1923年頃/鉛筆/26.7×36.4cm
 33. 《三人の女性(背面)など》/1923年頃/鉛筆/26.6×36.4cm
 34. 《後向きの婦人像》/1924年頃/鉛筆, インク/18.2×11.6cm
 35. 《カフェ内》/インク/22.5×23.0cm
 36. 《演説》/鉛筆/22.5×27.9cm
 37. 《福本像》/1924年/鉛筆/24.4×16.0cm
 38. 《福本像》/1924年頃/鉛筆/24.5×16.0cm
-

-
39. 《マドモアゼル》/1924年頃/鉛筆/30.4×22.2cm
 40. 《ものを食う男》/1924年頃/鉛筆/24.5×16.3cm
 41. 《発電所の内部》/1924年頃/鉛筆/23.0×30.3cm
 42. 《発電器(工場内部)》/1924年頃/鉛筆/32.5×25.4cm
 43. 《婦人像》/1924年頃/鉛筆/30.8×24.0cm
 44. 《少女》/1924年頃/コンテ/28.2×18.2cm
 45. 《トルソ三態と顔》/1924年頃/鉛筆/29.2×21.0cm
 46. 《後向きの裸婦》/鉛筆/26.6×36.4cm
 47. 《裸婦立像》/鉛筆/32.2×24.5cm
 48. 《裸婦二態》/1924年頃/鉛筆/30.4×22.4cm
 49. 《横たはる裸婦》/鉛筆/30.4×22.6cm
 50. 《裸婦二態》/鉛筆/31.7×24.1cm
 51. 《裸婦》/鉛筆/32.4×25.1cm
 52. 《裸婦》/鉛筆/22.8×17.7cm
 53. 《裸婦クロッキー》/1924年頃/鉛筆/32.3×24.1cm
 54. 《裸婦クロッキー》/1924年頃/鉛筆/32.3×25.0cm
 55. 《裸婦クロッキー》/1924年頃/鉛筆/24.0×32.8cm
 56. 《裸婦クロッキー》/1924年頃/鉛筆/29.4×24.5cm
 57. 《裸婦クロッキー》/1924年頃/鉛筆/24.7×32.5cm
 58. 《裸婦クロッキー》/1924年頃/鉛筆/32.5×24.7cm
 59. 《裸婦クロッキー》/1924年頃/鉛筆/32.0×22.2cm
 60. 《裸婦四態》/鉛筆/32.0×24.6cm
 61. 《母子像》/鉛筆/23.9×31.8cm
 62. 《裸婦》/1924年頃/コンテ/21.3×26.4cm
 63. 《男の像》/鉛筆/27.0×21.0cm
 64. 《もたれる裸婦》/鉛筆/19.0×15.6cm
 65. 《裸婦研究》/鉛筆, 油彩/35.3×24.3cm
 66. 《抽象描写と文章》/1924年頃/鉛筆/25.6×24.5cm
 67. 《立体派風裸婦》/1924年頃/鉛筆・方眼紙/32.8×24.9cm
 68. 《街角》/1925年頃/鉛筆/21.5×29.0cm
 69. 《街角》/1925年頃/鉛筆/24.0×31.4cm
 70. 《街角》/1925年頃/鉛筆/25.0×32.6cm
 71. 《街, 木立》/鉛筆/24.4×28.6cm
 72. 《ある彫刻家の肖像》/1925年頃/鉛筆, コンテ/18.2×16.2cm
 73. 《ある彫刻家の肖像》/1925年頃/鉛筆, コンテ/28.0×18.2cm
 74. 《婦人立像》/1925年頃/鉛筆/22.3×16.6cm
 75. 《裸婦》/コンテ/26.6×36.4cm
 76. 《鏡の前の裸婦》/1925年頃/コンテ/26.6×36.4cm
 77. 《裸婦》/1925年/インク・方眼紙/14.7×9.4cm
 78. 《椅子に坐る裸婦》/1925年頃/鉛筆/32.5×21.7cm
 79. 《メモ》/鉛筆/24.3×31.7cm
 80. 《ベッドの裸婦》/鉛筆/21.0×26.9cm
 81. 《一九三〇年協会入場券下図》/1926年/墨, インク/18.3×13.8cm
 82. 《婦人像》/1926年頃/鉛筆・原稿用紙/20.4×17.8cm
 83. 《裸婦》/1926年頃/鉛筆/25.0×35.3cm
 84. 《裸婦》/1926年頃/鉛筆・原稿用紙/19.3×26.8cm
 85. 《少女坐像》/1928年頃/鉛筆/33.8×22.5cm

86. 《裸婦》/1928年頃/鉛筆/20.9×26.9cm
 87. 《裸婦》/1928年頃/鉛筆/22.6×33.9cm
 88. 《裸婦》/1928年頃/インク・原稿用紙/17.6×22.3cm
 89. 《二人の男》/1928年頃/鉛筆・原稿用紙/18.5×26.5cm
 90. 《風景》/インク・原稿用紙/12.2×17.8cm
 91. 《風景》/インク・原稿用紙/13.2×19.4cm
 92. 《林道》/鉛筆/28.0×24.2cm
 93. 《風景》/鉛筆/28.0×24.2cm
 94. 《母と子》/油彩・原稿用紙/19.2×21.5cm
 95. 《村の人々》/1927年頃/インク・原稿用紙/15.8×15.4cm
 96. 《犬吠埼》/1929年/鉛筆/21.5×23.7cm
 97. 《海と空と波》/1929年/鉛筆/21.2×23.7cm
 98. 《波(部分)》/1929年/鉛筆/22.2×23.8cm
 99. 《波》/1929年/鉛筆/21.2×23.7cm
 100. 《波》/1929年/鉛筆/21.2×23.8cm

※すべて鳥取県立博物館所蔵作品



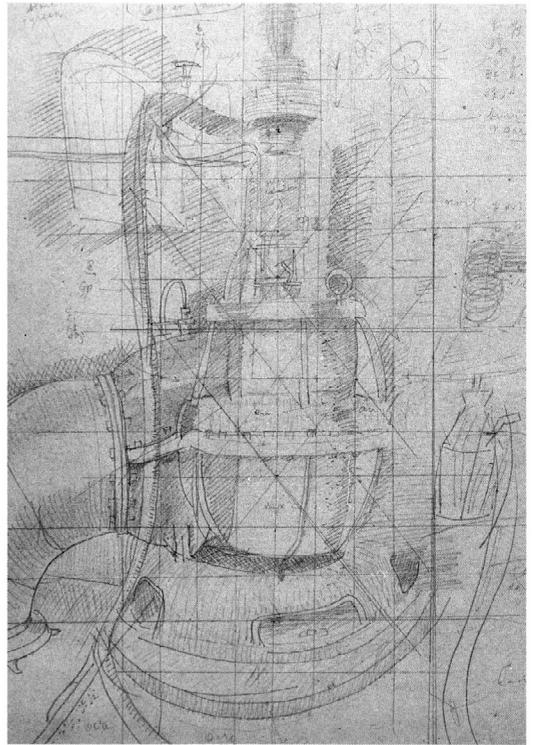
4



5



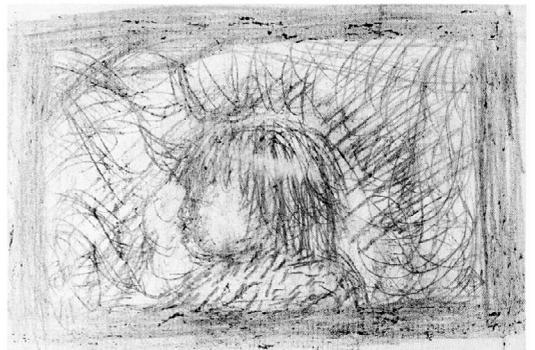
40



42



88



20

《特集展示》

坂本繁二郎の版画

1994年2月8日(火) - 3月6日(日)

出品内容：坂本繁二郎原画による木版画21点

1. 《草画舞台姿 沢村宗之助の皆鶴姫》/1911年/多色木版/22.5×15.8cm
2. 《草画舞台姿 沢村宗十郎の榛沢平九郎》/1911年/多色木版/22.6×15.8cm
3. 《草画舞台姿 初瀬浪子の秋山静子》/1971年復刻/多色木版/22.3×15.9cm
4. 《草画舞台姿 市川高麗太郎の長作》/1911年/多色木版/22.6×15.9cm
5. 《草画舞台姿 沢村訥子の松平吉峰》/1911年/多色木版/21.7×14.9cm
6. 《草画舞台姿 市川高麗蔵の姉輪平次》/1911年/多色木版/21.5×14.9cm
7. 《日本風景版画 筑紫之部 榎寺神社》/1918年/多色木版/17.4×23.5cm/石橋美術館
8. 《日本風景版画 筑紫之部 神湊》/1918年/多色木版/17.0×23.5cm/石橋美術館
9. 《日本風景版画 筑紫之部 水繩山》/1918年/多色木版/17.0×23.5cm/石橋美術館
10. 《日本風景版画 筑紫之部 筑後川》/1918年/多色木版/16.9×23.2cm/石橋美術館
11. 《日本風景版画 筑紫之部 火の海》/1918年/多色木版/17.0×23.4cm/石橋美術館
12. 《阿蘇五景 表紙絵》/1950年/多色木版/12.9×14.8cm/石橋美術館
13. 《阿蘇五景 扉絵》/1950年/多色木版/12.9×14.8cm/石橋美術館
14. 《阿蘇五景 南郷谷》/1950年/多色木版/25.0×36.0cm/石橋美術館
15. 《阿蘇五景 噴火口》/1950年/多色木版/25.1×36.0cm/石橋美術館
16. 《阿蘇五景 波野の月》/1950年/多色木版/25.2×36.1cm/石橋美術館
17. 《阿蘇五景 根子嶽の朝》/1950年/多色木版/25.2×36.1cm/石橋美術館
18. 《阿蘇五景 放牧》/1950年/多色木版/25.3×36.0cm/石橋美術館
19. 《馬三題 1》/1951年/多色木版/22.3×31.2cm
20. 《馬三題 2》/1951年/多色木版/23.4×33.2cm
21. 《馬三題 3》/1951年/多色木版/23.2×32.4cm

※寸法は画面部の寸法で縦×横

《巡回展》

石橋美術館名作展一珠玉の日本近代洋画

1993年4月6日(火) - 5月9日(日)

会場：八代市立博物館未来の森ミュージアム

主催：八代市立博物館未来の森ミュージアム／石橋財団石橋美術館

出品内容：油彩40点

入場者総数：6,277人

《美術講座》

	月日	講座題目	講師
		《「ジョン・ラスキンとヴィクトリア朝の美術」開催記念美術講座》	
1993年	4月17日	ラスキンと日本近代美術	橋富博喜
	4月24日	ラスキンとラファエル前派の風景画	潮江宏三氏
		《西洋美術講座——20世紀の美術——》	
	9月11日	バウハウスと20世紀美術	貞包博幸氏
	9月12日	20世紀の造型——フォーヴとキュープ	満生和昭氏
	9月18日	イタリア未来派とその影響	後藤新治氏
	9月25日	ヘンリー・ムーアと20世紀の彫刻——自然・都市・環境	後小路雅弘氏
		《「前田寛治素描展」開催記念美術講座——素描の魅力——》	
	10月16日	素描の技法	田内正宏
	10月23日	黒田清輝の素描	植野健造
	10月30日	古賀春江の素描	杉本秀子
	11月6日	前田寛治の素描	橋富博喜
		《東洋美術講座——日本上代の仏像彫刻——》	
	11月13日	飛鳥・白鳳の彫刻	谷口鉄雄
	11月20日	天平の彫刻	谷口鉄雄
		《特集展示「坂本繁二郎の版画」開催記念美術講座》	
1994年	2月26日	坂本繁二郎の版画	植野健造

《1993年度新収図書》

	購入	寄贈	計
和書	131冊	115冊	246冊
洋書	7冊	3冊	10冊
計	138冊	118冊	256冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

1993年度入場者数

ブリヂストン美術館

月	開館 日数	有 料					無 料	総 計	一日平均
		一 般	大・高生	中・小生	団 体	合 計			
4	26	5,503	1,126	403	503	7,535	64	7,599	292
5	27	7,648	1,785	732	749	10,914	133	11,047	409
6	26	7,202	1,257	486	755	9,700	124	9,824	378
7	25	6,093	1,316	541	404	8,354	136	8,490	340
8	26	7,008	1,695	1,558	301	10,562	66	10,628	409
9	26	7,250	1,381	167	553	9,351	76	9,427	363
10	27	5,858	1,047	180	808	7,893	96	7,989	296
11	25	5,900	938	246	799	7,883	167	8,050	322
12	20	4,573	886	137	334	5,930	53	5,983	299
1	22	8,281	1,253	235	168	9,937	122	10,059	457
2	15	57,414	9,884	1,446	627	69,371	6,026	75,397	5,026
3	28	125,422	23,868	5,063	853	155,206	26,727	181,933	6,498
合計	293	248,152	46,436	11,194	6,854	312,636	33,790	346,426	1,182

石橋美術館

月	開館 日数	有 料					無 料	総 計	一日平均
		一 般	大・高生	中・小生	団 体	合 計			
4	23	2,346	228	111	602	3,287	688	3,975	173
5	22	2,866	243	218	876	4,203	750	4,953	225
6	25	1,658	71	80	1,151	2,960	77	3,037	121
7	27	1,585	96	173	691	2,545	36	2,581	96
8	26	2,259	230	633	186	3,308	34	3,342	129
9	26	1,721	126	90	533	2,470	69	2,539	98
10	23	1,838	146	77	995	3,056	242	3,298	265
11	21	1,764	61	61	897	2,783	278	3,061	146
12	23	924	51	48	261	1,284	48	1,332	58
1	23	1,236	61	74	20	1,391	34	1,425	62
2	24	2,495	119	104	691	3,409	100	3,509	146
3	27	2,221	204	130	465	3,020	48	3,068	114
合計	290	22,913	1,636	1,799	7,368	33,716	2,404	36,120	125

新収蔵作品 New Acquisitions

ポール・シニャック

Paul SIGNAC

1863-1935

プティ・タンドリー

水彩, 黒チョーク・紙, 39.4×26.7cm
左下に署名, 書込

Petit Andely

Watercolor and black chalk on paper, 39.4×26.7cm
Signed and inscribed lower left: P. Signac/ Petit Andely

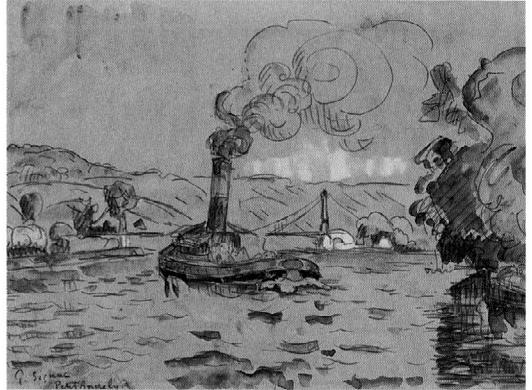
来歴: 1940年頃 飯島壯次郎, 東京: パリで購入; 飯島千枝子,
東京; 1994年3月23日, 石橋財団へ寄贈される。

Prov.:

c.1940, IIJIMA Sōjirō, Tokyo, purchased at Paris; IIJIMA
Chieko, Tokyo; March 23, 1994, donated to the Ishibashi
Foundation.

保管: プリヂストン美術館 (外洋-174)

Managed by the Bridgestone Museum of Art, Tokyo



鈴木道子

SUZUKI Michiko

1954-

水の行方, A

1993年
銅版凹凸版刷り, ブロンズ粉, アクリルによる手彩色・和紙
75.0×121.2cm

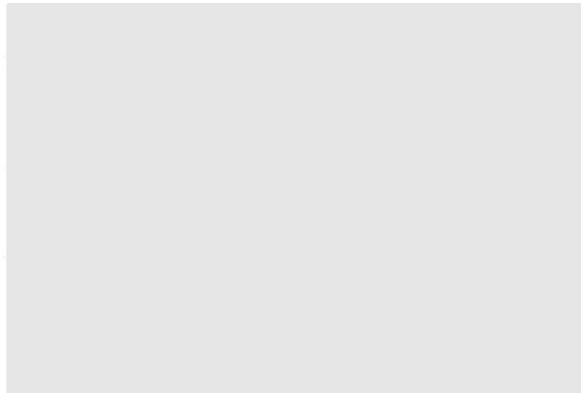
Water's Destiny, A

Intaglio and relief printed from copper plate and hand-colored
with bronze powder and acrylic on washi
75.0×121.2cm

展覧会歴 Exh.: 1993 東京都美術館/京都市美術館/下関
市立美術館「第22回現代日本美術展」ブリヂストン美術館賞
受賞。

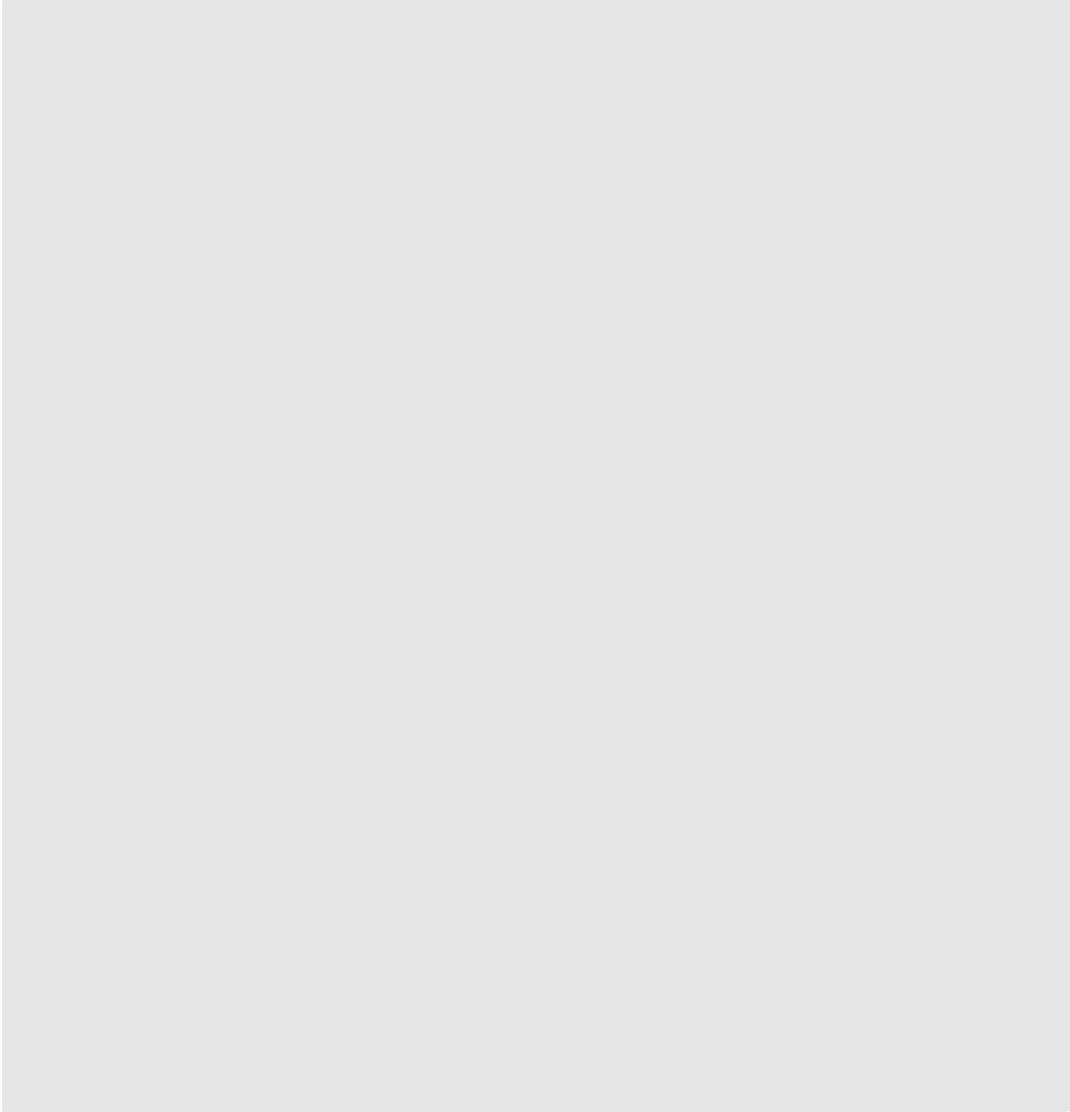
保管: プリヂストン美術館 (日版-64)

Managed by the Bridgestone Museum of Art, Tokyo

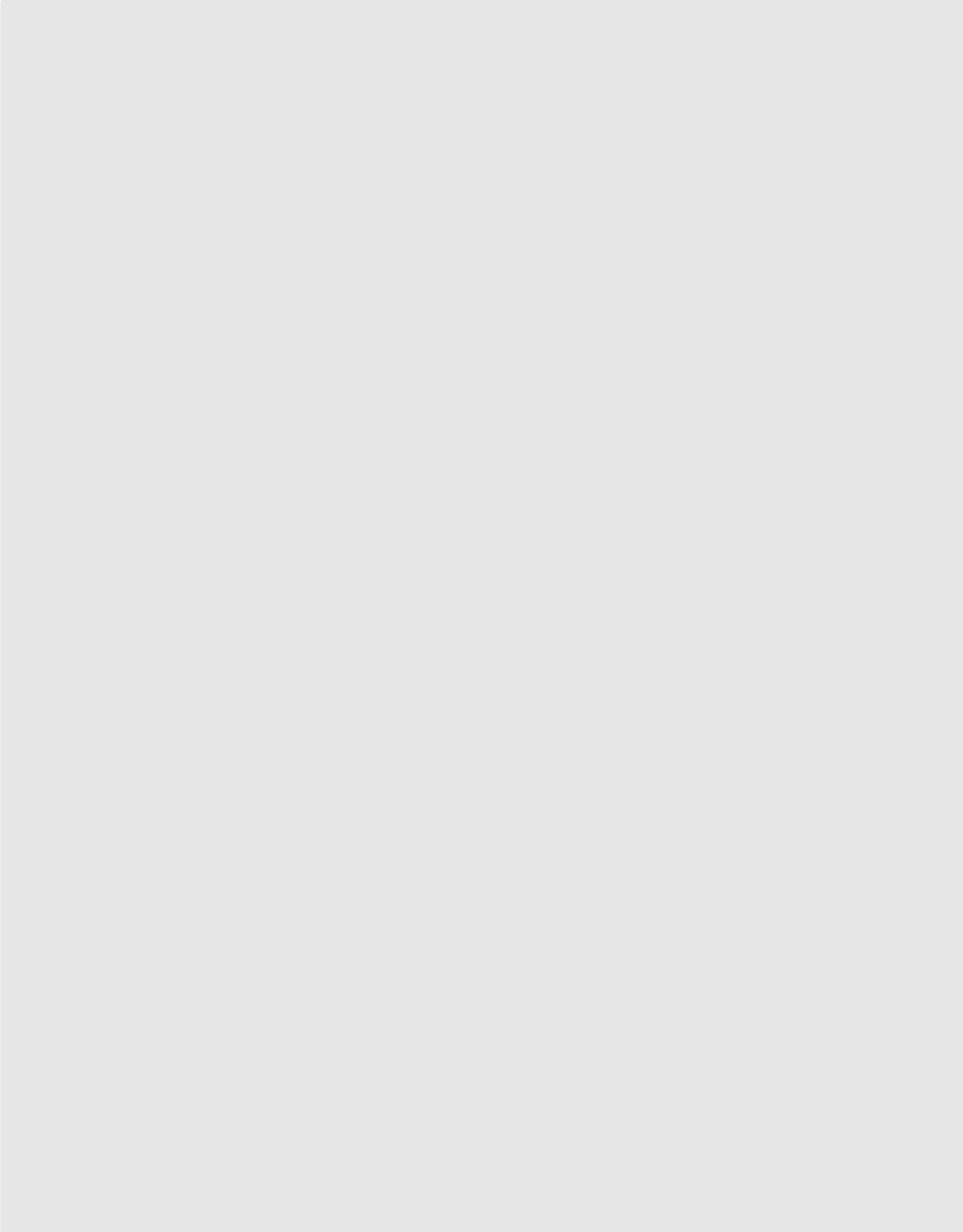


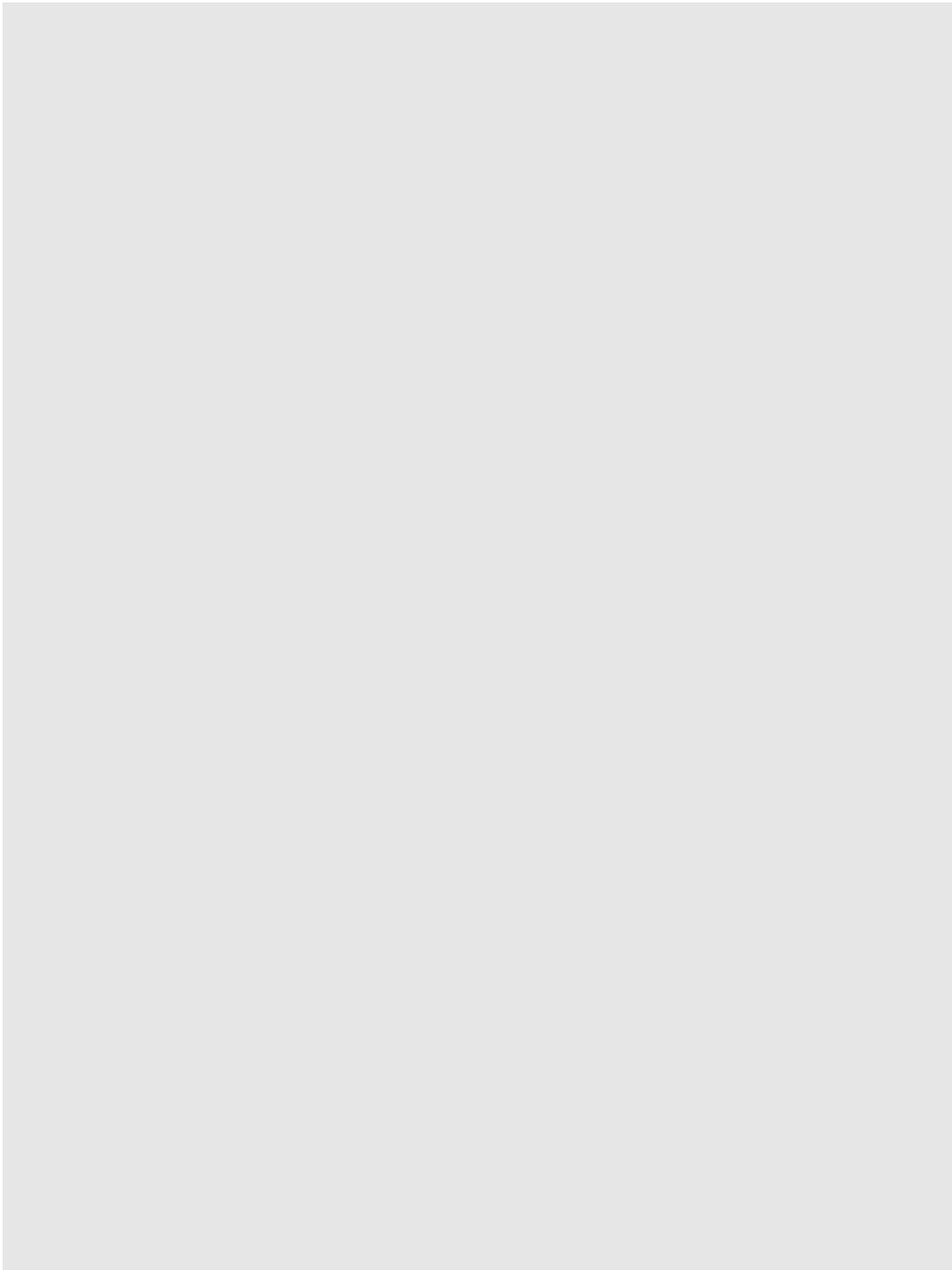
修復記録





2025.01.14





坂本繁二郎《鳥》1930年

顔彩・和紙 37.5×30.2cm

〔組成〕

作品は紙表装されていたと思われる。作品周囲の揉み紙の縁を上下90mm、左右70mm残して切り取られている。したがって作品は三層の裏打ちが施されていて堅牢な外観であるが、作品本来の支持体は、非常に薄く、繊維の中にリグニンも含む品質の粗悪な褐色を帯びた和紙である。水分を含むと非常に脆い。pHは5を示した。

描画部分は、画面の中央のみで、周縁は支持体そのまま空間として残されている。墨の線以外は水分に対して溶けやすい。

〔損傷〕

支持体の全面に褐色斑点が点在し、濃い褐色の汚損が2箇所認められる。中央やや下に裏打ちの紙の継ぎの跡が横に線状に見えている。

[処置]

1. 状態調査, 写真記録。
2. 裏打ち紙の分離。
3. サクシオンテーブルの上で超音波ミスト, スプレーなどを併用しながら洗浄。
4. 汚損部分の漂白(pH 9 に調節した過酸化水素水を使用)。
5. 裏打ち(第一層は典具帖, 第二層はやや厚手の楮100%の和紙)。
6. 仮張りに貼る。
7. 色調の斑を色鉛筆で整える。
8. 修復後の写真記録。

小出楯重《裸婦素描》1926年

コンテ・洋紙 51.2×34.5cm

[組成]

作品の支持体は0.35mmの厚みを持つ褐色を帯びた白色の洋紙である。表面の手触りは粗いが、水分の浸透は非常に遅い。

四辺共に刃物で切断されている。

描画部分は、コンテで描かれ、向かって右の肩から腕の輪郭線はこの画面の中で最も濃く描かれている部分である。また指で擦っている部分は各所に認められる。描かれた後、定着剤が吹き付けられている。

裏面にも裸婦が描きかけられているが、未完成である。画面とほぼ同じような構図である。

[状態]

支持体の劣化は進行していて、pHの値は5.5を示し、全体に黄変している。特に周縁の黄変が顕著で、下辺は30mmの幅で黄変している。

定着剤が吹き付けられた中央部分は経年により樹脂が劣化して褐色を呈している。

四隅に折れがあり下辺左右は小さく欠損している。

[処置]

1. 状態調査, 写真記録。
2. ゴアテックスを通して作品に水分を幾度か繰り返し与え、水洗の効果を期待した。わずかに褐色を薄くすることができた。
3. 汚損および斑点部分を pH 9 に調節した過酸化水素水で漂白。
4. 漂白部分を手洗い, 水酸化マグネシウムで脱酸処置。
5. 欠損部分を和紙で補填。

6. 和紙で張り手をつけ仮張りに貼る。
7. 色調の斑を色鉛筆で整える。
8. 修復後の写真記録。

栗原忠二《婦人群像》

水彩・洋紙 35.4×45.3cm

[台紙]

台紙は、厚さ約2mmのリグニンが含まれている板紙で、pH4を示した。支持体の紙は全面台紙に糊付けされている。寸法は368×466mm。

[組成]

作品の支持体は、透かしのない、厚さ約0.4mmの機械漉きの洋紙で、四辺は刃物で切り落としたような断面をしている。

支持体の紙の表面は、凸凹があり、緑褐色である。黒コンテで、柱、人物等を大まかにスケッチし、その上に不透明水彩絵具で着色している。絵具が滲んでいる人物の衣服の部分や、紙が絵の具を弾いている箇所、薄く溶いた絵具が溜っている箇所、厚く盛り上げて塗られている箇所、紙の地色を塗り残して見せている部分などがあり、様々な技法が用いられている。

[損傷]

作品は酸性の台紙にべた張りで糊付けされているので、全体的にしなやかさが失われて硬く、酸性物質の影響下にある。画面中央部に茶色のしみが多少認められる。台紙の裏面に斑点が多数発生している。

[処置]

1. 状態調査, 処置前の写真記録。
2. 乾式洗浄。
3. ヘラで台紙を薄くし、慎重にメスで削り取った。
4. 和紙の張り手を付け、仮張りに張る。
5. 処置後の写真記録。

栗原忠二《風景》

水彩・洋紙 23.9×33.1cm

[組成]

作品の支持体は、透かしの無い、厚さ約0.21mmの機械漉きの洋紙で、四辺は直線ではないが刃物で切断されている。紙の表層は多少荒い感じがするが繊維の密度は緻密であるため、水の浸透度は良くない。

作品は鉛筆による下描きの上に不透明水彩で彩色されている。やや灰色を帯びた褐色の支持体の地色が画面に取り入れられて空間として生かされている。

〔損傷〕

支持体は全体的にかなり変色しているがとくに左辺および右辺上部に褐色化が顕著である。白色顔料を含む部分にはあまり支持体の変色が認められない。

支持体の脆弱化がすすんでいるようで、端のほうの、特に接着剤の汚損部分は脆くなっており小さな裂けもある。全体的に紙の特性としての柔軟性が失われている。画面中央から左側の部分に水染みが4箇所見られる。

支持体裏面は pH 5、リグニンテストではリグニンが繊維の中に混在することが認められた。

〔処置〕

1. 状態調査、写真記録。
2. 乾式洗浄。
3. メスで裏面のテープ痕を削る。
4. テトラヒドロフランを用いサククションテーブル上でテープ痕を取る。
5. 絵の具の状態に注意して加湿した後、濡らした吸い取り紙の上に置いて洗浄する。
支持体がリグニンを含むため脱酸は行わない。
6. 支持体周縁およびテープの接着剤の付着していた部分を和紙で補強。
7. プレス。

中西利雄《風景(東大構内)》1947年

水彩・洋紙 36.2×51.2cm

〔組成〕

作品の支持体には Arshes の透かしがあり、0.8mmの厚みを持つ乳白色の洋紙である。

四辺共に刃物で切断されている。

描画部分は、鉛筆で大まかな構図を決め、その上に水彩絵具で描かれている。近景の地面は殆ど筆触を残さずに塗られ、中央の樹木は全ての筆触が見え、人物や樹木の中の明るい色彩は絵具が厚く塗られている。

〔状態〕

支持体の裏面の褐変が著しい。特に両端の褪色が顕著で、pH の値が5を示していたことから、支持体の脆弱化を推定することができる。

画面側にも下右辺に半円形の汚損、褐色斑点が空と建物の境界に多数認められる。

厚く塗られた絵具層に細かな亀裂が認められるが浮き上がりを伴ってはいない。

〔処置〕

1. 状態調査、写真記録。
2. 水洗。署名部分が水に対して溶解するため短時間で処置を停止。
3. 汚損および斑点部分を pH 9 に調節した過酸化水素水で漂白。
4. 漂白部分を水洗。
5. プレス。
6. 色調の斑を色鉛筆で整える。
7. 修復後の写真記録。

(以上5点、山領絵画修復工房)

思想表現としての絵画

—黒田清輝作《智・感・情》—

植野健造

はじめに

画家が絵を描くのは「学者が文章を作ると同じく自分の考を人に見せる事」¹⁾である。これは、黒田清輝がフランス留学期における西洋画学習の過程で理解した重要な絵画観の一つである。明治26年(1893)にフランスより帰国、明治29年には白馬会を創立し、東京美術学校西洋画科の指導教官に任じられた黒田が、日本の洋画界に根づかせようとしたことの一つもまたこの絵画観であった。西洋画といえば対象を迫真的に再現描写する技術であるという理解がなお残っていた当時の日本において、絵画は画家自身の「考え」を表現するものであるという黒田のそのような絵画観の移植の試みは重要な意義をもつ。

しかし、そもそも画家は、自分の考えをどのような方法で絵画作品に託し、どのような方法で見せるものに呈示しうるのだろうか。おそらく、絵画作品にはさまざまな方法でさまざまな考えや思いが画家によってこめられているに違いない。作品が文学的、歴史的な主題もしくはある種の寓意的、象徴的な主題をとりあつかっている場合には、その主題にたいする画家なりの解釈や考えが作品にこめられているはずである。しかし画家はまた、見るものがふつうに作品を眺めているだけでは理解しえな

い画家自身の私的な思いを作品にこめていることもありうる。また、作品が展覧会への出品作として制作された場合は、観衆や社会に向けて、作品の主題や描写されたモチーフそのものとは直接的には関係のないさまざまなメッセージがこめられている場合もある。

黒田清輝が明治30年(1897)の白馬会第2回展に出品した《智・感・情》²⁾(fig.1)は、明治洋画史における前述のような問題を考える場合にとりわけ注意される作品である。ほぼ等身大の裸婦像三作で構成される本作品は、油彩で描かれた人体の背景に金地を用いていること、写實的に描写された人体に朱色の輪郭線をほどこしていること、また三作にそれぞれ「智」「感」「情」という画題がつけられて展覧会に出品されたことといった表現と構想のうえでの特色が目目される。黒田の生涯のなかでも異例に属する本作品の制作意図については、今日なお解き明かされていない問題が多い。すなわち、黒田が明治30年という時点でこのような裸体画の大画面に着手したのはなぜか、本作品につけられた「智」「感」「情」という画題をどのように解釈するのか、三人の女性のポーズに図像の先例はあるのか、三面構成、背景の金地、人体にほどこされた輪郭線といった表現上の特色は何に由来し、どのような意図をもってなされたのかといった問題である。黒田は本作品にどのような考えや思いをこめていたのであろうか。

本作品のかかえるそれらの問題については、すでに先学によってさまざまな角度から論じられてきた³⁾。それ

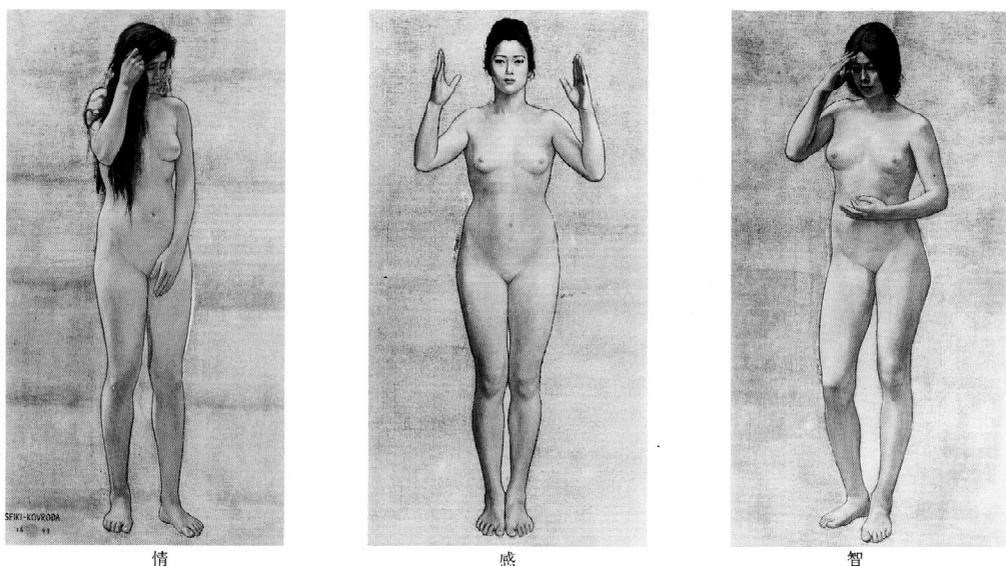


fig.1 黒田清輝《智・感・情》1897-1899年、東京国立文化財研究所

ら先学の研究によって、黒田は本作品によって西洋のアカデミックな絵画理念にもとづく構想画を日本に移植しようと試みたこと、さらには、本作品には当時の裸体画、ひいては黒田らが東京美術学校西洋画科において導入した裸体画教授に向けられた社会の偏見にたいする黒田なりの挑戦の意味がこめられていることといった指摘がなされてきた。筆者もこれらの指摘を正當かつ重要であると考えている。しかし、本作品にこめられた黒田の「考え」を理解するためには、当時の黒田と周囲の状況をより広い視野からより詳細にみておくことが必要であるように思う。

本稿では、黒田の《智・感・情》の制作意図を考える場合に考慮すべきと思われる二、三のことについて、先学の研究をふまえつつあらためて考察し、あわせて、黒田が「考を人に見せる」絵画というときの、その「考え」の内容や「考え」の呈示のしかたについて論じてみたい。

1

まずは、本作品の制作状況について簡単にみておく。

『黒田清輝日記』⁴⁾(以下、『日記』と記す)によれば、三作の制作順は不明であるが、明治30年(1897)の2月16日に自宅のアトリエで裸体のモデルを使って最初の作に着手、3月5日にはほぼ完成、同10日から2作目に着手し同15日木炭素描を終え、同17日から油彩に入り4月8日に仕上げ、同12日から3作目に着手し少なくとも同月末まではモデルを使って制作していたことがわかる。5月3日以降翌明治31年末までの日記が欠けているため、その後、秋の白馬会第2回展出品までの制作状況が不明であるが、第1作に18日間、第2作に30日間を要していることから、第3作もおそらく5月中にはほぼ完成したものと推察される⁵⁾。ちなみに、この年6月以降の黒田は9月にいたるまで、箱根や千葉の稲毛に旅行しており、箱根では《避暑(湖畔)》(fig. 2)などを制作、9月に帰京し《秋草》(fig. 3)を制作しており⁶⁾、10月27日開会の白馬会第2回展にこれら《智・感・情》、《避暑》、《秋草》をふくめた17点の作品を出品している。ただ、『毎日新聞』明治30年10月26日の白馬会展に関する記事⁷⁾に、《智・感・情》は黒田が「経営辛苦の後此頃出来したるもの」とあり、展覧会開催直前に最後の仕上げをした可能性はある。

また『日記』には、本作品のモデルと思われる小川花(姉)と小川幸(妹)という姉妹二人の女性の名がみえる。ちなみに、『時事新報』明治31年11月13日の「モデルの話」という記事に、「扱美術学校に於て始めて女の裸体を画きたるは去る明治廿九年十月頃にして一人はハナ(当時



fig. 2 黒田清輝《湖畔(避暑、湖辺)》1897年
東京国立文化財研究所

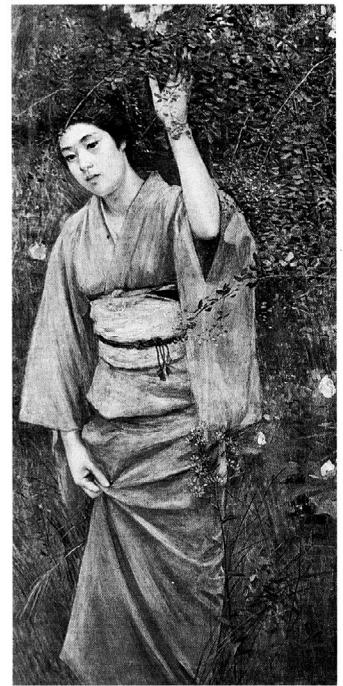


fig. 3 黒田清輝《秋草》1897年
岩崎美術館

十六歳)と云ひ」とある。また、『千代田新聞』明治32年7月14日の「活手本(続)」という記事には、「黒田清輝氏が智感情を写すに用ひたるモデルの少女の如き其図に顕はれたる所は何うやら二十幾歳とも見ゆれど全くは当時二八(筆者註:16歳)ばかりの少女にして」とある。これらの記事から、東京美術学校西洋画科での裸体画教授が西洋画科開設後まもなく始まっていたことが知られ、

その際の最初期のモデルとなった一人「ハナ」はおそらく、『日記』に《智・感・情》のモデルの一人として登場する「小川花」と同一人物ではないかと推察される。そうであるとすれば、よく知られているように、本作品は日本人をモデルとした初めての本格的な油彩による裸体画であったとともに、東京美術学校西洋画科における裸体画教授のために初めてモデルとなった女性とその妹の画像という性格をも備えていたことになる。黒田は、本作品が日本人女性をモデルとした初めての裸体画となることをおそらく当初から意識しており、そのような画家の思いが、本作品にある種のモニュメンタルな性格をもたらしたと考えることもできる。しかも、本作品のもつモニュメンタルな性格とは、日本において裸体画教授をすすめてゆかねばならない立場にあった画家自身にとって記憶すべき女性の画像であるという、いわば私的な思いをも反映しているのではないだろうか。

ただ、『日記』によれば、小川花と小川幸の二人のモデルは、本作品の1作ごとに別々にモデルとなったわけではないようである。たとえば、第2作を制作中の4月4日には幸がモデルとなっており、同じ第2作が完成した4月8日には花が黒田宅に来ている。さらに『日記』をみるかぎり、この二人以外にモデルを使った可能性もある。すなわち、本作品の三作に描かれた裸婦はいずれも特定のモデルをそのまま写生的に描写したものではなく、モデルを手本としながらもそれを理想化した裸婦像であったと考えられる。この点に関連して注目されるのは、《智》の裸婦像の両腕の配置を別とした基本的なポーズが、黒田のフランス留学中の1888年の木炭素描《裸婦習作26》(fig. 4)ときわめて類似していることである。両者はポーズだけでなく、光源の向き、それにとまう人体の陰影のつけかた、さらには人体の輪郭、乳房や腹部

の筋肉の描写などがきわめて類似している。一方、《感》と《情》には《智》の場合ほど類似した木炭素描を見つけることはできないが、《感》の両手を上方にかかげるポーズはやはり留学中の1889年の《裸体習作58》(fig. 5)に、《情》の髪の毛に手をあてるポーズは1887年の《裸婦習作18》(fig. 6)などにそれぞれ共通性を認めることができる。おそらく、黒田は日本人の裸婦像を制作するにあたりモデルを実際に使っているものの、基本的には自らの留学前期のアカデミックな裸体画学習の成果を下敷きとし、さらに理想化した裸婦像を志向して本作品を制作したのである。その結果、本作品の裸婦像はほぼ8等身に近いプロポーションとなっている。先にも述べたように黒田は本作品が日本人をモデルとした最初の油彩画となることを認識していた。また、黒田は東京美術学校で自らが導入した裸体画教授に向けられた社会の非難もまた承知していたはずである。正統なる西洋絵画の理念と学習法を日本に根づかせる立場にあった黒田にとって、日本人をモデルとした裸婦像を世に問うことは、いわば一度は通らねばならない関門のようなものであったように思われる。しかしそれだけに、初めて世に問う日本女性の裸婦像があまりにも卑俗なレベルでの批評の対象となることは本意ではなかったであろう。このような状況が、生身の人間であることを感じさせないような裸婦像、すなわち、金地という抽象的な背景に理想化されたプロポーションと写実性をぎりぎりの線までおさえたようなフラットな彩色によって描かれた裸婦を配するという表現の一つの要因となっていると考えられる。事実、最初の裸体画問題をひきおこした明治28年(1895)の第4回内閣勸業博覧会出品の《朝妝》(fig. 7)は現実的な設定をもち生身の人体を感じさせる裸婦像であったのにたいし、本作品は《朝妝》に続き再び裸体画論争をひきおこしたもの

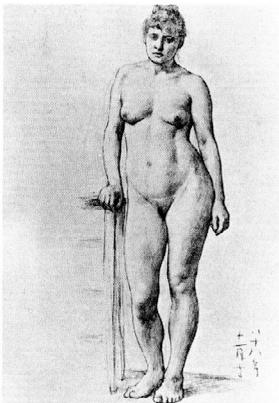


fig. 4 黒田清輝《裸婦習作26》1888年
東京国立文化財研究所



fig. 5 黒田清輝《裸体習作58》1889年
東京国立文化財研究所

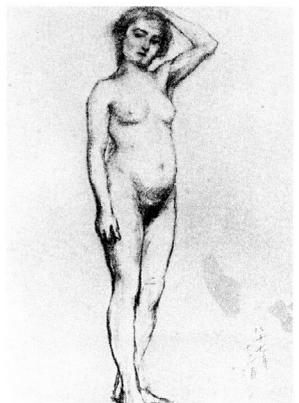


fig. 6 黒田清輝《裸婦習作18》1887年
東京国立文化財研究所

の、『国民新聞』明治30年11月10日の批評⁸⁾などには「今回の如く全く理想化せられたるものに至ては悪感実感を起さずして寧ろ神々しき心地せらるゝ」といった評がみられるのである。

ところで、本作品は現在はそれぞれ三作が別々に額装されているが、白馬会第2回展当時は、『毎日新聞』明治30年10月26日の記事⁹⁾と『国民新聞』明治30年11月9日掲載の挿図(fig. 8)から、三面を連続して一つの額に納めて出品展示されたようである¹⁰⁾。また、後者の挿図では三面のうち中央の《感》の上部に白馬会のシンボルであるパレットが掲げられていて注意をひく。それはあたかも本作品が白馬会の制作活動を導く三人の女神であるかのような感を呈しているからである。

2

ところで、これもよく知られているように、本作品は白馬会第2回展の2年後の明治32年に補筆が加えられ、年記署名がいれられ、翌明治33年(1900)のパリ万国博覧会に出品され、黒田は銀牌を受賞した。

そこで次に、本作品のパリ万国博覧会(以下、パリ万博と記す)出品までの経緯をみてみたい。というのは、黒田が制作当初から3年後のパリ万博出品を想定して本作品に着手したのではないか、そうであるとすれば、このことも本作品の構想と表現に関わる問題を考察するうえで重要であると考えからである。これまでの研究でこの点についてとくに問題とされてこなかったのは、1900年のパリ万博への出品については、パリ万博の前年の明治32年(1899)8月に黒田が臨時博覧会美術品鑑査官に任じられ、自らも鑑査に関わり、『智・感・情』、『湖辺(避暑、湖畔)』、『秋郊』、『樹陰』(fig. 9)、『寂寞』¹¹⁾(fig.10)の5点がこの時点で出品作として選ばれたという認識があったためである。しかし、このことはいま少し詳しくみる必要がある。

1900年のパリ万博と日本の美術品の出品については、丹尾安典氏による興味深い報告と考察がある¹²⁾。それらを参照すると、日本が1900年のパリ万博にむけて本格的な準備にはいったのは明治29年末のことであった¹³⁾。とくに、美術についてはパリでの開催ということもあり、また、それ以前の万博にももちろん日本の美術品は出品されていたものの、じつはそれらは美術品として扱われたことは少なく、1900年の万博こそは日本の美術品を美術館のなかに「純正の美術品」として展示することが、政府にとっても美術家にとっても共通の悲願であった。

黒田がパリ万博の鑑査官を命じられ、最終的に出品作の鑑査にあたるのは先にも述べたように明治32年8月の

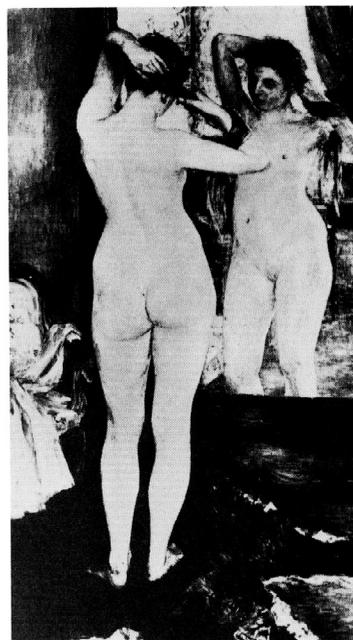


fig. 7 黒田清輝《朝妝》1893年、1945年焼失



fig. 8 『国民新聞』明治30年11月9日

ことである¹⁴⁾。しかし、これに先立つ明治30年3月25日に、臨時博覧会事務局よりパリ万博の出品に関する調査委員をすでに委嘱されているのである¹⁵⁾。それは、まさに黒田が《智・感・情》に着手した時期と重なっている。東京美術学校西洋画科の指導教官として、また白馬会のリーダーとして、かつての留学地パリで行われる万博への出品を黒田が意識しないはずはない。『毎日新聞』明治30年11月17日¹⁶⁾によれば、この年明治30年より種々の展覧会の出品作のなかからパリ万博への出品作を選定する方針が臨時博覧会事務局により決定されていたことがうかがえる。また、同記事では出品に適する作品の条件として「少くも横堅何れに於てなりとも三尺以上」の大画面作品が望まれると述べ、さらにその他の条件をもみたくす優作として同紙の11月18日の記事¹⁷⁾は、《智・感・情》を「仏国博覧会への出品には最も適合せるを見ん」と結論づけている。この『毎日新聞』の記事を書いたのは、まさに白馬会親派の美術記者吉岡芳陵(育)であることが注意される。それは、あたかも黒田の考えを吉岡が代弁しているように思えるのである。そして何より、吉岡はこれに先立つ『毎日新聞』明治30年10月26日の記事¹⁸⁾で《智・感・情》は「是れぞ氏(筆者註：黒田)が巴里の万国博覧会に出品せんとて経営辛苦」して制作したものであると書いているのである。吉岡が《智・感・情》をパリ万博出品への最有力作として推す前述の記事が掲載された明治30年11月18日に当時の臨時博覧会事務局副総裁九鬼隆一は白馬会の会場に出張し、黒田と相談のうえ、この年の白馬会出品作のなかからは黒田の《智・感・情》と安藤伸太郎の《曙》をパリ万博への出品作に選んでいる¹⁹⁾。このような経緯をみる時、黒田は本作品の制作当初から1900年のパリ万博への出品を想定していたと考えるべきであろう。



fig. 9 黒田清輝《樹陰(木かげ)》1898年



fig.10 黒田清輝《寂寞(物淋し、寂寥)》1898年

3

《智・感・情》の制作意図に関して、1900年のパリ万博への出品を黒田が当初から想定して本作品に着手したことを指摘した。それは、言い換えれば、黒田が本作品の制作にあたり1900年のパリ万博で通用する作品をめざしたであろうことを意味する。

この時期の黒田は、どのような絵画であれば1900年のパリ万博において西洋諸国の絵画に見劣りしない絵画であると考えていたのであろうか。この点に関して、田中淳氏が紹介された資料が注目される²⁰⁾。それは明治33年(1900)の『二六新報』に3月25日から4月1日まで掲載された黒田の「美術教育の方針」(1)~(8)と題する一文である。この文章はもともと明治31年に書かれたものとみられるが²¹⁾、この文章において黒田は、西洋美術の沿革につきギリシャ時代から復興時代をへて19世紀の古典派、ロマン派、自然派、印象派までその大略を述べた後、もっとも最新の西洋絵画の動向につき次のように記している。

▲最近の傾向は想を写さんとす

最近の絵画は、写実より脱化して写想に赴かんとするものなり、今や形に色に天然の実想は殆んど究め尽したりといふべく、是より新に起らんとするは精神的方面なり、嘗て開けたる印象派の主義は調色の

革新にありと雖、其結果として色彩の心理的印象を描写し、視官の実感以外なる感能に訴んとす別に「サムボリスト」と称する一派は、同じ主義を線形に適用して、情機の微妙なるものを発表するの目的を以て輓近に起り共に天然の複雑なる顕象を叙するに簡明の手段を取りて、道理的人間の性情を啓発せんとす、未だ現今の芸術に大なる勢力を有せざれども、之を以て将来に生ずべき傾向の一斑を徴するは決して誤なからんを信ず要するに将来の芸術は学理に背かずして思想を描出するものなることを断言すべし

この記事によって、明治31年頃の黒田は西洋の世紀末の象徴主義の絵画運動を認識していたことが知られる。そこで田中氏は、《智・感・情》において黒田は「将来に生ずべき傾向」の一つである「サムボリスト」を念頭におきつつ、「線形に適用して、情機の微妙なるものを発表」という表現意図をもっていたのではないかと指摘されているのである。

黒田と世紀末の象徴主義絵画との関連を考える場合、次のようなことも示唆的である。

『久米桂一郎日記』によると、黒田と久米桂一郎はフランス留学末期の1892年の3月23日に、連れだってパリのデュラン＝リュエル画廊で薔薇十字展の第1回展を見ていることが知られている²²⁾、また、明治34年の白馬会第6回展にはアルフォンス・ミュシャ他のサロン・デ・サン(Salon des Cent)での展覧会ポスターなど、象徴主義やアール・ヌーボーなどの絵画運動と関連する多数のポスター類が出品されていることも注目される²³⁾。黒田および白馬会の西洋世紀末の象徴主義の絵画運動への共鳴を考えさせるのである。黒田がフランスに留学していた世紀末のパリでは、1886年にはジャン・モレアスの「象徴主義宣言」、1889年にはゴーギャンらがパリで「印象主義および総合主義展」を開催、1891年にはアルベール・オーリエの「絵画における象徴主義」が発表され、ナビ派の第1回展も開催されている。黒田が、1900年のパリ万博にあたり、象徴主義の絵画運動を意識していたとしても不思議ではないのである。

黒田の《智・感・情》をそうした西洋の象徴主義の絵画との関連のなかでとらえようとする解釈は、あらたなくつかの問題を提起する²⁴⁾。その一つは、世紀末の象徴主義絵画といってもその内容は多様であり、黒田は《智・感・情》を制作するにあたり具体的にどのような画家のどのような作品を想定していたのかという問題である。黒田は、前記の「美術教育の方針」の他には象徴主義絵画について言及することは少なく、黒田がどのように象徴主義絵画を理解していたのかを知ることはできな

いのである。いま一つは、《智・感・情》が西洋の象徴主義絵画を意識した作品であるとするれば、従来言われてきた、本作品は西洋のアカデミックな絵画理念にもとづく構想画の移植の試みであるとする解釈に多少の訂正が必要となるであろう。つまり、《智・感・情》は西洋の伝統的なアカデミーの理念にもとづく構想画であるのか、それとも、時代の最新様式としての象徴主義絵画であるのかという問題である。この問題にたいして筆者はその両面をそなえた作品であると理解したい。少なくとも、本作品は当時の日本においては、西洋の伝統的な構想画を移植する試みとしても、また、西洋の象徴主義運動を意識した革新的な試みとしても両立しえたように思われるし、また、黒田もこの二つの試みを両立しうるものとして本作品を制作したと考えられるのである。奇妙ではあるが、それが、当時の日本の洋画界の状況であり、黒田のおかれていた状況でもあるのである。

4

《智・感・情》制作にあたっての黒田の制作意図をいま一つ別の側面からも考えてみる。本作品の制作意図を考える場合、当時の東京美術学校日本画科の教授法やその指導者岡倉天心のひきいる日本絵画協会の動向をも考慮する必要があると思われる。これまでの研究史では、明治29年(1896)に東京美術学校に西洋画科が設置される以前を日本画と洋画の対立構図でとらえ、それ以後は日本画、洋画それぞれの新派と旧派の対立構図でとらえる見方が一般的であったように思う。しかし、明治29年以後の日本にあっても日本画と洋画が対立するものとして存在し、したがって、それぞれの絵画はつねにみずからの存在理由を自問し、その存在理由を社会に呈示してゆかなければならない状況は続いたのである。

日本絵画協会は白馬会と同じ明治29年(1896)に結成、同年9月に第1回の絵画共進会を開催し、翌年より春と秋に展覧会を開催している。その初期の絵画共進会の出品作には、下村観山の《仏誕》(fig.11)、《光明皇后》、橋本雅邦の《臨済の一喝》、山田敬中の《美音》(fig.12)、横山大観の《無我》(fig.13)、菱田春草の《水鏡》(fig.14)など、顔料や色彩感覚などに西洋画的な要素をとり入れ、歴史や宗教に題材をとり、象徴的、寓意的な内容をこめた「理想画」が少なからず出品され賛否両論をよんでいた。しかし、黒田はこれらの作品を、西洋画の表層のみを模倣し、絵画にとって最も重要な人体表現の基礎修練を欠いた、観念が技術に先行する作品として批判的にみているようである²⁵⁾。と言うよりも、この時点での黒田は、これら日本画の作品を批判的に論じ、西洋絵画の長所と



fig.11 下村觀山《仏誕》1896年
東京藝術大学藝術資料館



fig.12 山田敬中《美音》1897年
東京藝術大学藝術資料館



fig.13 横山大観《無我》1897年，東京国立博物館



fig.14 菱田春草《水鏡》1897年
東京藝術大学藝術資料館

正当性を主張する立場にあったというべきであろうか。ともかくも、黒田の生涯一貫した絵画観の一つは、寓意的、象徴的な意味内容をもった絵画そのものは西洋絵画の正統であるとする立場であったが、そうした作品もまずは基礎的な人体表現の修練、対象を写實的に描写する修練をへてこそ制作すべきであるとする立場であった。明治30年前後の時期、久米桂一郎が批評子曉鴉として関与した『美術評論』の作品批評欄「無扉門」や吉岡芳隆の『毎日新聞』の美術記事などにも、黒田と同様な絵画観がたびたび披瀝されている。

ちなみに、明治期の美術を考える場合に重要な用語である「理想画」とは、明治30年頃にあらわれてくる用語で、具体的には、この初期日本絵画協会の象徴的、寓意的内容をもつ作品群にたいして批判的な意味をこめて呼ぶ用語として登場してきたようである。

《智・感・情》の制作意図として、これら日本絵画協会の作風、ひいては東京美術学校日本画科の教授法などに対抗する意識もあったのではないだろうか。すなわち、日本絵画協会の下村観山、菱田春草らの作風を「理想狂画」「妙な理想画」と批判する黒田は、西洋絵画の正統たる、写實的な人体表現を基礎とした「理想画」を呈示する意図があったと考えられるのである。

5

最後に、「智」「感」「情」という画題についてもふれておく。

すでに先学によって指摘されているように、黒田が本作品において日本の観衆に呈示したかったのは、なによりもまず、西洋絵画のもつ伝統、すなわち、裸婦を描きながらもそれが単なる裸婦ではなく抽象的な概念の擬人像たりうることを示すことであっただろう。そうであるとすれば、「智」「感」「情」という画題にどれだけの明確な思想がこめられていたかどうかは疑問であるとする解釈もなりたつ。たしかに制作当時の『日記』では本作品について、「裸体の女を手本ニして画を始めた」(2月16日)、「今度の裸は出来上りだ」(3月5日)、「今日ハ新たに裸を一枚始めた」(3月10日)、「今度の裸画の木炭を仕舞つた」(3月15日)というように「裸」「裸画」とのみ記していて、作品の主題や制作意図をうかがわせる記述はみられない。黒田は『日出新聞』明治36年7月27日の「黒田清輝画伯の断片(下)」で、「裸体画は或る高尚な理想を画にしたもので、裸体画そのものは普通の肉体ではない、全く『人間』以上のものなのです」と述べているが、それに続き「シカシ我々の描く裸体画はマダ其処までに行つて居ませんヨ、唯研究の結果描くといふ

までです」とも語っている。本作品についても、ここで述べていることが実情であったのかもしれない。

ただ、それでもなお、黒田がなぜ「智」「感」「情」という三つの画題を設定したのかという問題は残る。この点について、黒田は画家の三派なる理想派、印象派、写実派をあらわさんとし、それぞれを「智」「感」「情」にあてたと述べている²⁶⁾。その意味は必ずしも明確ではないが、おぼろげながらも当時の黒田の絵画観を示している興味深いことのように思われる。黒田は、絵画がそれを見る人の心に訴える力について分析的に考察しているのであり、その一つのモデルとして人の「智」の側面に訴える絵画、「感」の側面に訴える絵画、そして「情」の側面に訴える絵画というおよそ三つの要素で絵画をとらえていたと解釈することもできる。その意味で、黒田が1900年のパリ万博に、《秋郊》こそはどのような作品であったか不明であるが、《智・感・情》、《湖辺(避暑、湖畔)》、《樹陰》、《寂寞》というそれぞれに作風の異なる作品群を出品したことは興味深いことのように思われるのである²⁷⁾。

むすび

本稿では、黒田清輝の《智・感・情》に関するいくつかのことについて指摘してきた。

明治30年の時点で大画面の等身大裸婦による、抽象的観念の擬人像に着手した背景には、これまで指摘されてきたように、西洋絵画の正統たる理念にそう構想画の移植の試み、社会の裸体画批判にたいする挑戦の意味といった要因の他に、黒田が1900年のパリ万博への出品を想定しての制作という動機があったと考えられる。写實的に描きつつもその写実性をぎりぎりの線まで抑制し、かつプロポーションなどを理想化した裸婦に輪郭をつける手法は、西洋の象徴主義絵画の特定の画家ないしグループの様式の直接的な影響をそこに認めることはできないが、少なくともそうした動向を意識した表現であっただろう。また、金地を背景とした人物表現や三面構成という表現形式の伝統が日本の美術の歴史にあるだけに、当時西洋絵画の表現法をもちこみつつも新しい日本画の創造をめざしていた日本画家たちにも何がしかの刺激を与えたであろう。黒田が本作品においてめざしたものは、国際性を持ちつつしかも日本的な造形要素をもちこんだ絵画であった。西洋のアカデミックな絵画理念の移植と同時代的な絵画動向の紹介という保守性と革新性の同居、国際性を意識しつつも日本的な油彩画の創造をめざすといった点は、本作品も含め黒田のこの時期の作風や指導者としての立場を特色づけるものである。

黒田清輝は、画家が絵を描くのは学者が文章を発表するのと同じく「自分の考えを人に見せる事」であると考えていた。《智・感・情》には、まさに、これまでみてきたように画家のさまざまな考えや思いがこめられており、それらの全体が本作品の制作意図に関連する。自作について終始語ることの少なかった黒田であるが、本作品については特にその感が強い。しかし、そのことは逆にいえば、画家は文章やことばでなく、あくまでも絵画によって自らの考えを披瀝するものであるという強い自覚があつてのことであろう。本作品が黒田にとって会心の作であったかどうかは知りえないが、少なくとも、当時の黒田と日本洋画界がおかれていた複雑な状況のなかで、絵画作品の発表というかたちで自らの立場と思想を十分に表明しえた作品として黒田はある程度の充足感をえたのではなかったか。そのことを、本作品にたいして画家自身がことのほか寡黙であったことが証明していると考えたい。これまでの研究では、抽象的概念の擬人像であるという点のみをもって本作品を構想画と位置づけてきた感があるが、本稿でみたようなさまざまな考えや思いの全体こそが本作品を構想画たらしめていると解釈すべきであろう。

現在の私たちは、黒田の絵画作品の「中」にのみ画家の考えの内容を求めすぎてはいないだろうか。そのために、黒田の作品の中に意味内容をさがしてみても空振りに終わることがある。たとえば、初期の白馬会展には《大磯鳴立庵》(明治29年第1回白馬会展)などの印象派風の絵画を出品している。これらの絵画の中にはなるほど明確な意味内容を読みとることはできない。しかし、当時の日本において印象派風の絵画を啓蒙的に紹介するという考えを読みとろうとすると、それらの作品は作品の外側に別のメッセージをもって私たちに語りかけてくるように思われる。絵の中にもみ意味内容をさがすのではなく、黒田の公的あるいは私的な体験と一方では社会的なコンテクストの中でそれぞれの作品にこめられた考えを読みとっていく作業が必要であると思われる。

ともあれ、対象の即物的な再現描写の段階をこえ、画家自らの考えの表現手段として絵画が認識され、それを認識したうえで、画家が展覧会という場に作品を出品することを自覚するとき、洋画は近代美術として日本に定着する道を見いだしたであろう。そのような歴史的視点で眺めるとき、黒田の創立した白馬会と、その第2回展に出品された《智・感・情》の意義はあらためて大きかったといわざるをえないのである。

(うえのけんぞう 石橋美術館)

註

- 1) 黒田清輝「明治23年4月17日附パリ発信父宛書簡」『黒田清輝日記』第1巻、昭和41年7月、中央公論美術出版
- 2) 油彩・画布、3面、額装、各180.6×99.8cm、明治30-32年、東京国立文化財研究所
- 3) 高階秀爾「黒田清輝」『季刊芸術』第1巻第2号、昭和42年7月(同氏『日本近代美術史論』、平成2年、講談社学術文庫に収載)
三輪英夫「黒田清輝筆『智・感・情』をめぐって」『美術研究』第328号、昭和59年6月
橋富博喜「黒田清輝《昔語り》と《智・感・情》—その『平面性』について」『デアルテ』第1号、昭和60年3月
後藤新治「黒田清輝の『智・感・情』再考」『毎日新聞(西部本社版)』昭和62年8月27日夕刊
陰里鉄郎「人物赤裸画から裸体画へ」『日本美術全集 第22巻 洋画と日本画』、平成4年4月、講談社
- 4) 『黒田清輝日記』第2巻、昭和42年2月、中央公論美術出版
- 5) 『東京日日新聞』明治30年3月25日の「近事片々」の項に、「黒田画伯十三面の裸体画を描んとす一面すらも世論彼が如く鼎沸す十三面も作られば堪らぬ也」という記事があり、本作品との関連が注目される。この記事は、本作品が何かの建築物の室内の壁面を飾るような作品の一部として着手された可能性を想像させるが、現在この他に本記事と関連する資料を見いだせない。本稿では、本作品は三作で完結する作品であるものとして考察をすすめる。
- 6) 三輪英夫編「黒田清輝年譜」『黒田清輝素描集』、昭和57年3月、日動出版部
- 7) 「白馬会展覧会」『毎日新聞』明治30年10月26日
「此外に三個の裸体画は黒田氏の作に藉りて現はるべし是れぞ氏が巴里の万国博覧会に出品せんとて経営辛苦の後此頃出来したるものにて『智』『情』『感』の三心象を表はせる裸体画なり地を金泥にして日本的意匠を添へ各個横三尺竪六尺位なるを連ねて一額の中に収むるもの、ペンキ塗道徳眼の人々さては、其偉観に驚けるもの、貞美の裸体画を愛せるもの、其技術を味ふものなど出品の暁は観客の群集せるさま今より想ふべきなり」
- 8) 守中居士「白馬会展覧会略評(二)」『国民新聞』明治30年11月10日
「嘗て噂の高りし黒田清輝氏の等身大の裸体婦人画

三幀は『智』『感』『情』を題して出されぬ。彼の博覧会出品の裸体画は『朝粧ひ』といふが如き題にて実感を牽き易きものなりしかば種々の紛議もありしなれ、今回の如く全く理想化せられたるものに至ては悪感実感を起さずして寧ろ神々しき心地せらるゝは後景の金箔にもよればは知ねども又氏の経営の結果にも帰すべき乎。流石に新派の驍將の筆とて色彩の秀潤なる、筋骨の整正せる間然すべきなく。中央の『感』姿勢よりするも容顔よりするも最もよくその性情を發揮したり。『智』の慧明の顔もよく表現せられたり唯『情』の一幀は吾人少しく解釈に苦めり、題して単に情といへるはや、漠然として何の情たるを知る能はざるもの或は題意を模糊ならしむるに非ずや。然れどもこの画幅の妙なる世界的とはかゝるものをやいふならむ。」

9) 註7

10) ちなみに現在の本作品の額には、『智』に53、『感』に54、『情』に55というナンバプレートがそれぞれ取り付けられている。本作品が現状のように額装されたのがいつの時期なのか不明である。

11) パリ万博に出品された《寂寞》は、明治31年の白馬会第3回展に出品された出品目録204の「物淋し」がこれにあたるものとみられる。また、同じパリ万博出品の《秋郊》についてはどの作品がこれにあたるのか不明である。

12) 丹尾安典「1900年パリ万博と本邦美術」『日本近代美術と西洋』、明治美術学会編、平成4年4月

13) 当時の諸新聞によれば、臨時博覧会評議委員会において議定された巴里万国博覧会出品規則が公表されたのは、明治29年12月のことである。

14) パリ万博へ出品する美術品を鑑査する最終的な鑑査官の任命は明治32年8月22日にあり(『時事新報』明治32年8月23日、他)、8月末に鑑査が行われたが、当初の鑑査基準では鑑査を通過した作品の数が少なかったため、やや基準をあまくした鑑査結果が9月初めに発表された(『毎日新聞』明治32年9月6日、他)。なお出品内容を充実するため、この明治32年秋に開催された展覧会からもさらに出品作が選ばれた。

15) 前掲『黒田清輝日記』第2巻、明治30年3月25日に「今日臨時博覧会事務局と云のから手紙が来て仕事の囑託をされた」とある。『世界之日本』明治30年3月25日によれば、この「仕事」とはパリ万博に関する出品選択の調査委員であったことがわかる。

16) 芳陵生「白馬会展覧会所見(一)」『毎日新聞』明治30年11月17日

「博覧会出品の候補如何

◎巴里万国博覧会の開会は僅か三年の後に在れば政府は是れより年々の展覧会に於て其出品の候補を漁らんことを期す(略)

◎出品撰択の方針如何、要は其出品の西欧美術家の意を惹き列邦観客の眼を注かしむるに在り、則ち大作——面積の大なると共に、其作品の雋逸せる大作を撰ぶを以て其方針と為すこと肝要なるべし(略)」

17) 芳陵生「白馬会展覧会所見(二)」『毎日新聞』明治30年11月18日

「◎黒田清輝氏の裸体画は題して智、情、感と云ふ、惟ふに絵画に印象派理想派写实派の三者あること端なくも氏の想を駆りて、印象派即ち『感』なるものを理想即ち『智』なるものを写実即ち『情』なるものを何物にも妨げられざる裸体に藉りて円満に表示せんとて企てしめたるならんか、日本人を『モデル』に為たる裸体画は之を以て嚆矢と為す、日本人をモデルに用ひ、日本人の頭脳を以て、而かして日本の地に於て裸体を描くも今日既に此位の作を為すこと敢て難きに非ずとの抱負、氏に於て在りや無しや之を知らずと雖も、此数点を以てするも、洋画発達の中心を以て自任する仏国博覧会への出品には最も適當せるを見ん(略)

◎単純なる線を以て描けるは、ピュビス、ド、シャバンヌが近年頻りに画き出だせる所、氏も今や此壁画的即ち裝飾画に指を染めて古代希臘の美はしき辺りを偲ぶにやあらん、(略)」

18) 註7

19) 「万国大博覧会出品画の撰定」『読売新聞』明治30年11月20日

「予報の如く一昨十八日午後一時より目下開会中なる第三回絵画共進会及白馬会列品中につき来三十三年巴里万国博覧会出品撰定の為め臨時博覧会副総裁九鬼隆一氏同会に出張し橋本雅邦、黒田清輝、川端玉章、前田健二郎、執行弘道、岡倉覚三其他諸氏と種々評議する所あり遂に左の数点を以て出品適當のものとして選定評決せり

佐藤継信 最後 下村観山 聴法 横山大観
菊 寺崎広業 家鴨 川合玉堂
羅浮美人 本多天城 大石良雄 婦途 島田墨仙
平和 山田敬中

以上絵画共進会

智情感(裸体画) 黒田清輝 曙 安藤伸太郎

以上白馬会

20) 田中淳「序論—明治中期の洋画」『写実の系譜Ⅲ 明治中期の洋画』展図録、東京国立近代美術館、昭

和63年

- 21) 「美術界消息 故外山博士と黒田清輝氏(承前)」『二六新報』明治33年3月25日
- 22) 『久米桂一郎日記』, 平成2年3月, 中央公論美術出版
- 23) 「白馬会展覧会出品目録(一)」『美術研究』第354号, 平成4年4月。第5回展の白馬会展の会場を写したと思われる写真(『藤島武二展』図録, 東京都庭園美術館, 平成元年に鮮明な写真が掲載)には, 右よりの壁に2点の作品が飾られているが, この2点が薔薇十字展第1回展のカルロス・シュパーベによるポスターとアルフォンス・ミュシャの《トスカ》のポスターであることが中田裕子氏によって指摘されている(中田裕子「藤島武二《天平の面影》《諧音》そして《蝶》に表象された雅楽と西洋音楽」『ブリヂストン美術館 久留米・石橋美術館 館報』第31号, 昭和58年)。
- 24) 黒田の《智・感・情》を西洋の象徴主義絵画の動向と関連づけて位置づける解釈は, 勅使河原純氏の「日本の近代洋画をめぐって—明治象徴主義と青木繁の演劇性—」『名画が彩る日本の近代洋画』展図録, 世田谷美術館, 昭和63年においてもみられる。
- 25) たとえば, 「美術紛々録」『日本』明治31年2月9日には, 「◎黒田清輝同記者に語つて曰く『世間には意匠を第一にして技術は二の次にしると頻りに意匠を奨励し其弊は遂に妙な理想画を作るものがあるのは甚だ解らない兎に角画は技術あつての画です』と, 現今流行せる日本美術界の弊害を論ず其言見る可き者多し」とあるが, ここでの黒田の発言は, 吉岡芳陵による「昨年美術界(中)」『毎日新聞』明治31年1月7日の「◎開発宗の開山橋本雅邦が常に唱道せる『こゝろもち』は此に凝結して所謂理想上の一画堂を現出せしめたるの観ありしなり, ◎『美術学校の人達は技術の土台は既に出来居れば, 是よりは, 意匠を第一に心掛くべし, 技術は其等を写すと同時に自ら研究し往かるゝなり』云々是れ雅邦翁の説く所, 意匠素より重し然れども技巧果して第二に置くべきか, 此精神を以て後進を導く是れ理想にのみ趨りて技術を苟めにし考のみ無闇に高尚がりて形状はお留守となれる理想狂画を出だせる所以ならずとせんや(略)」という記事をふまえているのであろう。
- 26) 「黒田清輝氏の裸美人談」『時事新報』明治30年12月12日
「氏は白馬会に出品したる智, 感, 情の三美人に就きて曰く智, 感, 情の文字は少しく当字に似たるが当初, 画家の三派なる理想, 引証, 写実の意を表さ

んとして筆を執りたるものに外ならず這は深き意味あるにあらずして理想を智, 引証を感, 写実を情に改めたるまでの事なりと」

- 27) 本稿では, とくに《智・感・情》のみを1900年のパリ万博と関連づけて論じたが, 他の《湖畔》, 《樹陰》, 《寂寞》など, さらにパリ万博へは出品されなかったものの《秋草》なども, いくらかは1900年のパリ万博への出品を意識して制作された可能性があるのではないかと考える。

本稿は, 1993年7月31日に石橋美術館で開かれた小研究会(第9回日本近代美術研究会)での発表にもとづくものであり, また, 鹿島美術財団より平成6年度の助成を受けた「白馬会の研究」の一部をなすものである。

黒田清輝作《智・感・情》関連年表

明治7年	1874	西周「知説(一)~(五)」『明六雑誌』第14, 17, 20, 22, 25号 西周「情実説」『明六雑誌』第18号
明治19年	1886	ジャン・モレアス「象徴主義宣言」『ル・フィガロ』9月18日
明治22年	1889	西周「心理説ノ一斑」『東京学士会院雑誌』第8編之4
明治24年	1891	パリのカフェ・ヴォルピエニで印象主義および総合主義展開催。 アルベール・オーリエ「絵画における象徴主義ーポール・ゴージェン」『メルキユール・ド・フランス』 パリのパール・ド・ブートヴィル画廊でナビ派の第1回展開催。
明治25年	1892	3月23日 留学中の黒田と久米桂一郎, パリのデュラン＝リュエル画廊で薔薇十字展第1回展を観る。 (『久米桂一郎日記』)
明治26年	1893	黒田, フランス留学より帰国。
明治28年	1895	京都で開催の第4回内国勧業博覧会で, 黒田の《朝妝》に関する裸体画問題が起こる。
明治29年	1896	5月 黒田, 東京美術学校西洋画科の指導教官となる辞令を受ける。 6月 黒田ら, 白馬会を創立。 9月 東京美術学校西洋画科の授業開始。 10月 白馬会第1回展開催。 12月 臨時博覧会評議員会で議定された「巴里万国博覧会出品規則」が発表される。(『日本』明治29年12月16日, 他)
明治30年	1897	2月16日 黒田, 自宅のアトリエで《智・感・情》の制作に着手。(『黒田清輝日記』) 3月5日 黒田, 《智・感・情》の最初の1枚を完成。(『黒田清輝日記』) 3月10日 黒田, 《智・感・情》の2枚目に着手。(『黒田清輝日記』) 3月15日 黒田, 《智・感・情》の2枚目の木炭画を完成。(『黒田清輝日記』) 3月17日 黒田, 《智・感・情》の2枚目の油彩画に着手。(『黒田清輝日記』) 3月25日 黒田, 臨時博覧会事務局よりパリ万国博覧会の出品選択に関する調査委員を嘱託される。 (『黒田清輝日記』, 『世界之日本』明治30年3月25日) 4月8日 黒田, 《智・感・情》の2枚目を完成。(『黒田清輝日記』) 4月12日 黒田, 《智・感・情》の3枚目に着手。(『黒田清輝日記』) (この後, 5月3日より翌明治31年12月まで黒田の日記欠) 10月26日 「白馬会展覧会」『毎日新聞』 10月27日 白馬会第2回展, 上野公園旧博覧会5号館で開催, 12月5日まで開催。黒田, 同展に《智・感・情》, 《避暑》, 《秋草》など17点を出品する。 11月7日 銀杏先生「白馬会一見(下)」『日本』 11月9日 守中居士「白馬会展覧会略評(一)」『国民新聞』 11月10日 守中居士「白馬会展覧会略評(二)」『国民新聞』 11月11日 「黒田氏の裸体画(上)」『時事新報』 11月12日 「白馬会の裸体画に就ての疑ひ」『日本』 11月13日 「黒田氏の裸体画(下)」『時事新報』 11月17日 芳陵生「白馬会展覧会所見(一)」『毎日新聞』 11月18日 芳陵生「白馬会展覧会所見(二)」『毎日新聞』 黒田の《智・感・情》, 1900年パリ万国博覧会の出品作品に選ばれる。(『読売新聞』明治30年11月20日) 11月20日 すがも「欄外欄 日本婦人の裸体画」『国民新聞』 11月29日 覚童子, 眠叟子「白馬会素人見の記」『読売新聞』 12月12日 「黒田清輝氏の裸美人談」『時事新報』
明治32年	1899	8月 パリ万国博覧会へ出品する美術品の鑑査官が発表され, 黒田もあらためて任命される。(『時事新報』明治32年8月23日, 他) 8月末 パリ万国博覧会へ出品する美術品の鑑査が行われ, 黒田の《湖辺》《秋郊》《智・感・情》《樹陰》《寂寞》の5点が選ばれる。(『都新聞』明治32年8月31日, 『毎日新聞』明治32年9月6日, 他) 10月 パリ万国博覧会へ出品する美術品の追加のための最終の鑑査が行われる。(『読売新聞』明治32年10月28日, 他)
明治33年	1900	5月25日 黒田, 文部省から命ぜられたフランス留学のため横浜を発ち, 7月6日, パリに着く。 4月14日 パリ万国博覧会の開会式が行われる。 8月18日 パリ万国博覧会賞牌授与式があり, 黒田, 銀牌を受ける。(『国民新聞』明治33年9月26日, 他)

ブリヂストン美術館における 図書資料の分類について

中村節子

はじめに

美術館では、美術作品の収集はもちろんのことであるが、作品研究や展覧会準備のためには、文献資料もまた、なくてはならないものである。しかし、かつては美術作品に比べて、作品関連の資料や研究文献を収集・整理する事は、長い間重要とされてこなかった¹⁾。また資料を専門に扱う担当者(司書)もいなかったというのが実状であろう。

近年は、美術情報を提供する場としての美術館の活動が目立ってきている。文献資料については、東京都美術館や横浜美術館の美術図書室、あるいは名古屋の愛知芸術文化センターのアート・ライブラリーのように、設立当初から一般公開の美術図書館として、芸術・美術に関する文献や情報を広く利用者に提供すべく体制が整えられたところはまだ少ない。しかし、『専門情報機関総覧 1994』(専門図書館協議会)や『ライブラリーデータ'93』(教育書籍)などのダイレクトリーによれば、利用やサービスの内容を限定した形で、外部の利用者を受け入れ始めた美術館、博物館の図書室も徐々に増えている。ほとんどのそうした美術図書館が分類に使っているのは、NDC(日本十進分類法)であるだろう。[東京都美術館の美術図書室は1976年の開館当初から独自分類を使用していたが、1995年に開館予定の東京都現代美術館に移管するにあたり、分類法は、美術については部分的に独自の分類番号を設けるが、基本的にはNDC新訂8版に準ずることが決まっている。]

NDCは日本の標準分類法である。その普及率は、公共図書館99%、大学図書館75%、短大・高専図書館99%(1981年 日本図書館協会)、専門図書館64%(1987年専門図書館協議会)であり、「少なくとも日本で刊行されたすべての図書を網羅する全国書誌を適正に分類することが、標準分類表の責務」²⁾と考えられている。日本図書館協会分類委員会は、現行のNDC第8版を改訂し、第9版の基本案のとりまとめを検討している。この改訂に際し、NDCの論理構造への批判や、実際の出版物の動向に即した項目の展開の在り方や新しい分類番号の新設を求める声等、NDCについてさまざまな議論がなされ、7類つまり芸術の部に関しても、改訂の試案や問題点の指摘がなされている³⁾。コンピュータによる書誌データベース時代を迎えて、ますます主題検索の標準ツールとして、その論理的構造性が重要視されている

NDCであるが、反面あまりに大規模な改訂は、その普及率の高さからしても、すでにNDCを導入している現場での混乱を起こしかねないという二律背反を負っている。従って、日本図書館協会分類委員会としては、論理構造の改善のために、現実で使用されている分類記号を大幅に訂正するような変更は極力回避する方針である⁴⁾。

所蔵資料の主題分野と分類法

自館の学芸員だけでなく、各層の一般的な利用者に奉仕することを主たる目的としている一般公開の美術図書館にとって、その蔵書の主題分野が自館の所蔵作品関連の資料に限らず広範囲にわたることはいうまでもない。そうした図書館が、標準分類法であるNDCを採用するのは不思議なことではない。従って、前述のようにこれからも美術の部門におけるNDCの問題点が討議され、改訂を重ねることにより、NDCが美術資料を分類するにあたって、より実用的な分類法となることを心から期待したい。

ところで専門図書館と呼ばれる、企業や研究所の中にある図書室や資料室では、それぞれの機関の目的に応じて、その蔵書の主題分野が限定されている。ブリヂストン美術館の図書室の例を上げれば、蔵書構築のありかたは、かなり片寄りがあるといえる。基本的には所蔵作品関連の資料が優先的に収集の対象となるので、印象派、後期印象派を中心とした19世紀～20世紀前半の西洋の近代美術と作家に関する文献が蔵書コレクションの基幹である。また展覧会カタログをはじめとして、「灰色文献」と呼ばれる、各美術館・博物館や美術大学などの関連機関が発行するさまざまな刊行物や、オークション・カタログなどの、流通ルートにのらず、一般にはその存在さえ知られていない文献が多く収集されている。つまり、こうした限定的な主題分野の資料と、発行部数が少なく、配布先が限定されている灰色文献(従って必ずしも全国書誌には載らない)を主に扱う図書館にとって、標準的な分類法は蔵書の性格を反映しているとはいえず、少なくとも自館に合わせた改変は必要となる。NDCが「総合分類表であり、多数の部門分類表を系統的に組織した統一的総合体」であり、「部門の配分は平均化されていてAとBに軽重がない」ため、「NDCの部門分類表を専門分類表として使うためには、何らかの改変がなされなければならない」⁵⁾のである。

ブリヂストン美術館がNDCを離れて、独自の分類法に切り替えることになったのは、標準分類法であるNDCがブリヂストン美術館の蔵書の個性のあり方にうまく適合しているとはいえず難しいということが、最大の理

由であるが、またここで求められている分類は、書誌分類ではなく、あくまでも書架分類であるということが大きい。

書架分類とは、資料そのものを書架上で主題分野別に分類して配架する(書架に並べる)方法である。資料の並べ方としては、この他に資料の形態別に配架する方法や、受入順に配架する方法がある。しかし、形態別や受入順で並べると、利用者はどこに必要な資料があるかを探すためには必ずカードや冊子体、あるいはコンピュータによる目録の検索によって、資料がある場所を確認しなければならない。例えばカード目録であれば、現物の資料の代わりに書誌情報を記入したカードが、著者名や書名や資料の内容の主題別などと体系的に並べられており、それらを検索することで、自分に必要な資料のありかを確認するという手順を踏む。

書誌分類とは、書架上の図書の配列とは関係なく、書誌を体系的に分類して配列するためのものである。必ずしも自館だけの蔵書を対象としているわけではなく、主題分析の深度を深め、主題の数に応じて項目を細分化し、分類を詳細に展開することで、主題書誌を構成するすべての主題文献に対応しようとするものである。それに対して、書架分類では、あくまでも自館の蔵書が対象となる。分類することによって、書架上に資料が体系的に並べられ、同一の、あるいは類似の主題が書架上に隣接することになるので、利用者は、自分が求める主題分野の資料が並ぶ書架で、直接資料を手にとって、必要なものを選ぶことができるのである。また、求める主題分野は決まっても、求める資料自体がはっきり決まっていない場合、browseする、つまりその主題分野の書架のところを歩きながら資料を拾い読みしていくことによって、求める資料自体を決めることができる。

ブリヂストン美術館では、目録を検索する事によって図書館員が資料の出納をおこなうのではなく、学芸員が直接書架に行き、求める資料を調べている。従って、配架されている資料は、その体系が分かりやすく、そして同一の、あるいは類似の主題がまとまって並べられている書架分類の方が便利であると考えた。NDCももちろん書架分類としての側面を持つものであるが、その体系のあり方や主題の設定のあり方が、ブリヂストン美術館での利用者のアプローチの仕方と一致しているとはいえないのである。以下にその具体的な問題点を述べたい。

ブリヂストン美術館における NDC 使用時の分類上の問題点

1. 外国の作家の伝記、研究評論及び作品集について (NDC 新訂 8 版の712, 723, 732, 740.2)

NDC においては、外国の作家の伝記や研究評論、作品集などは、まずそれぞれの作品の形式(絵画、彫刻、版画等)によって分けられ、その地理区分のもとに収められる。しかし、ブリヂストン美術館が所蔵している作品の作家は、シャガールやマティス、ピカソをはじめとして、絵画だけでなく版画や彫刻、さらには陶器さえも制作している作家が少なくない。例えば、ドガの彫刻の作品集を彫刻のもとに収めるのか、あるいはドガを画家であるとして洋画のフランスの項目に収めるのかは、注記がないのではっきりしない。もし、それぞれの作品の形式のもとに分けられるべきであるとするならば、では、例えば画家であり、また銅版画家、石版画家としてもすぐれていたシャガールの版画集が、シャガールの絵画集やその他の文献と切り離されることが良いことであると書架分類による配架においては考え難い。

しかも、NDC では7類(芸術・美術)のこの項目の場合、地理区分とは国籍である。作品が成立した地域やあるいは流派によって区分されるのであればともかく、国籍で区分することは、積極的な意味がないばかりか、時に困難を伴う。特に20世紀になると亡命した作家や、活躍の場が生地とは異なる作家がかなり現われるからである。また国籍は生地とも同一ではない。従って、どこの国籍をもっているかを調べなければならないが、その国籍と、利用者つまり学芸員が、ある作家について抱いている地域のイメージとは必ずしも一致しないので、図書を探す時には、いちいちその国籍を確認する必要がでてくる。

また、資料の並び方からいえば個々の作家に関する文献は、その国における作品のジャンルの美術史という、異なる主題内容の文献と書架上で混ざり合うことになってしまう。

2. 芸術史・美術史について (NDC 新訂 8 版の702)

NDC では、芸術史・美術史においてひとつの項目の中に、様式、時代、地理区分が混在しており、分類の際にそのいずれを優先させるべきかという順位が曖昧である。まず日本芸術史・美術史、東洋芸術史・美術史、西洋芸術史・美術史と、大きく3つの地域の様式に大別されているのだが、番号としてはその上に時代区分があり、そこに個々の時代の様式が列挙されている。しかもそれはロマネスクやルネサンス、バロックのように西洋芸術史・美術史の中の個々の様式である。番号が上であるの

で、時代区分が優先されていると見なさざるを得ないが、すると西洋美術の通史は個々の時代の様式の下にくるという論理的矛盾が起こっている。また西洋芸術史・美術史の下には各地域での様式が展開されているが、様式、時代、地域の中のどれを分類の際に優先させるべきかという明確な指示がないために、同じ様な資料がある時には時代で分類し、また別の時には地域の下に収めるということが起こりかねない。

また、NDCは標準分類法であるので、美術史においては19世紀と20世紀の美術は同じひとつの項目(702.06)になっている。また、洋画史(723)においても、近世(ルネサンスから印象主義まで、723.05)と20世紀(723.06)というふたつの項目しかない。ブリヂストン美術館の蔵書構成では、所蔵作品関連の資料が中心となるため、当然のことながら印象主義やポスト印象主義、バルビゾン派、ナビ派、フォーヴィスム、キュビズムといった主題の図書が非常に多い。従って19世紀、20世紀のところは様式や美術運動や画派といった特定の主題での項目を細分化する必要があった。

3. 材料・技法について(NDC新訂8版の711, 724, 731, 742, 743, 744, 752.3, 756.1)

NDCでは、材料・技法は彫刻や絵画など、それぞれの作品の形式の下に分けられている。また、修復や保存に関しては、彫刻と絵画は材料・技法の下にあるが、版画や工芸にはその項目も無い。

美術館では、作品制作のための技法研究としてではなく、むしろ美術作品の修復や保存のために材料・技法に関する文献を必要とするのではないだろうか。修復・保存の専門書は、日本ではまだ余り多く出版されていないが、ブリヂストン美術館では海外で出版された文献を購入している。その様な専門書では、いろいろな作品の形式や材料にまたがっての修復・保存技術が述べられていることが多い。従って、それぞれの作品の形式の下ではなく、上位概念として修復・保存の項目が必要となる。また、最近ではX線や赤外線などを使っている古文化財や美術作品の科学的調査も始まっている。そうした資料は美術館や博物館ではこれから増えていくのではないだろうか。

4. その他

ブリヂストン美術館の所蔵作品は、林忠正コレクション、松方コレクション、福島コレクション、Hansenコレクションなどの蒐集家のコレクションを背景としている。作品の来歴などを調査・研究する時には、こうしたコレクションやコレクターに関する資料を調べることに

なる。また、蒐集家が集めた美術作品のコレクションは、必ずしも現在どこかの美術館や博物館に所蔵されているとは限らない。林忠正のコレクションのように、すでに散逸してしまったコレクションもある。NDCには美術商や画商という項目はあるが、コレクター、パトロン、コレクションについての項目がない。これはブリヂストン美術館にとっては新設したい項目であった。

NDCにおいては、絵画材料・技法の項目で、題材別画法の分類が詳細に展開されている(724)。しかし、イコノロジーやイコノグラフィーといった主題を入れる項目がない。ブリヂストン美術館にとっては、作品のテーマやモチーフは、絵画材料・技法としてではなく、むしろ作品研究の項目として必要である。尚、NDCは基本的にはデュイ十進分類法(DDC)にならって構成されているが、そのDDCには、704.9にイコノグラフィーという項目が設けられており、作品の主題別に細分化されている⁶⁾。

NDCには、9類(文学)においては英米文学に文学者という項目がある(930.2)のだが、7類では美術評論家や美術研究者についての項目がない。

DDCでは建築は芸術の部門に収められているが、NDCにおいては、建築は建設工学とともに、5類(技術)の項目の下に位置づけられている(520)。ブリヂストン美術館としては建築は芸術の部門に収めたい。

簡単ではあるが、以上がブリヂストン美術館においてNDCを使用する場合の分類上の問題点である。それでは、以下にブリヂストン美術館の分類法の各項目について説明したい。

ブリヂストン美術館分類法

総記について

- 書誌や年表、名簿などは原則として、その出版形式によって03の各項目に分類するが、事典や辞典の中で、特定の主題を扱っているものについては、その主題のところに収め、ラベルにR(参考図書)のマークを入れる。
- 逐次刊行物のうち、年鑑は05とする。雑誌は、タイトルごとに、雑誌リストによる管理とする。
- 美術館、博物館、美術団体、学会等の団体が発行する刊行物は06に収め、図書記号部分は著者記号ではなく、美術館、博物館(M・G・D)コード、大学(U)コード、美術団体(A)コード、学会やその他の団体(S)コードを用いる。ただし館報、年報、紀要類は雑誌と同じ扱いとする。

- 所蔵品目録は06.8に収める。
- ある特定の美術館や博物館が所蔵する作品のみを集めた展覧会のカタログは、その所蔵館の所蔵品目録として、06.8に収める。
- コレクション展の展覧会カタログは、そのコレクションを所蔵している美術館・博物館のところに所蔵品目録として収める。ただし、美術館や博物館の所蔵でないものは、62のコレクションのところに収める。
- 展覧会カタログは、06.9に収める。ただし、特定の作家の展覧会のものは作家の下に、また展覧会の主題がはっきり特定されているものについては、図書としてそれぞれの主題の下に収める。
- 美術全集のうち、各作家で個別になるものは、単一の図書として処理し、それぞれの作家研究の下に収める。

芸術. 美術一般

- NDC では701(芸術理論、美学)と704(論文・講演集、美術評論、雑著)に分かれていたものを、ひとつにまとめる。
- 美術研究者、美術評論家の項目を新設し、その著作全集と美術研究者や美術評論家に関する伝記や研究評論はここに収める。ただし作家に関する評論や、作家の書いた随筆などは、それぞれの作家研究の下に収める。
- 美術以外の音楽や演劇等もここに収める。

美術史

- 世界美術史のように、特定の時代、地域に限定されないものは20に収める。西洋の各地域の通史、時代をこえたもの、諸時代にまたがるものも20に収め、地理区分表による記号を後に続けて地理区分する。
- 西洋美術の各時代で特定されているものは21～26までに収める。
- 西洋と日本以外の地域の美術史については、28に収め地理区分するが、時代では区分しない。
- 日本美術史は29に収める。
- 西洋美術史の19世紀と20世紀においては、彫刻や版画といった作品の形式よりも、様式や美術運動、画派などの特定の主題が優先し、例えば未来派の絵画と版画は同じ26.05に収める。

作家

- 作家は地理区分しない。またそれぞれの作品の形式でも分けない。
- 一冊の図書の中に作家が複数ある場合は、5名までであれば、1.ブリヂストン美術館の所蔵作品の作家 2.書名に最初に出てくる作家 3.書名に作家名が出

ない場合は主に主題となっている作家の順で作家を決定し、その作家の下に収める。また、1の作家が複数の場合は2、3の順で作家を決定する。その他の作家は、件名に作家名を出し、検索の時にアクセスできるようにする。

- 一冊の図書の中で作家が6名以上の場合は30の項目に収める。
- 資料の種類としては、図書、展覧会カタログ、その作家の単独のものであれば所蔵品目録も作家の下に収める。美術全集は作家による分割が可能であれば、分割して単行単位でそれぞれの作家の下に収める。
- 図書記号部分は著者ではなく、作家名とする。同じ作家記号が2つ以上になった時には、主な作家1名を残し、2番目の作家からは作家記号のすぐ後にファーストネームのローマ字の頭文字を付していくことによって個別化させる。
- 補助記号は以下のようにする。
 - 図書は受入順番号を入れる。
 - 展覧会カタログ、所蔵品目録は、カタログの発行年を入れる。

作品の主題. モティーフ

- イコノロジーやイコノグラフィーに関するものは40に収める。
 - 複数の主題を扱っているものは40に収める。
- [この項目の細分化については DDC 第20版の Iconography のうち 704.9-704.949と753-758を参考にした。]

材料. 技術. 修復. 保存

- NDC では、材料・技法は彫刻や版画などのそれぞれの作品の形式の下に分けられているが、ブリヂストン美術館の分類法ではこれらを分けず、一つの項目とする。
- それぞれの作品の形式や素材にまたがる技法・材料、及び特殊な技法・材料については、すべて50に収める。
- 修復や保存に関するものは50に収める。また美術作品の梱包や輸送に関するものもここに収める。
- 古文化財や美術作品のX線や赤外線を使つての科学的調査は50に収める。
- 特定の作家の作品における技法や科学的調査については、それぞれの作家の下に収める。

美術市場. 展覧会. サロン

- 美術市場やオークション、価格に関するものは60に収める。また展覧会史やサロンに関するものも60に収めるが、この場合のサロンは展覧会を指す。個人のサロ

- ンやパトロン、コレクターについては62に収める。
- 万国博覧会に関する資料はすべて61に収める。
 - コレクター、美術商、パトロンの評伝は62に収める。また彼らが収集したコレクションについてもここに収める。
 - ただし、そのコレクションが美術館、博物館の所蔵品であり、美術館や博物館としての所蔵品目録となっている場合はそれぞれの美術館、博物館の所蔵品目録として06.8に収める。
 - ブリヂストン美術館の所蔵作品に関係する松方、福島、林、Hansen のコレクションとその関連の資料はすべて63に収める。展覧会のカタログや人物の評伝もこれに含まれる。

美術と他の主題との関係

- 美術と他の主題とを扱ったものはここに収める。
- 細分化はしない。必要がでてくれば検討する。

美術以外の主題

- 美術以外の主題はここに収める。
- 書誌、年表、語学辞典などは、原則として出版形式によって03に収めるが、語学以外の辞典、事典については特定の主題を扱っているものは、それぞれの主題の下に収める。

地理区分表

- 地理区分そのものはあくまでも補助的に使用されるものである。
- 西洋の地域の地理区分の順序はブリヂストン美術館の蔵書コレクションの構成上、使用頻度の高い地理順とした。

終わりに

この分類法は、あくまでもブリヂストン美術館の蔵書構成に合わせて作成したものである。従って、同じ美術館の図書室であっても、蔵書コレクションの性格が似ていなければ、この分類法を適用できるとは考えていない。これはあくまでも独自分類法であることを強調したい。

コンピュータの普及により、書誌情報の検索は、カードからデータベースの時代へと変化してきた。現在大学図書館や公共図書館ではOPAC⁷⁾により、利用者が図書館員の手を経ることなく、直接端末を使って目録の検索をするようになった。OPACによる検索では、カード目録による検索と比べて、アクセスポイントが増え、また複数のアクセスポイントから複合的な検索ができるよう

になった。こうした時代では、個人的には分類は、自館の蔵書だけを考えた場合、主題検索のためというより、資料をどのようにまとめて配架するかという書架分類としての機能を優先させて良いのではないかと考えている。

しかし、汎用性や、将来の書誌情報の共有化において、書誌分類法としてのNDCの役割ということを見ると、NDCから完全に離れてしまうことには多少不安があった。そこで、分類番号は独自のものを使用するが、書誌データのひとつとして、NDCの分類番号も必ず付けることにした。ある意味では二重の手間ではあるが、最初のところで述べたように、ブリヂストン美術館で求められているのが書架分類であるため、利用者にとっての利便性を考えた結果である。

最後に、この分類法を作成するにあたっては、ミュンヘンの中央美術史研究所の分類法を基にしたといわれる、国立西洋美術館の分類法を参考にさせていただいた。

また図書館情報大学の黒岩高明先生から、細部にわたるまでいろいろご教示いただき、国立西洋美術館の波多野宏之氏、美術ドキュメンタリストの中島理壽氏、東京国立近代美術館の水谷長志氏、国立国会図書館図書研究所の柳与志夫氏からも、貴重なご助言をいただいた。美術研究者の千速敏男氏からは、資料としてミュンヘンの中央美術史研究所の分類記号一覧と、千速氏による日本語訳をいただいた。皆様に心からお礼申し上げます。

(なかむらせつこ ブリヂストン美術館)

註

- 1) 高階秀爾, 平山郁夫「特別対談 世界に向けた美術情報の発信基地を一急務となった本格的美術情報センターの設立」『新美術新聞』No.591(1991.1.1・11)
- 2) 石山洋「日本十進分類法第9版への発進—JLA分類委員会の改訂方針」『図書館雑誌』vol.80, no.5, p.282-283(1986.5)
- 3) NDC第9版に向けての改訂方針や各類ごとの試案, その問題点の指摘等は『図書館雑誌』や『図書館界』を中心として多くの文献が発表されているが, ここでは誌面の都合上, 芸術の部に関するもののみ紹介させて戴きたい。
JLA分類委員会「日本十進分類法第9版試案の概要—その3『芸術』の部」『図書館雑誌』vol.83, no.10, p.659-662(1989.10)
三浦整「NDC9版を考える(2)—7類(芸術)の問題点」『図書館界』vol.44, no.5, p.230-235(1993.1)
また, アート・ドキュメンテーション研究会の整理ワーキンググループは, NDCの改訂案および現行8版での美術分野における問題点の検討を開始し, その中間発表として東京国立博物館資料部の住広昭子氏により「美術分野におけるNDC(日本十進分類法)の問題点」がアート・ドキュメンテーション研究会の第14回研究会において発表された。その研究会の内容については, 後藤純子「第14回研究会 報告」『アート・ドキュメンテーション通信』no.18, p.19-20(1993.7.25)を参照されたい。
- 4) 石山洋「“NDC9”検討会の概要」『図書館雑誌』vol.86, no.11, p.809-810(1992.11)
- 5) もり・きよし編『NDCのつかい方』(図書館の仕事9) 日本図書館協会 1966
- 6) Dewey, Melvil, *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. Ed. by John P. Comaromi et al. 20th ed. Albany, New York: Forest Press, 1989.
DDCでは704.9以外にも, 作品の形式ごとに Iconography という項目が設けられている。例えば 731.8(Plastic arts; Sculpture), 743.9(Drawing and decorative arts), 753-758(Painting and paintings), 769.4(Graphic art; Printmaking and prints)の様に。
- 7) Online Public Access Catalog 利用者自身がコンピュータでデータベース化された目録を検索できる書誌・目録検索システム。

ブリヂストン美術館図書資料分類表

00 総記

.7 情報科学

01 図書館

02 図書, 出版

.9 印刷

03 書誌, 辞典, 便覧, 名簿など

.1 書誌

.2 年表

.3 辞書

.4 用語

.5 名簿[ダイレクトリ] *人名録を含む

.6 便覧

.8 地図

05 年鑑

06 美術館, 博物館, 美術団体, 学会等団体 *保存, 修復関連→50

.1 博物館行財政・法令

.2 博物館建築・設備

.3 博物館職員

.4 資料の収集, 整理

.6 資料の展示, 利用, 宣伝

.8 所蔵品目録

.9 展覧会カタログ

07 研究, 指導法, 芸術教育

.8 美術館教育

.9 美術鑑賞法, 美術批評法

08 美術全集

09 芸術政策, 文化財

10 芸術, 美術一般

.4 随筆, 雑著

.8 論文・講演集, シンポジウム

11 芸術理論, 美学, 評論

13 芸術社会学

14 芸術心理学

16 美術研究者, 美術評論家

-
- .05 ポスト印象主義, 新印象主義, 綜合主義, ポン=タヴェン派
 - .07 世紀末, 象徴主義, アール・ヌーヴォー, ナビ派, ベル・エポック
 - .09 その他
 - .1 19世紀の彫刻
 - .2 〃 絵画. 素描
 - .3 〃 版画. ポスター
 - .4 〃 写真
 - .5 〃 工芸
 - .6 〃 建築

26 西洋の20世紀

- .01 フォーヴィスム
- .02 キュビスム
- .03 ナイーフ
- .04 表現主義
- .05 未来派, ダダ, シュルレアリスム
- .07 エコール・ド・パリ
- .08 抽象表現主義, コブラ, アンフォルメル
- .09 その他
- .1 20世紀の彫刻
- .2 〃 絵画. 素描
- .3 〃 版画. ポスター
- .4 〃 写真
- .5 〃 工芸
- .6 〃 建築

28 西洋, 日本以外の美術史

- .1 西洋, 日本以外の彫刻
- .2 〃 絵画. 素描
- .3 〃 版画. ポスター
- .4 〃 写真
- .5 〃 工芸
- .6 〃 建築

29 日本美術史

- .01 原始時代
- .02 古代
- .03 中世
- .05 近世: 江戸時代
- .06 近・現代: 明治, 大正, 昭和, 平成
- .08 古社寺 *ここには, 個々の古社寺を中心とした芸術, 美術を収める
- .09 日本各地 *日本地理区分はしない
- .1 日本の彫刻
- .2 日本の絵画, 素描
- .21 日本画
- .23 日本の洋画

-
- .3 版画. ポスター
 - .4 写真
 - .5 工芸
 - .6 建築

30 作家

31 外国の作家

- *ここには、個人の伝記、研究評論、作品集、カタログレゾネ、著作、個人の作品を集めた展覧会カタログ、所蔵・出陳目録を収める
- *詳しくは、分類適用細目を参照

32 日本の作家

- *ここには、個人の伝記、研究評論、作品集、カタログレゾネ、著作、個人の作品を集めた展覧会カタログ、所蔵・出陳目録を収める
- *詳しくは、分類適用細目を参照

40 作品の主題. モティーフ: イコノグラフィー. イコノロジー

41 神話. 伝説. アレゴリー. シンボリズム. 幻想

42 宗教芸術. 宗教美術

- .1 キリスト教芸術
- .2 仏教芸術

43 人物: 肖像, 女性, ヌード, 身体の一部, 特定のモデル

44 ジャンルペインティング. 風俗画

45 動・植物

46 静物

47 歴史. 戦争 *神話. 伝説の中の戦争→41

48 地理. 風景. 海景. 建物

49 その他の主題

50 材料. 技術. 修復. 保存

51 彫刻

52 絵画. 素描

53 版画. ポスター

54 写真

55 工芸

56 建築

58 贋造. 鑑定. 模写. 複製

59 額縁. 表装

60 美術市場. 展覧会. サロン *展覧会カタログ→06.9

61 万国博覧会

62 コレクター. 美術商. パトロン

63 特殊コレクション

- *ここには松方コレクション、福島コレクション、林コレクション、Hansen Collection 等ブリヂストン美術館に関連のコレクションを収める

80 美術と他の主題との関係

90 美術以外の主題

91 哲学, 宗教

92 歴史, 地理

.1 日本の歴史, 地理

93 社会科学

94 自然科学, 医学

95 技術, 工学, 工業

96 産業

98 言語

99 文学

地理区分表

A 西洋

B フランス

C イギリス

D ドイツ

E オーストリア

F スイス

G イタリア

H スペイン, ポルトガル

J オランダ, ベルギー

K ロシア, 旧ソヴィエト連邦諸国

M 北欧

N 東欧, バルカン

R アフリカ

S 北アメリカ

T 南アメリカ

U オセアニア, 南太平洋諸島

V 中東, アラブ諸国

W アジア

Y 日本

石橋美術館所蔵新聞切り抜き帳について 附：坂本繁二郎関連記事目次(1957年－1969年)

後藤純子(G)
植野健造(U)

1 日本近代美術史研究と新聞記事

日本近代美術史研究において、近年、調査の対象としての新聞記事の重要性にたいする認識が深まりつつある。美術史研究における新聞記事調査の現状、必要性、問題点などについては、東京国立近代美術館による報告書『近代日本の諸新聞における美術関係記事の調査研究－第一期：大正期を中心に』¹⁾の指摘するところである。すなわち、新聞記事は美術雑誌等の記事と比較して、即時性においてまさり、情報量において多大であり、多くの新知見がそこに含まれていることが予想されながらも、網羅的な調査の対象とするには困難もあり、個別的、断片的に活用されているにすぎないというのが現状であろう。一方、地方²⁾の美術館の研究者によって、それぞれの地域の地方新聞の記事を資料として活用することにより、地方独自の近代美術史の記述への可能性も模索されつつある³⁾。新聞記事を資料としてあつかう際の問題点など検討されなければならない点もあるが、日本近代美術史研究において、今後ますます新聞記事調査の必要性は増してゆくものと思われる。

ところで、昭和31年(1956)に開館した石橋美術館では、昭和32年以降、歴代の館職員によって新聞の美術関連記事の切り抜き整理の作業が継続されてきた。この作業を継続して40年近くとなる現在、切り抜き帳もすでに相当な量に達した。しかし、資料が増大化してゆくにしがたい、必要とする記事を検索する場合などの活用面での不便も増しつつある。おそらく、他の多くの美術館、博物館などでも同様の問題が生じつつあると思われるが、これまでのところ、そうした問題の解決や異なる施設館相互の資料の活用法などについての議論をあまり聞かない。また、コンピュータを使用した新聞記事のデータベース化やパソコン通信などを利用した記事検索などの技術も発達しつつある現在、この方面の技術の進展を視野に入れておく必要がある。

ともあれ、石橋美術館ではさしあたり新聞記事の切り抜き整理作業を継続してゆくつもりであり、したがって、その活用方法についてもさまざまなかたちで検討してゆきたいと考えている。

本稿は、以上のような状況をふまえ、石橋美術館における新聞記事の切り抜き整理作業の方法、資料の蓄積状

況、資料活用の際の問題点等に関する報告を試みるものである。あわせて、資料の活用という観点からの一つの試みとして、石橋美術館の新聞切り抜き帳から採取した坂本繁二郎に関する記事の目次(1957年－1969年)を作成した。今後もさらに蓄積された新聞記事の活用について検討してゆきたい。ささやかな試みではあるが、多方面よりのご教示を期待するものである。(U)

2 石橋美術館における新聞記事の収集状況と整理法

石橋美術館では、平成6年現在、『朝日新聞(西部本社版)』、『毎日新聞(西部本社版)』、『読売新聞(西部本社版)』、『西日本新聞』、『日本経済新聞』の5紙の朝・夕刊を購読している。切り抜き帳作成開始の昭和32年(1957)から現在までの切り抜き記事に記された紙名や日付からみると、当初は『朝日新聞』、『毎日新聞』、『西日本新聞』、『フクニチ新聞』の4紙が購読されており、昭和40年1月から『読売新聞』、昭和59年4月から『日本経済新聞』が加わり、平成4年4月以降『フクニチ新聞』が休刊となり、現在に至っている。作業開始以来、新聞記事の切り抜き整理作業は中断されることなく、現在は平成4年度分まで製本され計221冊の新聞切り抜き帳を所蔵している。

新聞記事の整理の方法としては、切り抜き作業を開始した職員によって細かな新聞記事の分類が行われており、基本的には現在にいたるまでこの分類に従って記事が収集され、記事の分類、切り抜き帳への貼り込みが行われてきた。分類は下記のとおり大きく9つに分けられる。

A. ニュース

美術に関するニュースで次のB～Iのいずれにも該当しない記事。

(例：美術品の盗難、発見、オークションなど。)

B. 展覧会

展覧会に関する記事。

(例：展覧会の情報、告示、特集記事など。)

C. 芸術家の動静

芸術家の近況、消息を知らせる記事。

(例：死亡、受賞記事など。芸術家による随筆や談話などはここに収める。)

D. 批評・評論

美術・芸術に関する批評や評論。

(例：展覧会評、研究・調査などの発表文、コラムなど。美術・芸術に関する細かな記事やシリーズ物はここに収める。)

E. 刊行物

美術・芸術関係の出版物などに関する記事。
(例：新刊案内、書評など)

F. 児童

児童に関する美術記事。
(例：子どもの絵や書道の展覧会の記事、受賞など。)

G. 工陶芸・文化財

工芸・民芸や文化財に関する記事。
(例：文化財の新指定など。)

H. 考古学

考古学に関する記事。
(例：古墳の発掘など。)

I. 石橋美術館

石橋美術館に関する記事。
(例：石橋美術館開催の展覧会記事など。)

以上のように石橋美術館では、美術に関する記事の他、広く文化財や考古学に関する記事も収集している。

具体的な作業の内容は、1ヶ月に一度、購読している全ての新聞を各新聞の朝・夕刊ごとにまとめ(連載記事などの採取漏れがないようにするため)、美術や文化財・考古学などに関する記事を採用していく。採用する際に、切り抜きした記事に新聞紙名(各新聞紙名の頭文字)、日付、分類アルファベットを付け、他に夕刊や筑後版・福岡県内版などの地方版の記述が必要なものにはこれも付ける。こうして切り抜いた記事を分類ごとにまとめ、同じ分類の記事は原則として日付順にスクラップブックに貼り込み(ただし連載ものや関連記事はなるべく同じところへ貼る)、各分類の初めの頁に分類のインデックスシールを付けてひとまず作業をおく。そして、次年度に前年度分を1ヶ月ごとに12分冊に製本して作業は終わる。当初は1年間の記事を分類によって数冊にわけて製本していたが、記事の増加により分冊数が増えたので月ごとの製本に変更した。一連の作業がそれなりの時間と資料保管の空間を必要とするとは言うまでもない。(G)

3 新聞切り抜き帳活用とその問題点

今までに多くの時間と手間をかけて蓄積されてきた新聞の切り抜き帳を、何とか有効に活用することはできないか、またどのような利用方法が望ましいかを検討するなかで、今回、坂本繁二郎に関する記事を切り抜き帳からあらためて採取し、簡単なデータベースを作成することを試みた。この作業を通じて、これまでの新聞切り抜き帳の整理作業についての不備な点や、記事検索についての方法、外部機関の新聞記事データの活用などいくつ

かの問題点と検討事項がうかびあがってきた。

まず、これまでの新聞切り抜き帳の整理作業の問題点について述べる。切り抜き記事に付す記述のなかで、昭和56年8月までは朝・夕刊、地方版の記述がない。このため、今回の坂本繁二郎関連記事目次作成の作業においては朝・夕刊の別や地方版掲載の記事であることを示すデータをもりこむことができなかった。基本的なことであるが、新聞から必要な記事を切り取る際にはその記事の掲載紙名、日付、朝・夕刊や地方版の区別、できれば記事掲載頁(面)などの切り抜き記事に付随する情報をも正確に採取すること、くわえてそれらの情報を分かりやすく正確に記述することが大切である⁴⁾。また切り抜き帳は長年蓄積され、それを整理した人以外の人が後に利用したり作業を継続してゆくことが考えられるので記事分類のマニュアルや切り抜き記事に付す記述に関する項目を明文化しておく必要もあろう。さらに、新聞の紙質は劣化しやすいものなので貼り込みの仕方や保存状態にも十分に気をつける必要がある。

記事の検索についてみると、現状のままでは、必要とする記事についてのおよその掲載年月日と石橋美術館で定めた記事の分類法を知っていなければ、記事を探し出すことは難しい。また、同じ分類基準でも整理担当者によってその記事を採用するかどうかの判断や採取した記事をどの分類に収めるかなどに個人差があり、分類も有効な検索手段とはいえない面がある。そこで記事の一つ一つに内容を表すいくつかの語を付与しデータベース化して、キーワードによる検索で記事を探す方法が考えられるが、これまで蓄積したすべての記事に索引作業をあらためて行うことは困難である。今回試みに坂本繁二郎の関連記事に限って簡単な目次を作成する際にも検索のことを考えて、作家名・作品名・展覧会名やその他記事中に記載されている人名やいくつかの単語をキーワードとして付与してみたが、記事の内容をいくつかの単語で表すことは困難な作業であった。さらに付与した語で精度の高い、より専門的な検索が行えるように検索語を管理・統制していくためには新聞記事に関する用語だけでなく美術分野の専門用語についても十分な知識が要求され、今のところ日本における標準的な美術分野のシソーラスなどのツールも見あたらないので、今後の課題として検討を続けてゆきたいと考えている⁵⁾。

次に、新聞記事情報に関する参考図書などとの併用による新聞記事切り抜き帳の活用について述べる。新聞記事索引、ニュース事典、年鑑類などの2次資料を検索の手段として活用し掲載された日付や記事内容などを確認したうえで、切り抜き帳を1次資料として活用することも考えられる。ただし、全国紙の縮刷版の索引や記事総

覧などは収録対象紙が東京本社最終版であり、石橋美術館で収集する記事とは掲載される紙面が違う場合もあることや地方版に掲載された記事は索引の対象とはなっていないことなどを考慮しておく必要がある。今回の坂本繁二郎のように地方に在住した画家の場合、細かな記事の多くが地方版の紙面に掲載されており、このような場合には坂本の居住地に近い石橋美術館の新聞記事切り抜き帳の価値は大きい。

また最近ではコンピュータによる新聞の編集・制作が行われるようになり、新聞紙面データを機械処理して記事データベースを作成し、パソコン通信などの回線を通して新聞記事の検索・情報提供サービスが行われ広く利用されている。代表的な日経テレコンにおいては『日本経済新聞』のみならず『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』の全国紙をはじめ、『西日本新聞』、『静岡新聞』などのブロック紙、地方紙、業界専門紙からも記事を検索することができ、1紙ごとまたは複数の新聞を一括して検索することもできる。実際に“アオキシゲル”（青木繁）のキーワードで朝日新聞を平成5年7月～平成6年5月の期間で検索してみたところ、瞬時に22件の検索結果が出され（うち9件はノイズ）、地方版の記事もフルテキストで得ることができた。また最近では記事を「切り抜き」型のイメージ情報として蓄積し、必要な記事をファクシミリ送信するサービスも始められた⁶⁾とのことで、これらのオンラインデータベースを利用すれば新聞の切り抜き作業そのものが不要とも思われる便利さがある。しかし、現時点では収録期間が昭和60年(1985)以降と比較的新しい時期の新聞しか検索できない、通常は数値・文字情報のみで写真や図表などはあるか否かしか表示されない、基本料金と接続時間による従量制で料金が加算されるので何度もいろんな角度から検索するには費用がかかりすぎるなどの問題もある。経済や科学技術分野などで最新の情報の収集、事実確認のためにこれらのオンラインデータベースが利用される場合と文学や美術など人文系分野において当時の詳細な状況を知るための資料として過去に遡って丹念に関連の新聞記事を集め、さまざまな角度からそれらを見直したり時間的経過をたどってゆくといった利用をする場合には、新聞記事の利用の仕方において根本的に違いがあるといえよう。

切り抜き帳が即時性や検索などに関しては不備が多いとしても、美術に関する新聞記事そのものが記載されたかたちのままにいつも身近にあり簡単に閲覧することができるという点に、新聞切り抜き帳の大きな利点があると思われる。近い将来に新聞の切り抜き作業は不要になる状況も出現するであろうが⁷⁾、以上のような理由でとりあえず今後もしばらくは切り抜き作業は継続すること

が妥当であると考えられる。また、蓄積された新聞切り抜き帳の活用の試みとして石橋美術館所蔵作品の主要作家である青木繁、坂本繁二郎、古賀春江に関する新聞記事目次の作成を継続してゆくことを計画している。データの記述についてや検索語の統制・管理など、情報学関係者をはじめ広く美術に関する専門家の方々にご教示をお願いしたい。(G)

4 坂本繁二郎関連記事目次(1957年～1969年)

坂本繁二郎(1882～1969)は、石橋美術館の所蔵作品の一つの柱をなす画家である。坂本は大正13年(1924)にフランスより帰国後、郷里の久留米に帰り、昭和6年(1931)には久留米に近い八女に移り住み、以後昭和44年(1969)に没するまでの生涯を同地で過ごした。このような坂本の晩年の消息や動向を詳細にたどろうとすると、石橋美術館の新聞切り抜き帳は貴重である。ただし、石橋美術館の新聞切り抜き帳は昭和32年(1957)に始まっているので、切り抜き帳によって坂本の情報や動向をたどるのは、坂本の75歳から没年の87歳までのわずか13年間に過ぎない。しかし、坂本に関する記事が新聞紙面にたびたび登場するようになるのは、昭和31年の文化勲章受章以後のこととみられ、まさに晩年の13年間こそは坂本について新聞記事がもっとも多くの情報を提供してくれた時期ともいえる。

以上のようなことから、坂本繁二郎に関する昭和32年(1957)から昭和44年(1969)までの新聞記事の目次を作成することを試みた。目次を作成するにあたり、記事を年月日順に並べることによって、いくらかは簡単な年譜たりうるように意図した。

目次の作成作業をひとまず終えて注意された点をいくつか述べてみる。

福岡県久留米市とその周辺は、筑後画壇と称される独特の芸術風土をもつといわれる。そうした芸術風土の形成にはさまざまな要因が考えられるが、坂本が存在が果たした役割が大きかったことがあらためて実感された。坂本はたびたび言われるように、直接の弟子をとり手とり足とりで指導する画家ではなかった。しかし、新聞記事をひろってゆくと、昭和12年に近隣に住む画家らの懇請によって始められた「新人会」をはじめとして、「青稲会」や「核」といった筑後地区の当時の新進、中堅の画家たちのグループを批評会というかたちで根気強く指導し、それらの画家たちのグループ展や個展には老齢にもかかわらず姿をみせていた状況が鮮明にうかがわってきた。当時の筑後の画家たちにとって坂本に批評を受

け、展覧会に坂本が姿をみせてくれることが何よりの励みであったに違いない。また、柳川市での坂本の指導、審査による児童画の講習会は坂本門下の画家の協力もあり坂本の没年まで20年間にもわたり続けられた。坂本が八女に定住して以後没するまでのほぼ40年間に、筑後の画壇はまさに坂本を頂点としてしかも裾野がまれにみるほど広い芸術風土を形成していった感があり、新聞記事はこのことを見事に語っているように思われた。

また新聞記事には、《牛》(1920年、石橋美術館蔵)の制作に関する坂本の回想や、《放牧三馬》(1932年、石橋美術館蔵)の坂本自身による修復の記事など、作品に関する貴重な情報も少なくない。しかし、新聞記事の面目躍如たる点は、坂本の日常生活や消息をこと細かに伝えてくれる点にあらう。いく度も眼病と闘い、家族を思いやり、筑後の櫛の木を愛し、青木繁や北原白秋といった同郷の芸術家の顕彰に力を尽くし、選挙はかかさず投票し、しかし生活の中心にはつねに絵画制作のことがあった。そのような人間坂本の姿を新聞記事はさまざまな角度から伝えてくれる。そして、そのような些細な記事の集積によって描き出された人間坂本像は画家坂本像を理解するうえで決して軽視できないと考えられるのである。

ここに試みた坂本繁二郎に関する新聞記事の整理を通じてえられた情報を、坂本の作家研究や作品研究にいくらかなりとも反映することが今後の課題である。(U)

(ごとうじゅんこ うえのけんぞう 石橋美術館)

註

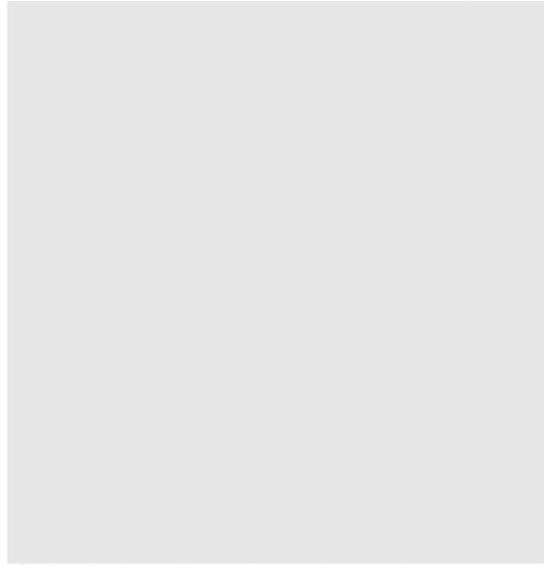
- 1) 『近代日本の諸新聞における美術関係記事の調査研究—第1期：大正期を中心に(平成4年度科学研究費補助金研究成果報告書)』、東京国立近代美術館(研究代表者：本江邦夫)、平成5年3月
- 2) ここでいう「地方」とは基本的には日本国内の一部分の地域を意味するが、東京ではない一地域をさして用いている場合もある。
- 3) 西村勇晴編「資料による宮城県美術編年史(-)」『宮城県美術館研究紀要』2号、昭和62年3月
西村勇晴編「宮城県美術年表 1945～1970」『宮城県美術館研究紀要』6号、平成3年3月
古家良一「九州日日新聞・美術関係記事抜粋 自明治30年6月1日至明治35年6月30日」『熊本県立美術館研究紀要』5号、平成4年3月
古家良一「九州日日新聞・美術関係記事抜粋 自明治35年7月1日至明治37年4月30日」『熊本県立美術館研究紀要』6号、平成5年3月

北畠健「『いはらき』新聞における美術に関する記事等総目次 その一 創刊～明治41年12月」『茨城県近代美術館研究紀要』1号、平成3年3月

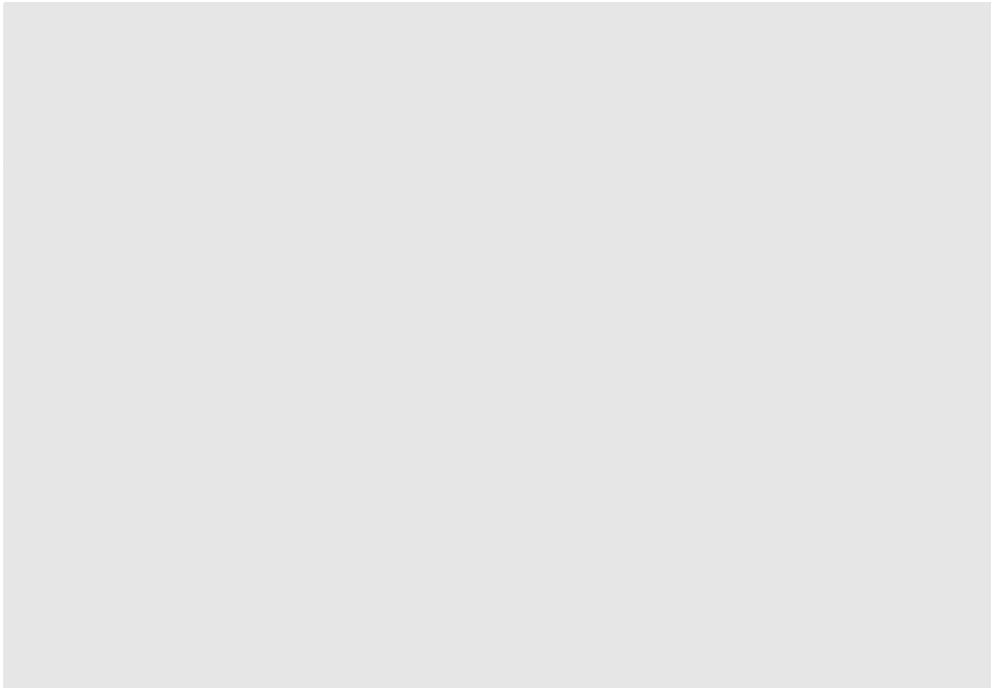
北畠健「『いはらき』新聞における美術に関する記事等総目次 その二 明治42年1月～大正元年12月」『茨城県近代美術館研究紀要』2号、平成5年3月

村山鎮雄『福島の近代美術』、平成4年5月、三好企画

- 4) 佐野眞『自分だけのデータ・ファイル—新聞情報の整理法—』(平成5年、日本エディタースクール出版部)では、新聞は印刷ぎりぎりの時間まで最新の情報を載せるために版を重ねるため、掲載紙の記述には新聞紙名・朝夕刊の別・日付・面のほかに、厳密に言えばこの版についても記述する必要があるとしている。本書は個人的に新聞切り抜き帳を作成しそれを活用していく方法を述べたものであるが、新聞そのものや外部データ、新聞資料所蔵機関などの情報にも言及している。
- 5) 石井昌之「日本経済新聞記事データベースの品質管理」『情報の科学と技術』44巻4号、平成6年4月。また新聞記事の索引作成について関西女学院短期大学の平井歩実先生より多くの助言と索引作業に関する参考資料をいただいた。ここに記して感謝いたします。
- 6) 神尾達夫「日経ニュース・テレコン」『情報の科学と技術』40巻10号、平成2年10月
- 7) 最近の某電機会社のテレビコマーシャルにあるように、大量の新聞を画像データとして光ディスクに記録し、記事を検索語によって検索し必要な記事のハードコピーも画像としていつでも自由に採れるという技術はもうすでに開発されている。古い時期の新聞記事に対する索引付与の遑及作業が進むこととコストの問題が解決されれば新聞切り抜き帳も不要となるだろう。



新聞切り抜き帳 1961年-3, 『フクニチ新聞』1961年1月19日



新聞切り抜き帳 1966年-2, (左)『西日本新聞』1966年2月15日, (右)『朝日新聞』1966年2月26日

坂本繁二郎関連記事目次(1957年-1969年)

凡例

- 1) 本目次は、昭和32年から石橋美術館において作成し所蔵している新聞切り抜き帳の中から坂本繁二郎に関する記事を採用し、昭和32年1月から昭和44年12月までの期間に限って一覧表としたものである。
- 2) 収録紙は当初『朝日新聞』、『毎日新聞』、『西日本新聞』、『フクニチ新聞』の4紙で、昭和40年1月から『読売新聞』を加え5紙となっている。この他にも『筑後日々新聞』、『日本経済新聞』など時折貼り込まれている記事も採用した。
- 3) 石橋美術館の新聞切り抜き帳は、この時期、新聞紙名・日付のみを採用した記事に記載していたので、本目次には朝・夕刊の別、地方版などに関するデータをいれることができなかった。
- 4) 本目次の記載については以下のとおりとした。
 - ①記事の順序は発行年月日順とし、同じ日付の場合は新聞紙名の50音順とした。
 - ②「切抜帳」の項目は切り抜き帳の年次と分冊数次を表したものである。切り抜き記事は、この時期、内容分類に従い数冊に分けて製本されているため、日付順に配列すると分冊数次が前後する場合もある。
 - ③「執筆者」の項目は記事中の表記に従ったが、〈談話会〉などの記載を補ったものもある。
 - ④「見出し」の記載については原則として記事の表記に従い、大見出し、小見出しの順に記載したが、「見出し」を読むだけでおおよその内容を把握できることを配慮し、順序を変えて記載したものもある。また、見出しが多数ある場合など、いくつかの見出しを省略したものもある。コラム記事に関してはコラム名を〈 〉で表した。連載記事は連載番号を()にいった。
 - ⑤コラム名や見出しだけでは内容がまったく不明と思われる記事には、本文の一部を引用したものもある。また、〈番組紹介〉〈社告〉など記事にはない記載を補ったものもある。
 - ⑥記事の見出しの中には明らかに誤植と思われるものがあつたが、記事の表記どおりに記載した。また、切り抜き記事に記載された新聞紙名や日付の中にも誤りと思われるものもあつたが、これも切り抜き帳の記載どおりとした。また、記載記事の中には連載番号よりみて採取漏れとみられる記事もあるが、これを原紙や他の資料等によって補うことはしなかった。(G, U)

坂本繁二郎関連記事目次（1957年－1969年）

新聞紙名	発行年月日	切抜帳	執筆者	見出し	
1	フクニチ	1957年01月02日	1957-1	原	文化勲章の新春 坂本画伯清談
2	西日本	1957年01月06日	1957-1		坂本画伯かこんで 新人会の二十周年記念新春総会
3	朝日	1957年01月11日	1957-1		〈青鉛筆〉 本文：文化勲章を受けた坂本繁二郎画伯が「泊船暁光」と題する版画百枚を…
4	朝日	1957年01月27日	1957-1	G記者	躍進する筑後画壇 出よ、第二の坂本、青木
5	西日本	1957年02月25日	1957-1		坂本画伯の顔 今里氏が彫刻に
6	西日本	1957年06月27日	1957-1	平	らくがき文化地理 九州山口 ②の 筑後
7	毎日	1957年08月31日	1957-3	坂本繁二郎(談)	わが十代の思い出 ②6 夢中でつづけた絵
8	朝日	1957年09月05日	1957-1		巨匠、再起の筆握る 坂本繁二郎画伯視力を回復
9	朝日	1957年09月10日	1957-3	杉山洋(えと文)	筑後の秋 (1) 本文：…坂本繁二郎先生のお宅におうかがいし…
10	毎日	1957年09月10日	1957-1		青木繁の画集決定版を作る
11	フクニチ	1957年09月12日	1957-1		衰え見せぬ制作意欲 健康回復の坂本画伯
12	毎日	1957年09月19日	1957-1		未完の大作は待つ 元気で「絵筆再び」 眼病と闘う坂本繁二郎画伯
13	西日本	1957年10月03日	1957-1		青木繁画伯の画集発行
14	毎日	1957年10月05日	1957-1		青木繁画集の決定版を 友人の坂本画伯らが編集着手
15	朝日	1957年10月15日	1957-1		創立20年を迎える 坂本画伯を囲む新人会
16	朝日	1957年11月08日	1957-1		〈文化横丁〉 絵の値段
17	朝日	1957年11月17日	1957-1		数日中に再起の退院 坂本繁二郎画伯 眼の再手術に成功
18	西日本	1957年11月17日	1957-1		開眼した坂本画伯 “また馬をえがきたい”
19	西日本	1957年11月23日	1957-1		坂本画伯元気で退院
20	朝日	1957年11月29日	1957-1		ハゼの記念碑建設 ハゼ好きの芸術家らが計画
21	西日本	1957年12月26日	1957-1		“開眼”の巨匠 坂本繁二郎画伯 目と戦って30年 “スケッチにも行くよ”
22	西日本	1958年01月07日	1958-1		眼鏡の贈物に大喜び 坂本画伯 五月には阿蘇スケッチ？
23	朝日	1958年01月20日	1958-2	隆	幻想の美しさ 坂本繁二郎 馬の写生展
24	西日本	1958年02月23日	1958-2	便	にじみ出る誠実さ “坂本繁二郎素描展”から
25	毎日	1958年02月25日	1958-2	谷口鉄雄	坂本繁二郎素描展
26	西日本	1958年03月27日	1958-1		30日に青木画伯追悼しけし祭 久留米市
27	朝日	1958年04月15日	1958-1		〈続文化横町〉 坂本画伯と新人画家
28	西日本	1958年04月15日	1958-1		〈きじ車〉 弟子を励ます坂本画伯
29	朝日	1958年06月08日	1958-1		坂本画伯かこむ“新人会”
30	朝日	1958年08月02日	1958-2		〈ぼくらの夏休み〉 坂本画伯らが指導 第11回児童画講習会
31	フクニチ	1958年08月28日	1958-1		ほろびるハゼの木に愛惜 “記念碑”を建てよう 筑後路の文化人ら 坂本画伯を中心に計画
32	西日本	1958年10月26日	1958-3	坂本繁二郎(談)	わが友の記 (5) 絶対ウソの言えぬ人 自然児・石井鶴三さん
33	朝日	1958年11月05日	1958-2	隆	〈画展から〉 “希少価値”をみせる 坂本繁二郎・鳥海青児展
34	フクニチ	1958年12月23日	1958-1		坂本画伯の喜寿祝う 筑後地方の“新人会”20名
35	筑後日々	1959年01月05日	1959-3	丸山豊	己が道を悠々と進む坂本繁二郎
36	毎日	1959年01月11日	1959-3	藤田君幸(カメラ)	喜寿の新春 坂本繁二郎画伯
37	西日本	1959年01月13日	1959-1		坂本画伯喜寿の喜び 八女で新人会などがお祝い
38	西日本	1959年02月21日	1959-1		筑後平野 その④⑤ 郷土の先輩 (上) 偉大な三人の画家 坂本繁二郎、青木繁に古賀春江
39	朝日	1959年05月17日	1959-1		新人会
40	西日本	1959年07月28日	1959-1		お体に気をつけて 八女市楠ノ実少年隊 坂本画伯を見舞う
41	西日本	1959年08月26日	1959-2		坂本画伯が楠ノ実少年隊に基金贈る
42	朝日	1959年10月04日	1959-2		第一回西部秀作展 生きる西日本の伝統 あでやか・繁二郎の新作
43	朝日	1959年10月08日	1959-1		未完の大作に情熱 坂本画伯 衰えた視力も回復
44	フクニチ	1959年10月08日	1959-1		“美術の秋”に創作意欲もやす坂本画伯 未完成の大作「雲仙」「阿蘇」完成へ

45	西日本	1959年11月05日	1959-3		反俗の顔 (1) 坂本繁二郎 超一流の“田舎画伯”
46	西日本	1959年11月16日	1959-1		八女市へ油絵 坂本画伯が寄贈
47	毎日	1959年11月16日	1959-1		〈雑記帳〉 本文：わが国洋画壇の巨匠坂本繁二郎画伯…八女市に十号の油絵“箱”を寄贈…
48	毎日	1959年12月18日	1959-3		話題アンコール (5) 喜寿を迎えた坂本繁二郎画伯 八女の名誉市民に
49	朝日	1960年01月04日	1960-3		画家 坂本繁二郎氏 正月はホンのお義理に
50	西日本	1960年01月19日	1960-1		坂本画伯をかこんで 洋画新人会の新年初例会
51	朝日	1960年02月16日	1960-1		坂本画伯と耳の不自由な画家 絵の指導は筆談で
52	フクニチ	1960年03月28日	1960-1		カッポ酒で故青木氏のぶ 久留米 けしけし祭りにぎわう
53	フクニチ	1960年05月23日	1960-1		八女公園に坂本画伯の胸像 市長が発起人 市民の寄付で建設
54	朝日	1960年05月28日	1960-1		八女で坂本画伯の胸像作る
55	西日本	1960年06月15日	1960-1		坂本画伯の胸像建設を計画 八女文化連盟
56	毎日	1960年07月29日	1960-1		「坂本繁二郎夜話」を発行 熊本市で限定版五百部
57	フクニチ	1960年08月21日	1960-1		坂本画伯の胸像建立募金を呼びかけ 八女 発起人会
58	フクニチ	1960年08月23日	1960-3		それでも筆は離さない 眼病と闘う坂本画伯
59	朝日	1960年08月28日	1960-1		〈話の小箱〉 本文：坂本繁二郎画伯の胸像建立発起人会は…
60	朝日	1960年09月15日	1960-1		30年の交友 画と花と庭 老いてさかんな三人 初秋に語り合う 坂本、杉本、東さん
61	毎日	1960年10月22日	1960-1		花田芳雄個展に坂本画伯
62	西日本	1960年11月17日	1960-1		六十年ぶりの歓談 坂本画伯囲み教え子が同窓会
63	西日本	1960年11月23日	1960-3		〈風車〉 “青稲会”が東京で同人展 本文：坂本繁二郎画伯門下の若いグループ“青稲会”が…
64	朝日	1960年12月06日	1960-2	武者小路実篤	「この道」展について
65	フクニチ	1961年01月01日	1961-3		わが妻 (1) 坂本繁二郎画伯 カホル夫人
66	西日本	1961年01月09日	1961-3		健在なり (5) 洋画 坂本繁二郎(78歳)
67	毎日	1961年01月09日	1961-1		ヒナ型出来上る 坂本画伯銅像に打込む今里氏
68	毎日	1961年01月17日	1961-1		和やかに厳しく 新人会の集い 坂本画伯が指導
69	フクニチ	1961年01月19日	1961-3		『黒い牛』を描いたころ 坂本繁二郎氏語る
70	西日本	1961年01月21日	1961-1		坂本画伯も会場へ 二紀会展 はなやかに開幕
71	西日本	1961年02月08日	1961-1		〈告知版〉 久留米 本文：有馬記念館(篠山城跡)は…坂本繁二郎、故古賀春江、青木繁の初期の作品(いずれも未公開)を展示…
72	朝日	1961年02月15日	1961-3	点	ある日ある人 (4) 坂本繁二郎氏
73	フクニチ	1961年02月26日	1961-2		芸術づく白秋の出身校 連続5回県展優勝の矢留小学校 坂本画伯も指導
74	毎日	1961年03月01日	1961-1		あす79才の誕生・坂本画伯 「行きつくところのない絵の道」
75	朝日	1961年03月02日	1961-3		なおカンバスに情熱 79歳迎えた坂本画伯
76	毎日	1961年03月02日	1961-2	坂本繁二郎(談)	イタリア彫刻展に寄せて
77	西日本	1961年03月09日	1961-1		坂本画伯を訪れた米国総領事夫妻
78	西日本	1961年03月12日	1961-1		わずかに25万円 集まらぬ坂本画伯の銅像募金
79	朝日	1961年04月19日	1961-1		もの申す 銅像建立の募金が不明朗だ
80		1961年05月	1961-1		坂本画伯柳川へ
81		1961年05月	1961-1		坂本画伯も顔みせる 大坪権治氏の個展
82	西日本	1961年05月04日	1961-1		坂本画伯が訪れる 大坪権治氏の個展
83	朝日	1961年05月10日	1961-1		除幕式は文化の日 坂本画伯の像、制作すすむ
84	フクニチ	1961年05月26日	1961-1		坂本画伯の“銅像原型”完成 彫刻家今里氏の手で 11月初め八女公園で除幕式
85	フクニチ	1961年07月05日	1961-1		第七回坂本画伯銅像建立委員会
86	朝日	1961年07月30日	1961-1		今里竜生氏八女へ
87	フクニチ	1961年08月01日	1961-1		完成近い坂本翁の銅像 八女、製作者の今里氏が帰郷
88	朝日	1961年08月04日	1961-1		文化の日に除幕式 坂本画伯の銅像、月末に完成

89	西日本	1961年08月15日	1961-1		坂本画伯銅像の木組みできる
90	朝日	1961年08月26日	1961-1		八女公園で地鎮祭 坂本画伯の銅像
91	フクニチ	1961年08月26日	1961-1		坂本画伯の銅像来月に据え付け 八女西公園で建立地鎮祭
92	毎日	1961年08月26日	1961-1		坂本画伯の座像地鎮祭 八女市
93	フクニチ	1961年09月08日	1961-3		人物登場 (7) 今里龍生氏 坂本画伯の銅像製作
94	朝日	1961年09月09日	1961-1		早速組み立て終わる 八女 坂本画伯の銅像が到着
95	西日本	1961年09月09日	1961-1		坂本画伯の銅像をすえ付け 『文化の日』に除幕式
96	毎日	1961年09月10日	1961-1		ひっそりと建つ坂本繁二郎像 その名も“空”
97	毎日	1961年11月01日	1961-1		三日に除幕式 坂本繁二郎画伯の銅像
98	西日本	1961年11月03日	1961-1		スケッチ姿の銅像 坂本画伯 八女公園にできる
99	朝日	1961年11月04日	1961-1		坂本画伯の銅像除幕式
100	西日本	1961年11月04日	1961-1		にぎわった“文化の日” 盛大に銅像除幕式や美術展も
101	西日本	1961年11月04日	1961-1		郷土の三大芸術家を讃う
102	毎日	1961年11月04日	1961-1		坂本画伯の銅像建つ 八女公園で除幕式行なう
103	朝日	1961年11月05日	1961-1		秘蔵の「母の像」も 坂本氏作品展
104	フクニチ	1961年11月09日	1961-1		本文：八女市西公園に坂本繁二郎画伯の銅像が…
105	西日本	1961年11月	1961-3		〈風車〉 坂本繁二郎氏の銅像
106	朝日	1961年11月14日	1961-1		坂本画伯銅像建立委員会
107	フクニチ	1962年03月18日	1962-1		盛大に“ハゼの歌”発表 八女の小山田さん作曲 坂本画伯もかけつく
108	西日本	1962年03月19日	1962-1		新作能“ハゼ”の発表会 謡曲は井上画伯作
109	毎日	1962年03月20日	1962-1		坂本、青木両画伯モチーフに 八女 新作謡曲 “はぜ”発表会
110	朝日	1962年07月06日	1962-1		坂本画伯が激励 元気な姿で 井上さんの個展へ
111	フクニチ	1962年07月08日	1962-1		“郷土で初めての個展” 筑後市出身井上画伯 坂本画伯も会場へ
112	西日本	1962年08月03日	1962-1		暑さ忘れて千人 坂本画伯指導の図画講習会
113	朝日	1962年09月17日	1962-3	坂本繁二郎	思い出すまゝに (1) 明治時代
114	朝日	1962年09月18日	1962-3	坂本繁二郎	思い出すまゝに (2) 青木繁君
115	朝日	1962年09月19日	1962-3	坂本繁二郎	思い出すまゝに (3) コロー
116	朝日	1962年09月20日	1962-3	坂本繁二郎	思い出すまゝに (4) フランスと風土
117	朝日	1962年09月21日	1962-3	坂本繁二郎	思い出すまゝに (5) 日本の風土
118	西日本	1962年10月24日	1962-1	平島忠太郎	読者の一日記者 (3) 坂本繁二郎画伯と会う
119	西日本	1962年10月27日	1962-1		青木繁の絶筆みつかる 佐賀の古道具屋で 坂本繁二郎画伯が鑑定
120	西日本	1962年11月04日	1962-1		咲き乱れる花を楽しむ坂本画伯 八女の婦人会が招待
121	朝日	1962年11月05日	1962-3		新・人国記 (31) 福岡県 (8) 坂本繁二郎
122	フクニチ	1962年11月05日	1962-1		銅像前で花束贈る 八女 名誉市民の坂本画伯に
123	朝日	1962年11月07日	1962-3		〈素描〉 本文：…坂本繁二郎画伯の画業七十年回顧展…
124	朝日	1962年11月13日	1962-3	隆	坂本繁二郎の芸術 自ら求めた“孤独の画家”
125	毎日	1962年11月13日	1962-1		〈文化短信〉 坂本繁二郎画談出版
126	西日本	1962年11月15日	1962-3	河北倫明	坂本繁二郎の世界 回顧展をみて
127	西日本	1962年11月30日	1962-1		〈文化短信〉 坂本繁二郎画談
128	西日本	1962年12月05日	1962-1		「坂本繁二郎画談」〈書評〉
129	毎日	1962年12月05日	1962-1		〈郷土のほん〉 「坂本繁二郎画談」 杉森麟編著
130	フクニチ	1962年12月08日	1962-1		〈書評〉 教養にじむ人生訓 杉森麟編「坂本繁二郎画談」
131	朝日	1963年01月06日	1963-3		朝日賞の人たち (3) 坂本繁二郎氏
132	毎日	1963年01月26日	1963-2		強烈な画魂 “坂本繁二郎展”
133	朝日	1963年03月05日	1963-3		坂本繁二郎画伯顕彰記念事業委員会
134	毎日	1963年03月05日	1963-3		坂本繁二郎画伯顕彰記念委員会設立準備会
135	西日本	1963年03月10日	1963-3		坂本画伯銅像保存会として発足 坂本画伯顕彰委員会
136	朝日	1963年03月22日	1963-1		現れよ！名画家 写真：緒方コレクション開きに出席、自分の作品を見る坂本繁二郎氏
137	西日本	1963年03月22日	1963-4	二宮冬鳥	郷土画家の傑作を多数 緒方コレクション
138	フクニチ	1963年03月22日	1963-1		郷土の青木繁らの作品展示 久留米 緒方さんの個人美術館開く 写真：開館式でテーブルを切る坂本画伯

139	西日本	1963年04月23日	1963-4	杉森麟	〈筑後文芸〉 わたしの手帳から 『ゴッホ・エジプトの美術』 坂本繁二郎先生語録
140	朝日	1963年05月23日	1963-3		坂本繁二郎版画展
141	毎日	1963年06月21日	1963-3		〈筑後百科〉 坂本繁二郎
142	朝日	1963年09月20日	1963-3	渡辺	“ホンモノ”の探究へ一途 坂本画伯の近況
143	朝日	1963年10月23日	1963-2		朝日賞受賞記念坂本繁二郎展 10月29日-11月3日 〈社告〉
144	朝日	1963年10月23日	1963-2	源	七十年の画業一堂に 朝日賞受賞記念 坂本繁二郎展
145	西日本	1963年10月28日	1963-4	二宮冬鳥	聖なる色 坂本繁二郎の芸術
146	朝日	1963年10月29日	1963-2		おすなおすな 坂本繁二郎展開幕
147	朝日	1963年10月29日	1963-2		坂本繁二郎展 きょう開く
148	朝日	1963年10月30日	1963-4	谷口鉄雄	坂本繁二郎の芸術 一朝日賞受賞記念展をみて一
149	朝日	1963年11月04日	1963-1		坂本画伯元気で八女公園へ
150	西日本	1963年11月04日	1963-1		八女文化連盟と婦人会
151	朝日	1964年01月01日	1964-1		〈青鉛筆〉 本文：…坂本繁二郎画伯が…八女市で成人式を迎える人のために色紙の原画を描いた…
152	朝日	1964年03月18日	1964-2		“坂本繁二郎の人と芸術” カメラに収まった老画伯
153	朝日	1964年03月23日	1964-1		教養特集 「美術散歩」 坂本繁二郎の人と芸術 〈番組紹介〉
154	西日本	1964年03月23日	1964-1		教養特集 美術散歩 坂本繁二郎の人と芸術 〈番組紹介〉
155	フクニチ	1964年03月23日	1964-1		〈みもの〉 美術散歩 坂本繁二郎の人と芸術 〈番組紹介〉
156	毎日	1964年03月23日	1964-1		美術散歩 坂本繁二郎の人と芸術 〈番組紹介〉
157	西日本	1964年05月20日	1964-1		ころんでも起き上がり ラーメン屋を励ます 坂本繁二郎さん
158	西日本	1964年07月12日	1964-3		〈風車〉 坂本氏を囲む青稲会展
159	朝日	1964年08月25日	1964-1		坂本画伯が励ましに 八女市 個展を開く吉田さん
160	朝日	1964年08月30日	1964-2	杉山洋	審美会名誉会員 坂本繁二郎のことなど
161	西日本	1964年09月23日	1964-1		坂本画伯の馬市の絵を初公開
162	毎日	1964年	1964-2	徳永進	テレビの7分間 ある日の坂本繁二郎画伯
163	西日本	1964年10月13日	1964-1	杉森麟	花田君の個展に寄せて 新人会の異色作家
164	フクニチ	1964年10月14日	1964-2		いしぶみの周辺 坂本繁二郎(八女)
165	西日本	1964年10月19日	1964-2		新人会展を激励 福岡へひょっこり坂本画伯
166	朝日	1964年10月25日	1964-2		苦難越え、個展開催へ 花田さん 坂本画伯らのはげましで
167	フクニチ	1964年11月07日	1964-1		坂本画伯寿像建立記念協賛会が発足
168	朝日	1964年11月16日	1964-2		まる一年ぶりの外出 坂本画伯、弟子の個展に
169	西日本	1964年11月16日	1964-2		坂本画伯が花田個展を鑑賞
170	西日本	1964年11月27日	1964-4		坂本画伯も激励 柳川市の児童画展
171	西日本	1964年12月05日	1964-4		ユーモアまじえ指導 柳川 坂本画伯迎え児童画展
172	毎日	1965年02月15日	1965-2		福岡県の戦後史 激動二十年 85 食糧、絵具もなく 坂本繁二郎さん たぎる情熱
173	西日本	1965年02月21日	1965-3	岸田勉	消えた“肉弾三勇士”
174	西日本	1965年02月24日	1965-3	(座談会)伊東静尾、池上丁一、他	二科西人社30年 その歴史を語る (中) 新人発掘をねらう 柱になった坂本繁二郎
175	朝日	1965年03月02日	1965-2	源記者	最近の坂本繁二郎画伯 きょう83歳の誕生日
176	西日本	1965年04月20日	1965-2		とても83歳とは 坂本画伯 新人会で指導
177	フクニチ	1965年04月20日	1965-2		〈街灯〉 余生の楽しみ 本文：八女市に住む坂本繁二郎画伯…
178	朝日	1965年04月29日	1965-3	坂本繁二郎	恩師・森先生のこと 森三美遺業展によせて
179	西日本	1965年05月24日	1965-2	片山撰三(写真と文)	美術家の顔 (1) 坂本繁二郎 ひげふるわせて“芸術論”
180	毎日	1965年07月10日	1965-2		八女に永住さめる 坂本画伯 「いまさら東京にも」
181	読売	1965年07月22日	1965-2	坂本繁二郎(談)	わたしの健康法 画家 坂本繁二郎さん
182	西日本	1965年08月05日	1965-2	P	〈まちかど〉 坂本画伯のことは
183	フクニチ	1965年08月24日	1965-3		坂本繁二郎画伯囲み批評会も 八女で“核”作品展

184	毎日	1965年10月09日	1965-2		坂本画伯“45年の宿願” 労作“牛”を完成
185	毎日	1965年11月01日	1965-2	徳永進	坂本繁二郎画伯をたずねて
186	毎日	1965年12月04日	1965-2		そっくりの画伯像 弟子が坂本さんに贈る
187	フクニチ	1965年12月05日	1965-2		よく似ているネとニコリ 彫刻家の今里氏 坂本画伯へ「像」贈る
188	朝日	1965年12月08日	1965-1		切り裂かれた“善意” 清力美術館の名画盗難
189	朝日	1965年12月08日	1965-1		名画七点盗まる 坂本繁二郎の「牛」など 大川市の清力美術館
190	フクニチ	1965年12月08日	1965-1		坂本画伯らの名画ごっそり消ゆ 悪質マニア? 切りとる
191	毎日	1965年12月08日	1965-1		名画盗難にショック 清力美術館 復元はもうダメ
192	毎日	1965年12月08日	1965-4		河北倫明著 青木繁と坂本繁二郎 〈書評〉
193	毎日	1965年12月09日	1965-1		前にも坂本画伯宅で盗難 熊本出身の男などを追及
194	フクニチ	1966年01月01日	1966-2		夢かかった『馬』の少年画家 “神様”坂本画伯が激励のお年玉!
195	毎日	1966年01月07日	1966-2		枯淡, 幽玄の世界 坂本繁二郎 〈番組広告〉
196	西日本	1966年01月10日	1966-1		どこに行った名画7点 清力美術館の盗難事件
197	毎日	1966年02月11日	1966-2		特別番組 “孤高の画境”を守る 19日テレビ 「坂本繁二郎の記録」
198	西日本	1966年02月15日	1966-2		“情熱”の貴重な記録 坂本画伯浮き彫り 19日放送 RKBが意欲的制作
199	毎日	1966年02月15日	1966-2		孤高の画伯, 坂本繁二郎氏 その日常生活を放送
200	フクニチ	1966年02月18日	1966-2		画伯のモノローグで構成 RKB あす「坂本繁二郎の記録」
201	西日本	1966年02月19日	1966-2		貴重な“独白”描く 第14回民放祭参加 『坂本繁二郎の記録』
202	毎日	1966年02月19日	1966-2		坂本繁二郎の記録 第14回民放祭参加
203	朝日	1966年02月26日	1966-1		清力美術館 名画ドロ自供
204	朝日	1966年02月26日	1966-2	源記者	坂本繁二郎画伯のこのごろ
205	西日本	1966年02月26日	1966-1		『清力美術館』荒らしを自供 余罪追及中の窃盗男 下関署
206	フクニチ	1966年02月26日	1966-1		“名画ドロ”あがる 清力美術館(大川市)の盗難事件
207	毎日	1966年02月26日	1966-1		清力美術館(福岡)の犯人が自供
208	朝日	1966年03月01日	1966-1		盗難の絵みつかる 小倉で「牛」など五点 清力美術館
209	西日本	1966年03月01日	1966-1		不明の二点に全力 清力美術館盗難事件 共犯の有無も追及
210	朝日	1966年03月02日	1966-1		「清力美術館」の絵みつかる 小倉の知人宅『牛』など5点 窃盗男が自供
211	毎日	1966年03月03日	1966-2	田中幸人記者	84回目の誕生迎えた 坂本繁二郎画伯に聞く
212	毎日	1966年03月03日	1966-2		修復される「放牧三馬」 誕生日の坂本画伯のもとへ 34年ぶり
213	毎日	1966年03月06日	1966-1		見つかった五点の名画帰る 大川市の清力美術館
214	西日本	1966年03月07日	1966-1		三ヶ月ぶりに戻る 清力美術館 盗まれた名画五点
215	毎日	1966年03月23日	1966-4		石橋美術館コレクションから 放牧三馬
216	フクニチ	1966年06月01日	1966-2	平島忠太郎	郷土の誇り 坂本繁二郎先生
217	西日本	1966年06月29日	1966-3		坂本繁二郎氏も出品 福岡で初の太平洋美術会展
218	フクニチ	1966年07月13日	1966-2		グループ・人脈 (5) 諸派 (1) 洋画壇の最長老 坂本繁二郎
219	朝日	1966年07月23日	1966-3	源	名画の中の女性 (25) 坂本薫 坂本繁二郎作 「張り物」
220	西日本	1966年08月24日	1966-1		名画五点を再び陳列 清力美術館 みごとな“修復”
221	西日本	1966年09月05日	1966-2	谷口記者	このごろ 坂本繁二郎画伯 八女市に訪れる
222	毎日	1966年09月17日	1966-2		〈雑記帳〉 本文:…坂本繁二郎画伯が…二十五号の大作“月”を完成…
223	朝日	1966年09月19日	1966-2		八女市無量寿院に大作贈る 坂本画伯
224	西日本	1966年09月19日	1966-2		心魂さえる『月』 坂本画伯, 労作を菩提寺に
225	フクニチ	1966年09月19日	1966-2		4年がかり大作“月”を奉納 坂本繁二郎画伯
226	読売	1966年09月19日	1966-1		「月」を無量寺院に奉納 坂本画伯が祖先の供養
227	読売	1966年09月21日	1966-1		「すばらしい鉄斎」 坂本繁二郎画伯, 名作展へ

228	西日本	1966年09月23日	1966-1		老夫婦の心情しみじみ 共に歩いた57年 画家坂本繁二郎 夫妻にさく 〈番組紹介〉
229	毎日	1966年09月23日	1966-1		婦人ニュース 共に歩いた57年 〈番組紹介〉
230	毎日	1966年09月27日	1966-3	戸嶋和郎	福岡評論 坂本画伯と美の追求
231	フクニチ	1966年12月15日	1966-1		坂本画伯の色紙など 八女の成人式記念品きまる
232	西日本	1967年01月01日	1967-2	(対談)坂本繁二郎, 岡潔	日本のこころ 対談 坂本繁二郎 岡潔 (1) 自然
233	西日本	1967年01月03日	1967-2	(対談)坂本繁二郎, 岡潔	日本のこころ 対談 坂本繁二郎 岡潔 (2) 抽象
234	西日本	1967年01月04日	1967-2	(対談)坂本繁二郎, 岡潔	日本のこころ 対談 坂本繁二郎 岡潔 (3) 不思議
235	西日本	1967年01月05日	1967-2	(対談)坂本繁二郎, 岡潔	日本のこころ 対談 坂本繁二郎 岡潔 (4) 友だち
236	西日本	1967年01月06日	1967-2	(対談)坂本繁二郎, 岡潔	日本のこころ 対談 坂本繁二郎 岡潔 (5) 子供と女性
237	西日本	1967年01月07日	1967-2	(対談)坂本繁二郎, 岡潔	日本のこころ 対談 坂本繁二郎 岡潔 (6) 根性
238	毎日	1967年01月23日	1967-1		坂本繁二郎画伯 弟子の個展会場へ
239	読売	1967年01月23日	1967-1		坂本画伯から“おほめ” 真藤さん40年の力作展
240	西日本	1967年02月28日	1967-2		くじ車) 話題呼ぶ坂本さんの建て物
241	朝日	1967年03月02日	1967-1		きょう85歳の誕生日 坂本繁二郎画伯
242	西日本	1967年03月02日	1967-1		“満85歳おめでとう” 坂本画伯にお祝いの花束
243	毎日	1967年03月02日	1967-1		坂本画伯85才の誕生日 毎日, 元気に絵筆
244	フクニチ	1967年03月03日	1967-1		制作の意気さかん 85歳の誕生日迎えた坂本画伯
245	読売	1967年03月03日	1967-1		これからも力作を 坂本画伯85歳の誕生日
246	西日本	1967年04月03日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (1) こころの画家 序にかえて
247	西日本	1967年04月10日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (3) 没落士族
248	西日本	1967年04月11日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (4) 絵のムシ
249	西日本	1967年04月15日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (5) 森三美
250	毎日	1967年04月15日	1967-2		ある日ある人 坂本繁二郎画伯
251	毎日	1967年04月16日	1967-2	石橋正二郎(談), 田中洋之助(聞き手)	対談閑話 美神と事業 (2) 青木繁と坂本繁二郎
252	西日本	1967年04月24日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (6) 神童
253	西日本	1967年04月29日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (7) 青木繁
254	西日本	1967年05月01日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (8) あんちゃん先生
255	西日本	1967年05月04日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (9) 上京
256	西日本	1967年05月08日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (10) 新派と旧派
257	西日本	1967年05月09日	1967-1		新手法に批判 久留米市で坂本画伯を囲む懇談会
258	毎日	1967年05月09日	1967-1		お珍しい坂本画伯 40分間, 芸術談を展開 若い経営者らの招き快諾
259	西日本	1967年05月15日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (11) 不同舎
260	西日本	1967年05月18日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (12) 無銭旅行
261	西日本	1967年05月20日	1967-1		郷土の話題 『繁と繁二郎』 〈番組紹介〉
262	西日本	1967年05月23日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (13) 福田たね
263	西日本	1967年05月29日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (14) 研究所
264	西日本	1967年06月09日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (15) 海の幸
265	西日本	1967年06月12日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (16) 夏の終わり
266	西日本	1967年06月15日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (17) 親友
267	西日本	1967年06月20日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (18) 台頭
268	西日本	1967年06月23日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (19) 芸誌「方寸」
269	西日本	1967年06月27日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (20) 東京バック
270	西日本	1967年06月29日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (21) 馬鉄通り
271	西日本	1967年07月01日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (22) 結婚
272	西日本	1967年07月04日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (23) 張り物
273	西日本	1967年07月07日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (24) 存在

274	西日本	1967年07月08日	1967-1		第63回太平洋九州展 本文：特別出品 坂本繁二郎 <社告>
275	西日本	1967年07月09日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (25) 考える牛
276	西日本	1967年07月11日	1967-1		太平洋展始まる 坂本繁二郎氏も出品 県文化会館
277	西日本	1967年07月20日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (26) 進路
278	西日本	1967年07月23日	1967-1		坂本画伯が最終審査 20回め迎えた児童画講習会 柳川市
279	毎日	1967年07月23日	1967-3		次の連載 絵を描くところ 語る人 坂本繁二郎氏
280	毎日	1967年07月26日	1967-2	坂本繁二郎(談)、 河谷日出男 (聞き手)	対談閑話 絵を描くところ (1) 自然を見つめる
281	毎日	1967年07月27日	1967-2	坂本繁二郎(談)、 河谷日出男 (聞き手)	対談閑話 絵を描くところ (2) 熱気こもる明治画壇
282	西日本	1967年07月28日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (27) 三木露風
283	毎日	1967年07月28日	1967-2	坂本繁二郎(談)、 河谷日出男 (聞き手)	対談閑話 絵を描くところ (3) わが友・青木繁
284	西日本	1967年07月29日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (28) 隅田川
285	毎日	1967年07月29日	1967-2	坂本繁二郎(談)、 河谷日出男 (聞き手)	対談閑話 絵を描くところ (4) 写楽・光琳・宗達など
286	毎日	1967年07月30日	1967-2	坂本繁二郎(談)、 河谷日出男 (聞き手)	対談閑話 絵を描くところ (5) 永遠なものへ
287	西日本	1967年08月08日	1967-2		この人このごろ 坂本繁二郎氏
288	西日本	1967年08月21日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (29) 二科会
289	西日本	1967年08月23日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (30) 哲学画家
290	毎日	1967年08月24日	1967-2		なつかしいね私の作品「たしかに」と坂本画伯 50年前のもの “対談閑話”が縁でわかる
291	西日本	1967年09月01日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (31) 渡欧
292	西日本	1967年09月04日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (32) 船旅
293	西日本	1967年09月11日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (33) パリ (1)
294	西日本	1967年09月16日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (34) パリ (2)
295	西日本	1967年09月18日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (35) ループル
296	西日本	1967年09月21日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (36) 滞欧作
297	西日本	1967年09月27日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (37) 帰国
298	西日本	1967年10月02日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (39) 弟子
299	西日本	1967年10月09日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (40) 馬 (1)
300	西日本	1967年10月11日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (41) 馬 (2)
301	西日本	1967年10月12日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (42) 八女
302	西日本	1967年10月16日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (43) 古賀春江
303	毎日	1967年10月22日	1967-1	河谷記者	奥深いルノワール 坂本繁二郎画伯に聞く
304	西日本	1967年10月23日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (44) 風土
305	西日本	1967年10月25日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (45) 肉弾三勇士
306	西日本	1967年10月30日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (46) 二科分裂
307	西日本	1967年10月31日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (47) 画商
308	西日本	1967年11月02日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (48) 戦争
309	西日本	1967年11月03日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (49) 西部美術
310	西日本	1967年11月	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (50) 芸術院会員
311	西日本	1967年11月09日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (51) けしけし山
312	西日本	1967年11月13日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (52) 物感
313	西日本	1967年11月20日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (53) 能面
314	西日本	1967年11月23日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (54) 新人会
315	西日本	1967年11月24日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道 (55) 月雲
316	西日本	1967年11月25日	1967-2	谷口治達記者	坂本繁二郎の道をもって
317	フクニチ	1968年01月08日	1968-1		坂本画伯も特別出品 サルと人生展

318	毎日	1968年01月19日	1968-2		あすから九大でドック入り 坂本繁二郎画伯
319	朝日	1968年01月20日	1968-2		九大の人間ドック入り 坂本画伯
320	読売	1968年01月20日	1968-2		坂本画伯ドック入り
321	西日本	1968年01月22日	1968-2		坂本画伯・青春の大作 『北茂安村の一部』 西相銀の新ビル飾る
322	朝日	1968年02月27日	1968-1		美術ファンに画廊開放 郷土画家の作品を展示して 八女市の樋口さん 本文：…坂本繁二郎画伯から贈られた「ハサミ」など郷土の画家のコレクションを展示…
323	フクニチ	1968年02月27日	1968-1		〈テロップ〉 TNC 本文：…番組「坂本繁二郎の画業・或る訪問」…
324	西日本	1968年02月29日	1968-1		TNC 十周年記念特別カラー番組み 或る訪問 坂本繁二郎の画業
325	読売	1968年03月02日	1968-2		〈みなど〉 本文：…坂本繁二郎画伯が二日、八十六歳の誕生日…
326		1968年03月	1968-2		庭いじりの毎日 八十六歳迎えた坂本さん
327	西日本	1968年03月03日	1968-2		坂本画伯、86歳に「月」の連作に取り組む
328	フクニチ	1968年03月03日	1968-2		〈街灯〉 すこやか坂本画伯
329	毎日	1968年03月03日	1968-2		意気盛ん、坂本画伯 元気に86歳の誕生日
330	西日本	1968年03月06日	1968-1		“うまくなったよ” 坂本画伯が直接指導・審査 柳川市の児童画展 二十回めを迎える
331	朝日	1968年03月18日	1968-3		〈点描〉 現代の巨匠四人展
332	西日本	1968年03月22日	1968-3		梅原、坂本、小糸、林 東京 現代の巨匠四人展
333	西日本	1968年03月24日	1968-2		七年ぶりの再会を喜ぶ 坂本、田崎両画伯
334	毎日	1968年03月24日	1968-3		〈画廊〉 肩のこらぬ親近感 現代巨匠四人展
335	読売	1968年04月04日	1968-3	藤井源一	〈美術評〉 洋画の性格を反映 「現代の巨匠四人展」
336	西日本	1968年06月03日	1968-2		大村氏が坂本画伯像を制作
337	西日本	1968年06月06日	1968-1		広がる生家保存運動 画壇の2巨匠(故青木繁 坂本繁二郎)も
338	西日本	1968年06月09日	1968-1		高まる保存への動き 青木繁、坂本繁二郎氏生家
339	西日本	1968年06月10日	1968-1	田中幸夫	坂本繁二郎とその母 保存したい久留米の生家
340	西日本	1968年06月15日	1968-1		青木繁、坂本繁二郎両生家 保存検討会を設置 久留米連文会総会
341	毎日	1968年06月19日	1968-1	戸嶋記者	「わが友、白秋」 坂本画伯も生家保存に一役
342	西日本	1968年07月05日	1968-2		『坂本繁二郎の道』近く出版
343	読売	1968年07月08日	1968-2		坂本画伯も元気に投票
344	朝日	1968年08月10日	1968-2		暖かくつづった画歴 谷口治達著 坂本繁二郎の道 〈書評〉
345		1968年08月11日	1968-2	河北倫明	“坂本芸術”浮きぼり 谷口治達著 坂本繁二郎の道 〈書評〉
346		1968年	1968-2		〈ほん〉 坂本繁二郎の道 谷口治達著
347	朝日	1968年09月25日	1968-2		〈点描〉 坂本画伯、健康に 一年ぶり、絵筆にぎる
348	読売	1968年10月20日	1968-1		坂本画伯も参観申し出 八女の文化祭始まる ふたあけ児童らの作品展
349	毎日	1968年10月21日	1968-2		坂本画伯が下絵を寄贈 わが友、白秋のために 未発表の馬2点
350	西日本	1968年10月22日	1968-1		子供らの力作ほめる 坂本画伯 児童生徒作品展へ 八女
351	フクニチ	1968年10月22日	1968-1		ひょっこり坂本画伯 八女 夫人同伴で「小中学生作品展」へ
352	毎日	1968年10月22日	1968-1		ヒョッコリ坂本画伯 八女市の小中学生作品展へ 一年ぶりの外出
353	読売	1968年10月22日	1968-1		じっくり坂本画伯 子どもの作品を鑑賞 八女
354	西日本	1968年10月26日	1968-1		白秋生家保存運動 色紙展と即売会 第一線画家38氏が協力
355		1968年10月30日	1968-1		あすから福岡で 白秋生家保存募金 有名画家の「色紙展と即売会」

356	西日本	1968年11月01日	1968-1		特に光る坂本画伯の“馬” 白秋生家保存運動 うっとり「色紙展と即売会」
357	西日本	1968年11月01日	1968-1		栄光の群像 近代日本の洋画史をひらいた九州の画家たち展から (4) 坂本繁二郎 古賀春江
358	毎日	1968年11月05日	1968-1		白秋生家保存募金の色紙展 きょうまで
359	毎日	1968年11月05日	1968-3	戸嶋和郎	福岡評論 坂本画伯のスケッチ
360	毎日	1968年11月06日	1968-3		白秋生家保存 「色紙展」終わる 坂本画伯の二作品も落札
361	西日本	1969年02月03日	1969-2		坂本繁二郎氏をめぐる話題
362	西日本	1969年03月03日	1969-2		米寿迎えてなお制作中 坂本繁二郎画伯
363	毎日	1969年03月03日	1969-2		「毎日が自然との勝負」 坂本繁二郎画伯 元気に87歳の誕生日
364	読売	1969年03月07日	1969-2		坂本画伯と念願の対面 日韓文化使節の金氏
365	西日本	1969年04月01日	1969-1		久留米と人 異色の人材輩出 “画壇の鬼才”青木, 坂本
366	西日本	1969年05月22日	1969-3	杉森麟	〈書斎〉 いつも古典に学ぶ 坂本画伯と隣合わせ
367	朝日	1969年07月15日	1969-2		坂本繁二郎氏(洋画家)死去
368	朝日	1969年07月15日	1969-2	河北倫明	坂本さんの死をいたむ
369	朝日	1969年07月15日	1969-2		家族だけでお通夜 家族をマクラ元に遺言 身動きもせず大往生
370	朝日	1969年07月15日	1969-2	源弘道記者	人間・坂本繁二郎 平凡に徹した非凡さ
371	西日本	1969年07月15日	1969-2		純粹…清冽…平和な生涯 坂本繁二郎
372	西日本	1969年07月15日	1969-2	河北倫明	坂本繁二郎の芸術
373	西日本	1969年07月15日	1969-2		盛り上がる『生家』保存 故坂本画伯
374	フクニチ	1969年07月15日	1969-2		坂本繁二郎画伯死去
375	フクニチ	1969年07月15日	1969-2	深野記者	“巨星が落ちた”悲しむ市民 坂本画伯の死
376	毎日	1969年07月15日	1969-2		坂本繁二郎氏死去
377	毎日	1969年07月15日	1969-2	河谷日出男	巨匠とひとりの記者 坂本繁二郎画伯をいたむ
378	毎日	1969年07月15日	1969-2		ひっそり「大坂本」の死 家族だけでお通夜
379	読売	1969年07月15日	1969-2		坂本繁二郎氏
380	読売	1969年07月15日	1969-2		坂本画伯へ質素なお別れ 孤高の絵筆死なず
381	読売	1969年07月15日	1969-2		深い悲しみの坂本邸
382	読売	1969年07月15日	1969-2	岸田勉	坂本芸術の世界
383	西日本	1969年07月16日	1969-2		故坂本画伯をしのいで… 悲しみに包まれた筑後の人たち
384	西日本	1969年07月16日	1969-2		〈春秋〉 本文:…いま日本でいちばん高いのはだれかといえば、それは坂本繁二郎である…
385	フクニチ	1969年07月16日	1969-2		〈きのう今日〉 坂本画伯の死
386	フクニチ	1969年07月16日	1969-2	青木寿	坂本繁二郎先生をしのぶ
387	毎日	1969年07月16日	1969-2		四十年住んだ自宅とお別れ 故坂本画伯, だびに
388	毎日	1969年07月16日	1969-2		つきぬ思い出語る しめやかに坂本画伯のお通夜
389	毎日	1969年07月16日	1969-2		生家の保存を 久留米連合文化会立上がる
390	毎日	1969年07月16日	1969-2		坂本先生をしのぶ
391	読売	1969年07月16日	1969-2		いまさらに偉大さ 銅像前で悲しむ市民 故坂本画伯
392	読売	1969年07月16日	1969-2		遺徳を慕って80人が見送り 坂本画伯の密葬
393		1969年07月17日	1969-2		21日に八女市葬 故坂本繁二郎画伯
394	西日本	1969年07月17日	1969-2		坂本画伯の遺体ダダに 親しい人たちに守られて
395	西日本	1969年07月17日	1969-2	〈座談会〉杉森麟, 坂宗一, 伊東静尾, 岸田勉	座談会 坂本繁二郎 人と芸術
396	読売	1969年07月17日	1969-2		坂本さんの絶筆“馬の絵” 完成間近だった50号 密葬に参列の画商語る
397	毎日	1969年07月18日	1969-2		坂本画伯と静かな別れ
398	読売	1969年07月18日	1969-2		市民ら多数が参列 しめやかに坂本画伯の告別式
399	朝日	1969年07月19日	1969-2		しめやかに焼香 故坂本画伯の告別式
400	西日本	1969年07月	1969-2		告別式に『月』を展示 故坂本画伯 参列者に新たな感激
401	西日本	1969年07月19日	1969-2		いつまでも故人を惜しむ声 坂本繁二郎画伯の告別式
402	毎日	1969年07月19日	1969-2		盛夏の中でしめやかに 悲しみに耐える薫夫人

403	読売	1969年07月19日	1969-2		〈いずみ〉 本文：坂本繁二郎画伯の告別式が行なわれた十八日…
404		1969年07月	1969-2		“陰の絵筆”となって… 巨匠の妻・坂本薫さん
405		1969年07月	1969-2		さようなら、坂本先生
406		1969年07月	1969-2		作品に喪のリボン 第65回太平洋展
407	西日本	1969年07月20日	1969-2		あす八女市葬 故坂本繁二郎氏
408	西日本	1969年07月21日	1969-2	二宮冬鳥	自然に還った自然児 坂本繁二郎画伯・最後の一カ月
409	朝日	1969年07月22日	1969-2		故坂本画伯しのぶ 二十年続く図画講習会 児童約千人が参加
410	朝日	1969年07月22日	1969-2		教養特集 坂本繁二郎の世界 〈番組紹介〉
411	西日本	1969年07月22日	1969-2		尽きぬ月との因縁 故坂本繁二郎氏の市葬
412	フクニチ	1969年07月22日	1969-2		しめやかに八女市葬 坂本繁二郎画伯の偉業たたえ
413	毎日	1969年07月22日	1969-2		しめやかに画業しので 故坂本画伯の八女市葬
414	毎日	1969年07月22日	1969-2		めい福祈る700人 故坂本画伯の八女市葬
415	読売	1969年07月22日	1969-2		遺徳を慕う多勢の人 八女市葬 坂本画伯に最後の別れ
416	朝日	1969年07月26日	1969-2	綱	〈土曜の手帳〉 不退転の姿勢学べ 坂本繁二郎の死と九州
417	朝日	1969年07月27日	1969-2	田中幸夫	〈読者コーナー〉 坂本繁二郎の生家で
418	西日本	1969年07月29日	1969-2		具体化する生家保存 故坂本画伯
419	西日本	1969年08月02日	1969-2		カラー映画を上映 小倉で坂本繁二郎をしのぶ会
420	西日本	1969年08月14日	1969-2		静かに故人しのぶ 坂本繁二郎画伯の初盆
421	毎日	1969年08月14日	1969-2		霊前で遺業しのぶ知人ら 坂本画伯の初盆
422		1969年	1969-2		坂本画伯の墓参へ 九州陶芸展審査委員長 谷川徹三氏
423	西日本	1969年08月24日	1969-2		八女市の文化施設事業に寄託 故坂本繁二郎画伯の香典返し
424	毎日	1969年08月24日	1969-2		八女市の文化発展のために 坂本薫未亡人が香典返しにかえて30万円を寄付
425	西日本	1969年08月31日	1969-2		遺族に守られしめやかに 坂本画伯の納骨式
426	毎日	1969年08月31日	1969-2		関係者に見守られ 坂本画伯の遺骨納める
427	読売	1969年08月31日	1969-2		故坂本画伯の納骨式
428	西日本	1969年09月25日	1969-1		1日から有馬記念館で 坂本繁二郎をしのぶ特別展 書簡、遺品なども展示
429	西日本	1969年09月29日	1969-1		“馬”や“能面”シリーズ 来月3日から福岡市で 坂本繁二郎展
430	毎日	1969年09月30日	1969-1		巨匠・坂本繁二郎をしのぶ あすから特別展
431	読売	1969年09月30日	1969-1		坂本繁二郎をしのぶ作品展 久留米ですから 本文：…十月一日から十一月三十日まで、久留米篠山町の有馬記念館二階ホールで開かれる…
432	西日本	1969年10月01日	1969-1		〈展覧会〉 坂本繁二郎をしのぶ特別展
433	朝日	1969年10月02日	1969-1		色紙「はぜ」など106点 故坂本画伯 特別展はじまる
434	読売	1969年10月02日	1969-1		坂本画伯しのぶ特別展 ゆかりの久留米で始まる
435	西日本	1969年10月03日	1969-1		坂本繁二郎特別展から (1) 本とロウソク
436	毎日	1969年10月03日	1969-1		〈展覧会〉「坂本繁二郎展」 本文：12日まで、福岡市天神二、住友生命ビル2階、福岡フォルム画廊…
437	西日本	1969年10月04日	1969-1		坂本繁二郎特別展から (2) 収穫
438	毎日	1969年10月04日	1969-1		坂本画伯の遺作展開幕 本文：三日から…フォルム画廊で始まった…
439	西日本	1969年10月05日	1969-1		坂本繁二郎特別展から (3) 三勇士デッサン
440	西日本	1969年10月07日	1969-1		坂本繁二郎特別展から (5) 版画・馬
441	西日本	1969年10月07日	1969-1	岸田勉	坂本繁二郎にみる野望と反俗 『よき穴あらば新聞社に…』
442	西日本	1969年10月08日	1969-1		〈美術〉 にじみ出る人柄 ふたつの坂本繁二郎展
443	フクニチ	1969年10月08日	1969-1		〈展覧会〉 坂本繁二郎展
444	読売	1969年10月08日	1969-1		〈展覧会案内〉 坂本繁二郎展
445	西日本	1969年10月09日	1969-1		〈画廊〉 坂本芸術の流れ 故坂本繁二郎作品展
446	西日本	1969年10月09日	1969-1		坂本繁二郎特別展から (7) 詩集表紙装画『地下水』
447	西日本	1969年10月10日	1969-1		坂本繁二郎特別展から (8) 暁の富士
448	西日本	1969年10月11日	1969-1		坂本繁二郎特別展から (9) 遺品『チャンチャンコ』

449	西日本	1969年10月21日	1969-2		『母の像』から新しい詩発見 “いたわりの心”切々 母思いだった坂本画伯
450	西日本	1969年10月23日	1969-2		本文：故坂本繁二郎画伯の傑作『母の像』の裏面に…
451	毎日	1969年10月24日	1969-1		あすから八女市文化祭 坂本画伯追悼記念
452	朝日	1969年10月25日	1969-2		坂本記念館建設へ 八女市 市民運動盛上げ
453	日本経済	1969年10月27日	1969-4		坂本繁二郎 私の絵私のところ 日本経済新聞社 〈広告〉
454	西日本	1969年11月01日	1969-1		坂本画伯を追悼 八女市文化祭の洋画展
455	読売	1969年11月01日	1969-1		坂本画伯しのび盛り上がる 八女市民洋画展開く
456	西日本	1969年11月07日	1969-2	谷口記者	坂本繁二郎の絶筆“月光”を確認
457	西日本	1969年11月13日	1969-3		坂本繁二郎画伯をしのぶ 座談会
458	朝日	1969年12月03日	1969-2		〈点描〉 一位は坂本画伯の死去 九州文化10大ニュース
459	朝日	1969年12月12日	1969-1		坂本繁二郎追悼展 代表作を約120点 福岡 来月13-18日 全国5会場 主催朝日新聞社 〈社告〉
460	西日本	1969年12月12日	1969-1		坂本繁二郎追悼展 西日本新聞社 〈社告〉
461	朝日	1969年12月13日	1969-1	豊田勝秋	坂本繁二郎追悼展に期待する
462	読売	1969年12月16日	1969-1		坂本繁二郎の追悼展 来月福岡で
463	朝日	1969年12月27日	1969-1		坂本繁二郎追悼展 きょうから前売券発売 〈社告〉
464	西日本	1969年12月27日	1969-1		坂本繁二郎追悼展 前売り券発売開始 〈社告〉
465	西日本	1969年12月31日	1969-2		坂本繁二郎画伯逝く

美術館案内

Guide to the Museums

ブリヂストン美術館

所在地 東京都中央区京橋1-10-1(〒104)
TEL. (03)3563-0241

開館時間 4月～10月 午前10時～午後6時
11月～3月 午前10時～午後5時30分

休館 毎月曜日 年末年始(12月28日～1月4日)

入場料 個人：
一般¥500 大・高生¥400 中・小生¥200
団体(15名以上)：
一般¥400 大・高生¥300 中・小生¥150
なお、特別展の場合は変更することがある。

石橋美術館

所在地 福岡県久留米市野中町1015(〒830)
TEL. (0942)39-1131

開館時間 午前9時30分～午後5時

休館 毎月曜日 年末年始(12月28日～1月4日)

入場料 個人：
一般¥300 大・高生¥200 中・小生¥150
団体(20名以上)：
一般¥250 大・高生¥150 中・小生¥80
なお、特別展の場合は変更することがある。

Bridgestone Museum of Art

Address 10-1, Kyobashi 1-chome, Chuo-ku,
Tokyo 104, Japan
Phone: (03) 3563-0241

Museum Hours Open daily except Monday
10:00a.m.-6:00p.m.(from April
through October)
10:00a.m.-5:30p.m.(from November
through March)
Closed from December 28 to
January 4

Admission Adults ¥500
Students ¥400
Children under 15 ¥200

Ishibashi Museum of Art

Address 1015, Nonaka-machi, Kurume-shi,
Fukuoka-ken 830, Japan
Phone: (0942)39-1131

Museum Hours Open daily except Monday from
9:30a.m. to 5:00p.m.
Closed from December 28 to
January 4

Admission Adults ¥300
Students ¥200
Children under 15 ¥150

石橋財団職員

常務理事 大原 譲

事務局 局長 朝比奈仙二
渡辺 瞳
押本仁子
小原田鶴子
石黒経子
土屋益子

ブリヂストン美術館

館 長 嘉門安雄
事務部 事務部長 尾島 聰
中村邦子
柴田孝三
野村芳雄
加藤田裕敏
渡辺清美
青柳真子
金子伸子
原 永子
学芸部 学芸部長(兼) 嘉門安雄
学芸課長 宮崎克己
中田裕子
古城寺尚子
塚田美香子
田中千秋
貝塚 健
中村節子

石橋美術館

館 長 中川 洋
事務部 事務部長 平井麟之輔
野田朋子
富松弘美
原 朋子
学芸課 学芸課長 田内正宏
学芸課・課長 橋富博喜
杉本秀子
後藤純子
植野健造

1994年3月31日現在

石橋財団
ブリヂストン美術館
石橋美術館
館報 第42号(1993年度)
1994年10月発行

編集・発行
石橋財団石橋美術館
制作
瞬報社写真印刷(株)

